

「声」に寄り添う

「参加」を支える

## 日本聴覚障害学生 高等教育支援シンポジウム 報告書



2019年11月24日（日）

会場 大阪大学 吹田キャンパス

主催 国立大学法人 筑波技術大学  
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）  
共催 大阪大学 キャンパスライフ健康支援センター  
協力 大阪教育大学 障がい学生修学支援ルーム  
関西大学 学生相談・支援センター  
関西学院大学 学生活動支援機構総合支援センター  
京都大学 学生総合支援センター障害学生支援ルーム  
京都産業大学 障害学生教育支援センター  
同志社大学 学生支援センター障がい学生支援室  
立命館大学 障害学生支援室  
特定非営利活動法人 ゆに

後援 文部科学省  
独立行政法人 日本学生支援機構（JASSO）  
一般財団法人 全日本ろうあ連盟  
社会福祉法人 日本視覚障害者団体連合  
特定非営利活動法人 大学コンソーシアム大阪  
特定非営利活動法人 南大阪地域大学コンソーシアム  
公益財団法人 大学コンソーシアム京都  
東京大学 障害と高等教育に関するプラットフォーム形成事業（PHED）  
京都大学 高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）



## はじめに



第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 大会長  
筑波技術大学 学長 石原保志

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムが、大阪大学キャンパスライフ健康支援センターとの共催、ならびに関西地区の大学・機関の協力により、大阪大学を会場として開催され、全国各地から 446 名の方にご参加いただきました。本シンポジウムの開催準備にあたり、多大なご協力をいただいた関西地区の実行委員校の皆様、各企画をご担当いただいた皆様、そしてご参加いただいた全ての皆様に深く御礼申し上げます。

今回のシンポジウムは、「『声』に寄り添う・『参加』を支える」を全体テーマに据え、様々な企画が行われました。セミナーとしては、支援提供までの流れとポイントについて聴覚障害学生・高校生・教職員がそれぞれの立場で学ぶことができる基礎講座、手話通訳支援の先進的事例から考える、大学における手話通訳ニーズとコーディネート体制のあり方に関する企画が行われました。また、セッション企画として、16 大学による実践事例コンテスト、教職員による聴覚障害学生支援実践発表も行われ、会場に多くの参加者が足を運び、各大学・機関での取り組みについて活発な情報交換が行われていました。全体企画の「聴覚障害学生の『参加』を支える支援—話し合い場面から考える—」においては、聴覚障害当事者、支援担当教職員などそれぞれの視点から、真に聴覚障害学生の『参加』を支えるための支援のあり方について熱心な議論が交わされました。また、前日特別企画は、「アセスメントに基づいた合理的配慮と支援プランの作成」「支援技術のさらに効果的な利用に向けて」「先輩から学ぼう」の 3 つのテーマで行われ、ディスカッションやワークを通じて、全体テーマについて考えを深めることができました。

PEPNet・Japan のシンポジウムは、障害学生と支援学生、そして教職員が一堂に会し、共に学ぶことができるという点に大きな特徴があります。今回も活発な意見交換や交流が行われ、本シンポジウムならではの成果があったと感じます。

今回のシンポジウムで得られた知見は、各企画の報告に詳細が記されています。是非、ご活用いただければ幸甚に存じます。

PEPNet・Japan が活動を始めて 15 年、聴覚障害学生支援において先駆的な取り組みを行い、また、支援の全国的な底上げをはかってまいりました。そして今、支援体制の充実が全国に広まりつつある状況の中で、『声』に寄り添った支援のあり方について一人ひとりが改めて考え、今後の聴覚障害学生支援が更に発展していくことを願っています。



# もくじ

1. 開催要項	2
2. プログラムおよび前日特別企画概要	4
3. シンポジウム企画報告	
1) セミナー1 基礎講座「学ぼう！知ろう！支援の仕方・使い方」	10
2) セミナー2 手話通訳ニーズに応えるためのコーディネート体制のあり方	20
3) 全体会企画「聴覚障害学生の『参加』を支える支援—話し合い場面から考える—」	34
4) セッション企画	
①聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2019	60
②教職員による聴覚障害学生支援実践発表 2019	64
③関連団体活動紹介	66
④聴覚障害学生支援に関する個別相談	68
4. 前日特別企画報告	
1) ワークショップ「アセスメントに基づいた合理的配慮と支援プランの作成」	72
2) 支援技術のさらに効果的な利用に向けて—活用事例紹介・利用体験を通して—	
①ワークショップ報告	98
②機器体験報告	127
3) 先輩から学ぼう！—大学での学びとキャリア形成—	137
4) コラム「学生交流企画」	166
5. 聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2019 受賞ポスター	167
6. 実行委員一覧	173





## 開催要項



- 名 称 : 第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム
- 目 的 : 筑波技術大学に事務局を置く日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）では、特に聴覚障害学生への支援体制が充実し、積極的な取り組みを行ってきている大学・機関と共同で、聴覚障害学生支援に関するノウハウを積み重ね、先駆的な事例の開拓を行ってきた。そして障害者差別解消法の施行をはじめとする昨今の情勢の変化を受け、本ネットワークは 2018 年度から新体制をスタートさせ、より広く強固なネットワークの構築を目指している。
- 本シンポジウムでは、全国の大学における聴覚障害学生への支援実践に関する情報を交換するとともに、本ネットワークの活動成果をより多くの大学・機関に対して発信することで、今後の高等教育機関における聴覚障害学生支援体制発展に寄与することを目的とする。
- 日 時 : 2019 年 11 月 24 日（日）10 時～15 時 30 分  
※11 月 23 日（土）13 時～16 時には「前日特別企画」を実施
- 会 場 : 大阪大学 吹田キャンパス コンベンションセンター 他  
（大阪府吹田市山田丘 1-1）
- 対 象 : 全国の大学等で障害学生支援を担当する教職員、及び聴覚障害学生、支援者  
その他高等教育機関における障害学生支援に関心のある方々
- 主 催 : 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）  
国立大学法人 筑波技術大学
- 共 催 : 大阪大学 キャンパスライフ健康支援センター
- 協 力 : 大阪教育大学 障がい学生修学支援ルーム  
関西大学 学生相談・支援センター  
関西学院大学 学生生活動支援機構 総合支援センター  
京都大学 学生総合支援センター 障害学生支援ルーム  
京都産業大学 障害学生教育支援センター  
同志社大学 学生支援センター 障がい学生支援室  
立命館大学 障害学生支援室  
特定非営利活動法人 ゆに





- 後援 : 文部科学省  
独立行政法人 日本学生支援機構 (JASSO)  
一般財団法人 全日本ろうあ連盟  
社会福祉法人 日本視覚障害者団体連合  
特定非営利活動法人 大学コンソーシアム大阪  
特定非営利活動法人 南大阪地域大学コンソーシアム  
公益財団法人 大学コンソーシアム京都  
東京大学 障害と高等教育に関する  
プラットフォーム形成事業 (PHED)  
京都大学 高等教育アクセシビリティプラットフォーム (HEAP)
- 参加費 : 無料
- 大会長 : 石原 保志 (筑波技術大学)
- 実行委員長 : 守山 敏樹 (大阪大学)
- 副実行委員長 : 太刀掛俊之 (大阪大学)
- 事務局長 : 白澤 麻弓 (筑波技術大学)
- 幹事 : 萩原 彩子 (筑波技術大学)  
中島亜紀子 (筑波技術大学)  
磯田 恭子 (筑波技術大学)
- 実行委員 : 望月 直人・中野 聡子・楠 敬太・藤本富美枝 (大阪大学)  
井坂 行男 (大阪教育大学)  
藤原 隆宏 (関西大学)  
藤田 望・生野 茜 (関西学院大学)  
村田 淳・辻井 美帆 (京都大学)  
仲兼久知枝・脇坂 紗帆 (京都産業大学)  
土橋恵美子・日下部隆則・佐久川陽介・山本 理絵 (同志社大学)  
窪崎 泰紀 (特定非営利活動法人 ゆに)  
三好 茂樹・河野 純大・松久保大作・石野麻衣子・吉田 未来・  
関戸 美音 (筑波技術大学)
- ※所属は実施当時
- 協力 : 学生アルバイトの皆様  
(大阪大学・立命館大学・筑波大学・筑波技術大学)

## プログラム

11 月 24 日（日）受付 9 時 30 分～

午前 全体会 I / セッション企画

	聴覚障害学生に関する 実践事例コンテスト 【体育館】	教職員実践事例発表 【体育館】	関連団体活動紹介 【1 階ホワイエ/体育館】
10:45			
11:15	10:45～12:30  ■前半発表 (10:45～11:35) ・東京学芸大学 ・千葉大学 ・九州ルーテル学院大学 ・松山大学 ・愛媛大学 ・東北福祉大学 ・札幌学院大学 ・関西大学  ■後半発表 (11:40～12:30) ・首都大学東京 ・九州大学 ・北星学園大学 ・日本福祉大学 ・宮城教育大学 ・東北大学 ・愛知教育大学 ・大阪教育大学	10:45～12:30 <u>《教職員の方のみ閲覧可》</u>  ※発表者在席時間は 11:15～12:05 ※その他の時間帯は ポスター掲示のみ  ・宮城教育大学 ・群馬大学 ・群馬医療福祉大学 ・東京女子体育大学 ・東京農業大学 ・目白大学・目白大学短期 大学部 ・小田原短期大学 ・大阪府立大学 ・九州ルーテル学院大学	10:45～12:30 【1 階ホワイエ】 ■正会員大学・機関紹介 パネル展示 ■実行委員校紹介・機関 パネル展示 ・大阪大学 ・大阪教育大学 ・関西大学 ・関西学院大学 ・京都大学 ・京都産業大学 ・同志社大学 ・特定非営利活動法人ゆに  【体育館】 ■関連団体紹介展示 ・東京大学 障害と高等教育に 関するプラットフォーム形 成事業（PHED） ・京都大学 高等教育アクセシ ビリティプラットフォーム （HEAP） ・大阪聴覚障害者協会 ・ソノヴァ・ジャパン株式会社 ・全日本ろう学生懇談会 ・筑波技術大学 他
12:30			
13:30	12:30～13:15 ポスターのみ閲覧可能	12:30～13:15 ポスター掲示のみ ※この時間帯は <u>教職員以外の方も、</u> <u>全ての参加者の方が</u> 閲覧可能	



【 】内は会場

	全体会 I / セミナー 1 【 3 階 MOホール】	セミナー 2 【 2 階 会議室 2】	個別相談 【 2 階 会議室 3】
10:00	10:00～10:30 全体会 I ・コンテスト参加団体 30 秒アピール		
10:30	移動・休憩		
10:45	10:45～12:00  セミナー 1 基礎講座 「学ぼう！知ろう！支援の 仕方・使い方」  司会： 辻井美帆（京都大学） 講師： 土橋恵美子（同志社大学） 藪田みゆき （同志社大学 障がい学生 支援制度利用学生 OG）	10:45～12:00  セミナー 2 「手話通訳ニーズに応える ためのコーディネート体 制のあり方」  司会： 白澤麻弓（筑波技術大学） 講師： 松崎 丈（宮城教育大学）	
12:00			12:00～12:30 個別相談（1 枠目）
12:30			12:35～13:05 個別相談（2 枠目）
13:05			

午後 全体会Ⅱ

【 】内は会場

	全体会Ⅱ 【3階 MOホール】
13:30	・開会行事
13:45	・全体会企画 パネルディスカッション 「聴覚障害学生の『参加』を支える支援 —話し合い場面から考える—」  司会：村田 淳（京都大学） 講師：中野聡子（大阪大学） 有海順子（山形大学） 小佐野貴恵（山梨県立ろう学校）
15:00	・聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2019 表彰式
15:20	・閉会挨拶
15:30	終了

※所属は実施当時





## 前日特別企画 概要

前日特別企画は、聴覚障害学生支援に関わるトピックスを取り上げ、ディスカッションやワークを通じて各テーマへの理解を深めるとともに、参加者同士の情報交換を行い、各大学等における支援の充実と発展に寄与することを目的とする。

日時：11月23日（土） 13:00～16:00

会場：大阪大学 吹田キャンパス コンベンションセンター（大阪府吹田市山田丘1-1）

	対象	タイトル／概要／講師	定員
1	教職員	<p>ワークショップ</p> <p>「アセスメントに基づいた合理的配慮と支援プランの作成」</p> <p>聴覚障害に限らず障害学生支援のアセスメント及び支援計画作成における基本的な考え方・方針を踏まえたうえで、聴覚障害学生へのアセスメント・支援計画作成におけるポイントについて、話題提供を行う。また、架空事例をもとにしたアセスメントや支援計画を検討するグループワークを行う。</p> <p>司会：中野聡子（大阪大学）</p> <p>講師：諏訪絵里子（大阪大学） 池谷航介（岡山大学） 金澤貴之（群馬大学）</p> <p>グループファシリテーター：</p> <p>望月直人（大阪大学） 藤原隆宏（関西大学） 生野 茜（関西学院大学） 脇坂紗帆（京都産業大学） 中津真美（東京大学） 前原明日香（宮城教育大学） 藤野友紀（札幌学院大学） 船越高樹（京都大学）</p>	45名

	対象	タイトル／概要／講師	定員
2	教職員 学生 その他	<p>「支援技術のさらに効果的な利用に向けて ―活用事例紹介・利用体験を通して―」</p> <p>遠隔情報保障技術や音声認識技術、映像教材への字幕挿入などの支援技術を円滑に活用するためのノウハウを共有することを目的として、成功事例や失敗事例、各大学で作成されているマニュアル等も参照しながら、運用時のポイントを確認していく。</p> <p>司会：楠 敬太（大阪大学） 仲兼久知枝（京都産業大学）</p> <p>講師：三好茂樹（筑波技術大学） 太田琢磨（愛媛大学） 岡田孝和（明治学院大学）</p>	60名
3	教職員 学生 その他	<p>「先輩から学ぼう！ ―大学での学びとキャリア形成―」</p> <p>聴覚障害のある社会人の先輩や現役の聴覚障害学生から経験や思い、生き方について話を聞く機会を設け、それをもとに自身のキャリアプランを具体的に描いていくワークショップを実施する。</p> <p>企画コーディネーター： 日下部隆則（同志社大学）</p> <p>司会：阪田真己子（同志社大学）</p> <p>講師：井坂行男（大阪教育大学） 廣田喜春 （公益社団法人大阪聴力障害者協会） 志磨村早紀（元 早稲田大学） 濱松晃大（関西学院大学 学生）</p>	60名

※所属は実施当時





# シンポジウム 企画報告



.....  
SYMPOSIUM 2019



## 基礎講座「学ぼう！知ろう！支援の仕方・使い方」 セミナー報告

土橋恵美子<sup>1)</sup>

同志社大学 学生支援センター 障がい学生支援室<sup>1)</sup>

**要旨：**2016 年 4 月に障害者差別解消法が施行され、不当な差別的取り扱いの禁止と合理的配慮の提供が謳われた。大学での障害学生支援は、学生本人から発信する支援の申し出から始まり、多くの大学が試行錯誤しながら 4 年目を迎えるが、まだ、初めての経験でどのように進めれば良いのかわからない大学や、自分にとって必要な支援が何かわからない、といった戸惑いの声が聞かれる。

そこで、実際に受験前から受験、受入、支援、卒業までを共に過ごしたコーディネーターと支援制度利用学生にフォーカスを当て、支援利用の流れと、必要となるポイントについてそれぞれの立場から振り返った。

また、参加者それぞれが各大学に戻った後、すぐにアクションを起こせるよう、ノウハウや活用可能な資料がどこにまとめられていて、どのように活用できるのかについても紹介した。

**キーワード：** 必要な支援，求める支援，自らの発信，授業への参加

### 1. はじめに

大学での障害学生支援は、学生本人が支援利用の申し出を行うことから始まる。高校までの学びかたとは大きく異なり、学生自身がニーズを示し、自分にとって必要な支援を求めていくことが必要とされるが、初めての経験でどのように大学と話し合いを進めれば良いのかわからない、との戸惑いの声が多く聞かれる。

また、初めて聴覚障害学生を受け入れた大学の担当者からも、どのように支援体制を構築すれば良いのか、学生のニーズをどのように引き出せば良いのかわからないという相談も多く寄せられる。そうした大学に向けたノウハウや活用可能な資料がどこにまとめられていて、どのように活用できるのかについても、共有される機会はあまり多くない。

本企画では、これから大学等に進学し支援利用を希望する高校生や大学で支援ニーズをうまく伝えられていない学生と、これから支援を提供する教職員を主な対象として、聴覚障害学生支援の流れ、および当事者から大学生活での戸惑いの経験をもとに、円滑な支援提供への後押しとなることを期待して実施した。





## 2. 内容

### 2.1 支援の実際について

本企画は同志社大学 学生支援センター 障がい学生支援室 チーフコーディネーターの土橋恵美子（筆者）および同志社大学卒業生の藪田みゆき氏が講師を務め、辻井美帆氏（京都大学 学生総合支援センター 障害学生支援ルーム）の司会により進行された。ここでは、コーディネーターと利用学生として共に関わりあった期間を振り返り、これから大学進学を目指す中学生・高校生、また支援担当教職員にできるだけありのままを伝えたく、対話での掲載としている。



図1 辻井氏  
（写真）

#### 2.1.1 高校までと大学での学びの違いについて

土橋／高校までと大学はどう違うのか、

大学に入ってからどういう支援を求めたら良いのかについて、藪田さんご自身が感じたこと・体験されたことを元に伺いたい。

藪田／私は幼稚部から高等部まで聾学校に通っていたので、一般校に通ったのは大学が初めてだった。そのため、一般校を経験している聾学生と比較する

と、大学に入ってから差を大きく感じたように思う。特に戸惑ったのが、「自分で時間割を組む」ということ。入学式後の一週間で時間割を自ら作成し、すぐに授業が始まる、という流れだが、時間割の作成は「情報戦」になる。例えばこの先生の授業が面白いとか、この免許を取るために必ず取らなければならない授業はこれ、などの情報を同級生は先輩などから得ていたと思うが、私はそうしたことも知らなかった。また、単に情報を得られないことだけでなく、必修授業の中で聞き取りを求められる授業、例えばリスニングが中心となる英語の授業や、第二外国語はどうするのか。そもそも第二外国語に対応できる支援スタッフがいるのか。体育の実技など様々な形態の授業にどう対応すればいいのか、どんな選択をすればより良い大学生活を過ごしていけるのかを考えた。しかし、より良い大学生活とはいったい何なのか？といったことから非常に戸惑いを感じた。また、入学前から障害学生支援制度があることを知ってはいたが、実験・実習やフィールドワーク系の授業での支援は、具体的なイ

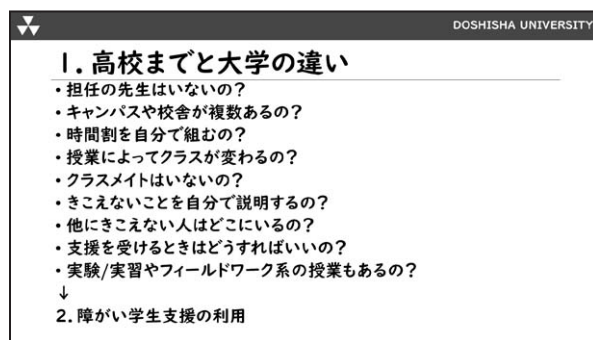


図2 高校までと大学の違い

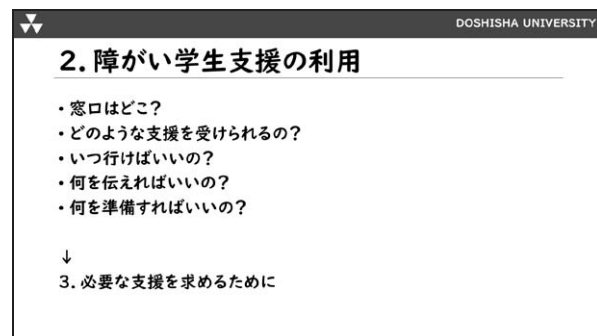


図3 障がい学生支援の利用

メールをもつことができなかった。そのように常々悩みながら、障害学生支援室の職員と相談をしながら大学生活が始まった。

## 2.1.2 障がい学生支援の利用について・必要な支援を求めるために

土橋／障害学生支援を利用するにあたって、窓口で必ず最初に言われることをスライドに示した（図 3 参照）。

そもそも窓口はどこ？というところから始まる。「障害学生支援の窓口は障害学生支援室」とは言いながらも、大学は縦割りの体制のため、授業の履修申請は在籍学部事務室、免許取得の手続きは教務の免許係など、非常にわかりにくいシステムになっている。このように窓口が一つでないことを高校生の早い段階で知っていてほしい。

さらに、2016 年の 4 月に障害者差別解消法が施行され、大学に対して「合理的配慮」としての支援を求める権利があることを知っていてほしい（図 4 参照）。これまで障害のある学生は、困ってはいるものの何を相談すればいいのかわからないし、支援室職員側も何て答えていいかわからない、そんなところからスタートしていた。従来は障害学生の代弁者的な形で我々現場の者が関わり、「この学生はこういうことに困っています」と学部や担当の先生へ一緒に伝えていた。法律が施行された現在は、合理的配慮としての支援を求める権利が学生にあり、大学には配慮を提供する義務が課された。それにより、これまでは代弁者だったのが、出てきた声を大学に繋げる仲介者としての本来のコーディネート業務に移行してきている。そこで、必要な支援を自分の声で伝えることが重要になってきた。

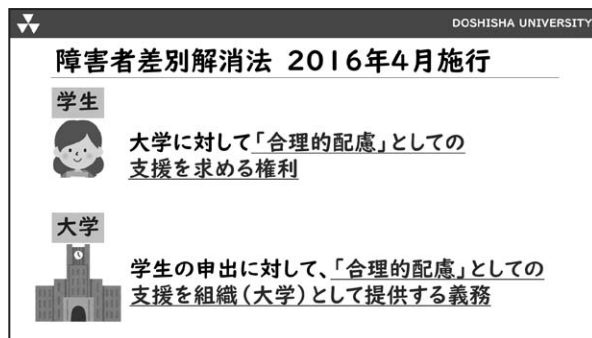


図 4 障害者差別解消法の施行

「この学生はこういうことに困っています」と学部や担当の先生へ一緒に伝えていた。法律が施行された現在は、合理的配慮としての支援を求める権利が学生にあり、大学には配慮を提供する義務が課された。それにより、これまでは代弁者だったのが、出てきた声を大学に繋げる仲介者としての本来のコーディネート業務に移行してきている。そこで、必要な支援を自分の声で伝えることが重要になってきた。

藪田さんが在籍していた期間は、法整備が謳われる前で支援室の体制も過渡期であり、一緒に考えながらお願いしてきた。その後、一緒になって考える先に、誰が何をどうしてほしいのかを伝えなければ我慢を強いられることに直面し、藪田さん自身が自分の声で発言する・周りに伝える必要性が出てきた。必要な支援を求めるために、実際に経験されたことを聞かせてほしい。

藪田／必要な支援を求めるために最初に必要になってくるのは、自分の聴覚障害がどんなものであるのかをきちんと把

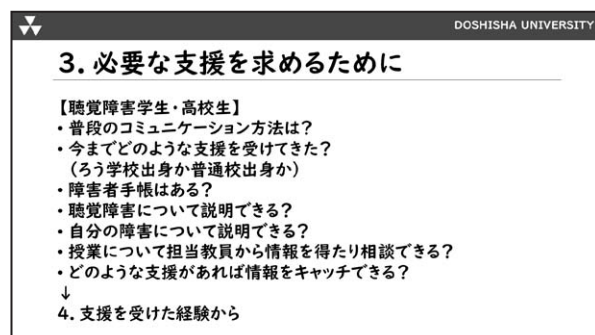


図 5 必要な支援を求めるために



握をすること（図 5 参照）。それは高校生のうちに是非考えてほしいが、大学に入ってから、折に触れて考えていかなければいけないことに気がついた。

1 つ大きな失敗をした体験を話したい。私は聾学校出身のため、高校を卒業するまでは、手話でコミュニケーションをとっていた。聾学校の時には、自分が支援を受けていると感じることはあまりなかった。聞こえないことが当たり前の世界であり、手話は当然のように身の周りにあった。

大学へ入学してすぐの頃に、学科のオリエンテーションの中で 60 人の学生が一人ずつ自己紹介をする時間があった。そして、最後に私にマイクが回ってきた。私は自分の声は少し変わっていても、周りの人にも通じる声だろうと思っていた。自分の家族や聾学校の先生方には声だけで話ができることも多かったので、その時も回ってきたマイクを持って、名前と、耳が聞こえないということを伝え、「よろしくお願いします」と挨拶をした。その時私はパソコン通訳を受けていたが、隣で通訳を担当していた支援学生がマイクを持って何か話をして、その場が終わった。

3 年生になった頃、同じクラスの友人に「実はオリエンテーションの時は、藪田の声は全く誰にも聞き取れなかったよ」と言われた。その場で誰にも声が通じなかった、だからパソコン通訳のスタッフが代わりに伝えてくれていたと教えられた。大学生活を送る中で自分の声は伝わりにくいのだと思うようになっていたが、2 年後に聞かされてやっぱりそうだったんだとわかった。そのことから、私の障害は「情報を得る」という面だけでなく、「自分から情報を発信する」という面においても課題があることを初めて認識した。それから支援制度の利用の仕方や考え方も変わっていった。

自分の障害について、聾学校を卒業する時にはきちんとわかっているつもりでいたが、実際に健聴者が大勢いる世界に入ってみると、そこで初めて気づかされ、打ちのめされることも度々あった。そうした経験を通して、授業についても『これはこの方法で受けたい』と、次第に自分のニーズが見えてくるようになった。

ニーズが見えてきた次には、同じ授業を受けている友人や担当の先生にニーズを伝えることが必要になる。細かい所ではあるが、大学の定期試験を受ける際に「試験終了まで残り何分」と先生から指示される。その内容について、最初は板書を依頼していた。けれども実際に試験を受けてみると、回答に集中しているため板書の情報に気がつかないときがあることがわかった。そこで、板書したことを知らせてもらうために、机をコンコンとたたいて知らせてもらうという支援を新しくお願いするようになった。このように少しずつアップデートを積み重ね、大学生活を過ごすことができたと思っている。

### 2.1.3 支援を受けた経験から

藪田／次に、実際に支援を受けた経験から話をしたい（図 6 参照）。高校生の時からオープンキャンパスや説明会に参加し、自分の障害のことを伝え、大学に入った時に支援を受けることができるかどうかを相談することが大事だと思う。相談を受けた大学側に



とっても、もしかしたら障害のある学生が今後入学するかもしれないというメッセージを受け取ることに繋がり、良いきっかけにもなる。


私が受験をしたのは 2009 年で、「合理的配慮」の概念がまだなかった頃である。実際に、事前にある大学へ相談をしたとき「本学ではこれまで聞こえない学生が入学しても、皆途中で辞めて

いった。あなたが入学しても支援はできません」と言われたこともあった。ハッキリと「支援ができない」という情報を私に伝えてくれたことは、その大学にとっての誠意であったのかなと今では思っている。

入試に向けて、高校を通じて大学と相談をして、様々な支援を受けて試験を受けることができた。同志社大学の試験では、面接時に手話通訳も配置されていた。筆記試験の場合にも、ある大学では試験前の説明を紙で渡していただき、試験終了時には肩を叩いて知らせてもらった。また、センター試験の際には英語のリスニング試験を免除してもらったが、免除のためには試験を受けるかなり前、8月～9月の頃に大学入試センター事務局に配慮申請をしなくてはならない。高校生のできるだけ早い時期に受験したい大学の試験方法を調べ、どんなことで困るのかを考えた上で、高校とも相談して進めて行くことが大切だと思う。

合格してからは、入学前の2月～3月の頃に大学に相談に行くことを強くお勧めしたい。相談の相手は、支援を担当する部署の職員、進学する学部の事務職員と学科の代表の先生。この三者とは、入学前に自分の障害について説明をし、こういった支援を受けたいという具体的な相談をすることが必要になる。大学は縦割りの組織で動いているため、支援室だけが頑張っている、学部や先生の理解がなければうまく進まないことが多い。また、入学以降にわかったことだが、支援を受ける中でもニーズは変化する。私の場合は、自分が情報を発信するという面に課題があることに気がついた。それを感じたのは、3年生のゼミが始まる頃だった。多くの大学では、学年が上がるにつれて少人数で意見交換をしたり、議論することが中心の授業が増えていく。私の場合には支援室と十分に相談をして、授業に応じてパソコン通訳の画面を投影するためのプロジェクターを借りる方法を取った。それにより、同じ授業を受けている友人や先生にも、藪田には今どこまで情報が伝わっているのかを共有してもらえる。また、自分が発言する際にはパソコン通訳のパソコンを使い入力し、プロジェクターに映したものを見てもらう形にした。これは入学前には必要性を感じなかった支援の方法であり、実現には周囲の学生や先生に協力を得ることが不可欠であった。

様々な支援の方法があるが、授業によってもそのスタイルは変わってくる。私は考古学

DOSHISHA UNIVERSITY

### 4. 支援を受けた経験から

【聴覚障害学生・高校生へ】

- ・高校生の時からオープンキャンパス、合同説明会などで相談する
- ・入学試験を受ける際の支援について確認する
- ・合格後～入学前～入学後も継続して相談する
- ・入学してからわかることや支援を受ける中で変わるニーズもある
- ・周囲の学生や先生にも協力してもらう
- ・支援してくれるスタッフとの距離や関係を確認しあう
- ・支援は年度の途中からでも利用できる!

↓

5. 必要な支援を提供するために

図 6 支援を受けた経験から



を専攻していたので、実習の授業が多くあった。特に悩んだのが、学芸員の資格を取るために5日間の博物館実習をするというものである。最初、大学の免許窓口で相談した際には、「あなたは聞こえないから、大学付属の博物館で実習を受けるというのはどうか？そのほうが大学としても支援がしやすいから」と提案された。私としては、専攻の内容に長けている博物館で実習を受けたかったため、改めて支援室と学部事務室、授業担当の先生の三者に相談した。その結果、希望していた大阪の博物館で実習を受けられることになり、5日間の実習期間は大学から離れた博物館にノートテイクスタッフが2人同行してくれることになった。

自分が支援を受けているということと、自分がどのような授業を受けてどんな学生生活を送りたいのか、そのバランスで悩むこともあると思うが、そうした時こそ支援室や大学側との綿密なコミュニケーションが必要になってくる。支援制度で提供される形が全ての授業にぴったりはまることはないと思う。

特に座学が中心の1～2年生よりも3～4年生と学年が上がるにつれて、様々な授業スタイルに変化していく。その変化に応じて、担当の先生方や支援室職員、さらに同じ授業を受ける仲間に対して、自分のニーズをうまく伝えられるように整理していく経験は、大学在籍中だけでなく、就職活動や就職後にも非常に役立っていると感じている。



図7 筆者（土橋）、藪田氏  
（写真）

土橋／藪田さんと8年間一緒にやってきたことを思い出しながら聞いていた。

支援方法や藪田さんのニーズが変化したことで、手書きだけがいい場合もあれば、手書きとパソコン通訳の併用がいいという場合もある。また、特にこの分野の専門の人をお願いしたい、という専門性への希望にも広がっていった。

支援の変化が起こる中で、「話されている内容がわかる」、あるいは「自分の考えを伝えられる」という一方で、「打ちのめされた」という言葉が胸に刺さった。藪田さんは自分の声が周りの人にとっては聞き取りにくいことを受け止め、課題としてもっている。聾学校では幼稚部から高等部まで仲間や先生方と関わる時間が長いので、声に慣れてもらえるが、付き合いが浅い場合にはなかなか聞き取ってもらえない。そうした中で新たに「声」という壁が出てきて、打ちのめされたという経験を話していただいた。声に限らず、聞こえないことによる自分自身の気持ちの波があったと思うが、落ち込んだ時に、そこから這い上がれないことや時期が大学生活の中であったのか、あった場合にはどうやって乗り越えたのか、お話いただきたい。

藪田／所属していた考古学のゼミでは、週1回夜の時間帯に学生や外部の研究者が参加して研究会を行っていた。研究会は正課の講義ではないので支援制度は利用できず、研究



室の仲間や先生たちにどんな協力を得れば良いのか悩んだ。研究会が終わった後に「質問はありますか？」と聞かれて意見を述べる時に、必ず最初に「ご発表の中で仰っていて、私が聞き漏らしているかもしれませんが」という言葉をつけるようにしていた。同じ場所にいるのに、どうしても自分だけ得られる情報が漏れていたのはわかっていた。友人が参加している時には内容を書いてもらったり、指文字を覚えてくれた後輩にサポートをしてもらうことはあったが、そうでない場合には1時間ただレジュメを見て、スライドを見るだけだった。そこには絶対もっと多くの情報があるはずで、それがわかっているのに情報が得られない苦しさはずっと抱いていた。


また、私の指導教員は学生たちとの雑談の中で研究指導されることを大切にされていた。夜になると研究室にいらして、学生に「あれはどうだった？これはどうだった？」と話をしていた。私はそういう話には加わりにくく、苦しい時間だった。「どういう話？」と仲間に聞いても「ちょっと待って、後で」と言われる。時間差でその情報を得た時には、すでにその情報は鮮度を失っており、孤独な日々であった。

そういう時にどのように立ち直ったか。自分の中で割り切るしかなかった。それでも、大学院の最後の頃には音声認識アプリという新しい技術が活用できるようになっていた。専用マイクとアプリがインストールされた iPad を支援室から借用し、研究会で使用するようになった。学内の支援制度の壁があるためスタッフによる支援はできないが、新しい技術やソフトウェアを使用して、どう進めて行くかを周囲の人たちと一緒に考えることができたのは、立ち直る大きなきっかけになったと思う。

土橋／「情報が鮮度を失っている」という表現をされていたが、「後で伝えるから」ということは多かったと思う。後になると当然省かれてしまう情報も多くなる。もちろん、支援スタッフは大事なところを伝えようと頑張ってくれているけれども、“本当にほしい情報”は実はそこではないということがある。授業に通訳で行くと、先生が冗談を言って「ここは

通訳しなくていいよ」と言われることがある。一生懸命担当しているスタッフは、「ここは通訳しなくていいよ」という通訳をする。それを見て先生は怒り、「言わなくていい、って怒られた」と書く。そうしたやり取りがなされるときがあるが、その「通訳しなくていい」情報とその鮮度はすごく大事にしたいところ。話されていることのうち、文末の「～じゃない」とか「やっぱり来週じゃなくて、再来週でいいや」というような一瞬の情報が抜け落ちるところがある。

本シンポジウムの全体テーマが『「声」に寄り添う・「参加」を支える』とあるように、私

 DOSHISHA UNIVERSITY

### 5. 必要な支援を提供するために

【教職員】

- ・コミュニケーションをとるために事前にできることを準備しておく
- ・どのような支援ができるか(できないか)説明できるようにしておく
- ・支援を提供するために必要な書類を準備しておく
- ・一般的な聴覚障害について知識をつけておく
- ・聴覚障害に個人差があることを知っておく
- ・大学で情報発信される場面を想定しておく

↓

6. 資料のダウンロード 7. 資料の活用方法

図 8 必要な支援を提供するために



たち支援担当者が個人のニーズと意向を汲み取り一緒に環境を築いていかななくてはならないと思っている。

合わせて、音声認識アプリの話が出ていた。本来、支援がない所に音声認識技術という新たな機器が入ることで、支援者がつかないし情報保障も配置されていないので行ったことのなかった学会に参加できたという話。誤字・脱字が多くても機器は止まることなく音声で文字にして表示する。その喜び、情報が保障されている・担保されている、そして、居場所を得たことも大きかった、という話を以前藪田さんから聞いた。音声認識アプリの良い所は、人が話せば動く。「人が話す」ということに対してウソをつかない。誤字は多くても、言葉に従順に従ってくれる機器によって、自分の居場所が一つできたという感想だった。あわせて、人の手・頭によって言葉を的確に変換して伝えるところはどうしても外せないところで、機器の活用も外すことができないというのが、現状の仕組みかなと思う。

## 2.2 資料の活用

続いて、初めて支援に携わる教職員の方々やこれから大学進学を目指す中学生・高校生の参考となる資料について紹介を行った。巻末には掲載元の URL も記載しているので、あわせて参照されたい。

### 1) 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan)

#### 「トピック別聴覚障害学生支援ガイド—PEPNet-Japan TipSheet 集—」

聴覚障害学生支援に関する様々な情報をトピック別にまとめた冊子。大学入学前からキャリアサポートに関することまで記載されているので、特に支援関係者の方々には目を通していただきたい。

### 2) 大学コンソーシアム京都「障がい学生支援に関する各種フォーマットについて」

2016年に京都大学・京都産業大学・同志社大学の経験豊富な障害学生支援担当者が集まり、これまでの経験をもとに学内のコーディネート業務で活用可能な資料をまとめ、自由に利用できる形でフォーマットの提供を行っている。初めて支援を担当される場合や、すでにある書式のアップデートの際に参照いただくなど活用していただきたい。

### 3) 日本学生支援機構 「教職員のための障害学生修学支援ガイド」

全ての障害を網羅したガイドで、障害学生支援業務を時系列の場面一覧としてまとめられている。実際、障害学生が入学してからやるべきことは非常に多くあるので、少し早めに準備に取りかけられるようにしていただきたい。また、インテークシートでは大学入学時の面談で確認すべきことがチェック項目になっている。高校までの支援内容などを聞きながらニーズを伺っていくが、これまで受けていた支援がそのまま大学で提供できる訳ではない。かといって大学として「何も支援はできません」と言うことは、配慮の不提供となっ

てしまう。そのため、ニーズを聞いた上で対話を進めて行く手掛かりとしてご活用いただきたい。

### 2.3 会場からの質問を受けて

講師からの発表を受け、参加者からの質問を伺った。

会場／小学校・中学校に在籍する難聴の子どもたちにパソコンによる情報支援をしている。

現状では、高校に上がると情報支援が途切れてしまい、大学に入るとまた情報支援が行われている。大学に入ってすぐスタートできるように、高校生の間に何をしておくべきかを中学生に伝えてあげたいので、ぜひアドバイスをほしい。

土橋／小・中学校は義務教育であることから一定の支援が教育委員会によって行われつつある。高校で義務教育が一旦途切れることで、隙間ができてしまう。その辺りで難しさがある、と大学でも聞くことがある。例えば藪田さんが、小・中学校の時からこういうことをやっておけばよかった、あるいはこうすれば良かった、ということがあれば聞かせてほしい。

藪田／小学部・中学部の段階で「聞こえない自分」というものに出会ったこと、それを理解して自己肯定感をもつことができたことが重要だったと思う。

大学に入ってから、聴覚障害があることで困ることや苦しいことはたくさんあったが、だからといって「聞こえない自分」が嫌になることはなかった。大学に入学して健聴者の世界に飛び込み、しばらくは泣きながら通うこともあった。けれども、自分の心が折れなかったのは、「聞こえない自分」というものに対して、ある意味で誇りをもっていたからではないかと思う。ぜひ支援等で関わる方々からは、子どもさんに対して聞こえない自分を肯定できるような声かけをしていただければと思う。

土橋／大学に入ってから支援のニーズが次々と変わっていく、それを自分では気がつかなかったり、言い出すことができない場合もあると思う。そうした時に、支援担当者に求めるもの、あるいはニーズを聞き取ってもらうためにこういう考え方であってほしい、などあれば聞かせてほしい。支援担当者としては、本人の声をとにかく引き出したいという気持ちから色々と聞いていく。逆に、聴覚障害のある学生さんの側が、教職員あるいは小・中学校や高校の担当者にもっていてほしい考えはあるか。

藪田／聴覚障害と一言言っても個人差が非常に大きいことを、まず頭に入れておいていただきたい。この違いが、支援方法の違いにつながっていく。私の場合、専攻していた学科に聞こえない学生として初めて入学し、数年後にも聞こえない学生が入ってきたが、私に対する支援とその学生への支援は違っていた。前例がこうだったから、次の他の学生にも当てはまるということではなく、個人差があることを考えてほしい。

土橋／我々も柔軟に対話をしていこうというキャパシティが必要だと思われる。





### 3. 到達点と課題

今回は支援利用経験のある聴覚障害学生からの生の声を、戸惑いや挫折の経験なども含めて伺った。支援担当者としても、当時の支援の様子を振り返りつつ、学生のニーズを引き出し、対話を重ねて進めて行く支援のあり方を改めて見つめる機会となった。これから支援提供を始める方々や、これから大学進学を目指す高校生などにとっても、今回のロールモデルからの話は「胸に刺さる」ものがあつたのではないかと思う。2016年に障害者差別解消法が施行されて以来、合理的配慮の提供を義務づけられたが、配慮の提供にあたっては、法の有無に関係なく、本人からのニーズの発信と建設的な対話は欠かせない。当事者の声に耳を傾け、他の学生と同じように参加できる環境を整えることが求められる。今後も多くの大学等で聴覚障害学生の声に寄り添った支援提供がなされることを期待したい。

#### 参考文献

- [1] 大学コンソーシアム京都（2017）障がい学生支援に関する各種フォーマットについて．大学コンソーシアム京都，  
<http://www.consortium.or.jp/project/dss/dssformat>  
（2020年3月6日閲覧）
- [2] 日本学生支援機構（2015）教職員のための障害学生修学支援ガイド．日本学生支援機構，  
[https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu\\_shien/guide\\_kyouzai/guide/index.html](https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/guide_kyouzai/guide/index.html)  
（2020年3月6日閲覧）
- [3] 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）ホームページ（2005～随時更新）．日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク，  
<http://www.pepnet-j.org/>  
（2020年3月6日閲覧）



## 「手話通訳ニーズに応えるためのコーディネート体制のあり方」セミナー報告

白澤麻弓<sup>1)</sup>，松崎丈<sup>2)</sup>，中島亜紀子<sup>1)</sup>

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター<sup>1)</sup>，宮城教育大学 教育学部<sup>2)</sup>

**要旨：**本セミナーでは、大学における手話通訳支援を行っていくためには大学自身が必要なリソースを生み育てていく視点が重要との認識に立ち、実際の事例をもとによりよい手話通訳支援につなげるための体制構築のあり方について議論を行った。ここでは、①地域センターとの連携、②大学への登録と直接依頼、③職員としての雇用という 3 つの事例を紹介したほか、聴覚障害教職員を中心に据えた支援体制構築の可能性について触れた。あわせて、こうした事例の一つとして宮城教育大学における手話通訳活用事例を報告いただき、実際にどのような工夫・指導ができるのかを学んだ。

**キーワード：**聴覚障害学生支援，手話通訳，コーディネート

### 1. はじめに

大学で学ぶ聴覚障害学生の増加にともない、手書きノートテイクやパソコンノートテイクなど、文字による支援については、全国的な広がりが見られている。しかし、手話通訳を利用している大学は少なく、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）の正会員・準会員大学を対象に行った調査の中でも、授業の中で定期的到手話通訳を配置している大学は、70 校中わずか 8 校に過ぎなかった（白澤・吉川・江原，2019）<sup>[1]</sup>。この背景には、技術のある通訳者の不足や地域のリソース不足等が指摘されており、大学において効果的に手話通訳支援を行っていくためには、大学自身の手でリソースを生み育てる努力が不可欠であると考えられる。

そこで、本セミナーでは、以上のような現状をふまえ、限られたリソースの中で実際に専門的な授業における手話通訳支援を導入している大学の事例を複数取り上げながら、手話通訳支援を可能にする体制について議論した。セミナーの中では、まず白澤より平成 30 年度に実施した厚生労働省受託研究の結果<sup>[2]</sup>を元に、手話通訳支援を可能にするために各大学でとられている体制について、いくつかのパターンを提示し、講師の松崎より、宮城教育大学における事例を報告した。以下、それぞれの講師による話題提供の内容を中心に当日の様子を報告する。

### 2. 話題提供 1：大学における手話通訳ニーズとコーディネート体制（白澤麻弓）

#### 2.1 大学における手話通訳ニーズ

大学において手話通訳支援を提供する際、まず問われるのが「文字による支援では不十分なのか？」ということだろう。実際に、現在多くの大学では手書きやパソコンによるノー







トテイク支援が行われており、学生によっては非常に高い技術を有している例もある。これらの支援手段が普及しつつある今、それでも手話通訳が必要な理由は何なのだろうか。この答えを見つけるためには、文字通訳と手話通訳、それぞれの長所・短所を押さえておく必要があるだろう。

まず、文字通訳の最大の特徴は、日本語を日本語のまま伝えられるという点にある。このため、用語や用いた言い回しを正確に伝えることができるという点で非常に長けている。一方で、即時性・双方向性という点では劣る部分もあり、自然な会話に参加しようと思うなら、やはり手話通訳の方が向いている側面は多い。また、文字では抑揚や強弱といった韻律情報が伝達しづらいため、言葉の内容はわかってもその裏にある話者の意図がつかみづらいなど、細部の表現性に欠ける部分がある。この点、話し言葉である手話は、単語に多くの韻律情報を添えて伝える事ができるため、相手の言いたい事がはっきりわかるという利点がある。さらに、話し方が伝わってくるため、聴覚障害学生にとっての言語モデルとして機能するという側面や、対話をしている際のちょっとしたタイミングや意味のズレを通訳者がカバーしたり、さりげなく修正したりしてくれるため、聴覚障害者が活躍しやすい環境づくりにも一役買ってくれるという側面もあるだろう。

ただし、手話通訳にも当然弱点はあるため、手話通訳のみで支援が完結するものではない。むしろ、手話通訳と文字通訳の両方があってはじめて必要な選択肢が揃うものであり、これらを選択あるいは併用できる環境を作っていくことが重要だと考えられる。

## 2.2 コーディネート事例 3 選+1

前項で述べたとおり、文字通訳とは異なる利点をもった手話通訳であるが、大学で導入しようとする、人材やリソースの不足に悩まされる例が多い。そこで、本話題提供では平成 30 年度に筑波技術大学が厚生労働省からの受託を受けて実施した調査結果を元に、リソース不足の中、手話通訳支援に取り組んでいる大学の事例を 3 つのパターンにわけて紹介したい。

### 2.2.1 地域センターとの連携

1 つ目は、地域の手話通訳派遣センター（以下、地域センター）と連携して手話通訳の派遣を行い、互いに協力しながらよりよい支援につなげている例である。これらの事例は、地域センターと相談して、複数名の手話通訳者によるチームを構成し、これらのメンバーを中心により質の高い支援を行っているものである。具体的には、支援を開始するまえに、話し合いの場を設定して、授業の内容や聴覚障害学生のニーズ等、詳細な事前情報を伝えるとともに、毎回の授業でも早めに大学に来てもらうなどし



図1 セミナーの様子（写真）

て、十分な準備の上、支援にあたってもらおうという方法である。また、授業終了後には、手話通訳者同士で振り返りを行い、記録を作成して、支援室職員に伝え、職員から担当教員や聴覚障害学生等に取り次ぐ事で、よりよい支援環境を構築している。さらに、聴覚障害学生からもニーズを聞き取って通訳者に伝達したり、授業概要や授業の流れ、各種用語等を蓄積して、チームの中で引き継ぐなどの工夫がなされていた。

ただ、多くの地域では、コミュニティに対する派遣だけでも手一杯な状況があり、毎週行われる授業への派遣は、そもそも受け付けていないケースも多い。また、派遣条件に一定の縛りがあり、思うように準備時間を取れなかったり、意見交換会への出席などは派遣対象にならないため、別途手続きが必要になるなど、必要な環境を構築するためには超えなければいけない壁があるのも現状である。

### 2.2.2 大学への登録&直接依頼

2.2.1 で述べたような制約を解消し、より効果的に支援体制を構築しようとしている大学の中で取られているのが、地域センターと相談の上、大学での手話通訳を担ってくれそうな通訳者を募集して、大学に直接登録してもらう方法である。この中では、ちょうどノートテイカーのコーディネートを行う時と同じように、通訳案件ごとに、大学から通訳者に連絡をして、都合がつく方の中から適任者を選んで依頼する形が取られている。

ただし、これらの手話通訳者は、地域センターを離れて個人として手話通訳活動を行うことになるため、大学として通訳者の身分保障や研修・相談体制について検討することも重要になってくる。このため、実際に通訳を依頼する際には、前章と同様、授業ごとに必要な話し合いやフォローアップを重ねたり、通訳者同士の勉強会や意見交換会を開催するなどして、手話通訳者が負担をため込まず、より質の高い支援を提供できるような環境整備が行われている。そして、この際に重要になってくるのが、柱となる人材である。手話通訳者が抱えがちな問題を理解し、適宜相談にのったり、必要な環境を整えたりするためには、通訳について一定程度の知識を持った人材が必要とされる。ここには、手話通訳資格を有するコーディネーターなどが候補とされ、実際に話を伺った中では、ほとんどの大学でこうした方々が中心になって体制を動かしていた。

### 2.2.3 職員としての雇用

一方、大学の中には、前項で述べたような柱になる人材として、手話通訳者を雇用し、OJT（現場研修）として、自身も手話通訳のトレーニングを積み重ねながら、外部通訳者と共同で手話通訳を担当していく形をとっているところもあった。こうした人材は、登録している手話通訳者に必要な研修を行う際の企画を担当したり、必要な OJT を提供する上で、キーパーソンとして動いてくれる可能性があり、学内の情報保障環境充実のために、大いに寄与しているとのことだった。また、学部教員を巻き込んで研修を行ったり、聴覚障害学生のニーズに基づく勉強会を開催する、地域センターとの共同でより幅広い人材を







集めていくための中核にもなり得るもので、今後、目指していくべき方向性の一つとして考えられるだろう。

#### 2.2.4 さらにステップアップ

前項のような形で手話通訳者を採用したときに、最も重要になってくるのが、やはりこうした手話通訳者へのフォローアップだろう。ノートテイクと同様、手話通訳という仕事には大きな責任がのしかかるため、本人へのメンタルヘルスケアや自分自身が技術研鑽できる環境の構築は非常に重要である。特に、大学における手話通訳は、専門性も高く、求められる内容も大きいため、常に自分の技術では不十分という不安全感を負いがちである。



図2 筆者（白澤）  
（写真）

こうした手話通訳者にかかる負担を軽減し、精神的・技術的な支えになりうるのが聴覚障害のある教職員の存在である。実際に調査の中でも、聴覚障害教職員を中心に据えた手話通訳体制の構築が非常に効果的とする意見も聞かれていた。これは、聴覚障害学生支援の基軸になる聴覚障害者を募集し、職員または教員として採用することを想定したもので、自分自身が手話通訳を利用しながら、その現場を手話通訳者のOJTとして提供し、終了後に振り返りや技術的な指導を行って、大学で求められる技術を養成していくものである。こうした聴覚障害者の存在は、聴覚障害学生のニーズを引き出したり、その場の教育目標等を鑑みながら、学生本人の成長に繋がる支援を提供していくためにも有効で、学内の理解啓発を含む情報保障環境充実のために主翼を担う存在となりうると考えている。

実は、次に話題提供をいただく松崎先生は、まさにそうした存在であると思っている。もちろん、皆さんの大学の中では、即座にこうした人材を雇用したり、手話通訳者の養成研修に寄与できるような土壌がない場合も多いと思うが、その際にも近くの拠点大学にこうした機能を持った大学があるとして、そうした大学との連携でできることなども想定しながら話を聞いていただけると良いと思う。

### 3. 話題提供2：地域の人材と協同で築く手話通訳支援の事例（松崎 丈）

#### 3.1 自己紹介

学部から修士課程まで宮城教育大学に在学し、その後、東北大学大学院博士課程を経て、教員として宮城教育大学に採用された。私の場合は学生時代から宮城県で過ごしていて、長い間地域の手話通訳との付き合いがあったという背景の中で、どのようにコーディネート体制を整えてきたかをお話したい。白澤先生から、大学での手話通訳支援の先進例だと紹介されたが、確かに、他の地域で全く同じ手法で臨むのは難しいかもしれない。ただ、一連の話の中で少しでも皆さんの参考になり、取り入れていただければ嬉しく思う。

### 3.2 博士課程在学中の取り組み

博士課程では研究発表の機会が多かったため、ノートテイクでは対応できないと考え、大学に手話通訳を要望した。当時東北大学では聴覚障害学生支援の経験がなかったが、たまたま指導教員が副学長で影響力があったこともあり、予算だけは無事確保してもらうことができた。とはいえ、その予算をどう使って支援に繋げればよいかというノウハウはなかったもので、コーディネートを含め運用面はすべて私が自分で担うことになった。

最初に、公的派遣を利用できないかと申し込みをしてみたが、連続性のある派遣は受けられないと断られた。そこで、紹介派遣（企業等が費用を支払って通訳の派遣を受けるしくみ）の窓口（宮城県の場合はみやぎ手話通訳派遣センター）に相談したところ、対応してもらえることになった。

なお、要約筆記も公的派遣は利用できなかったもので、ノートテイクができる人を集めて大学の授業への派遣を担う NPO 団体（現在の「みやぎ DSC」）を自ら設立した。

この時に手話通訳のコーディネートの大変さを経験できたことは、自分にとってとても重要で現在にも繋がっている。博士課程の手話通訳は専門性が非常に高く、通訳者は皆遠慮して、ただ頼んただけでは来てくれない。そのため、「大丈夫、私がフォローするから心配しないでください」と学生ながら懸命に通訳者をフォローし、やっと引き受けてもらい、現場でも通訳が円滑にできるように準備や場の調整にも心を砕いていた。「コーディネート」とは通訳者が安心して通訳ができるように、様々な準備・配慮を行う専門的な業務であるということ、身をもって理解した。

また、通訳者は専門用語をどう手話で表現すればよいかわからず困っていたが、私自身も専門の内容を手話で語る経験がほとんどなかったため、どのような表現が良いか一緒に考えた。通訳者と相談を重ねる中で、良い表現を見出すことができ実際に使うということも多々あり、手話表現一つとっても通訳者に一任するのではなく一緒に考えていくことが重要だと感じた。



図 3 セミナーの様子（写真）





### 3.3 大学教員として採用されてから

私の大学の場合、手話通訳の担い手は、センターから派遣される地域の通訳者と、しょうがい学生支援室のコーディネーターとして雇用した手話通訳資格を持つ職員がいて、それぞれ役割を分けている。支援室職員が通訳を担うのは、私が担当する授業の通訳のみで、その他学内の行事関係はすべて派遣センターから派遣を受けている。

#### ①派遣団体との関係づくり 大学教員として採用されてから

- 高等教育機関に対応できる手話通訳者を中・長期的に育てていくことを見据えたコーディネートの方針を共有。
- 県内の各種法人理事を担当している関係で派遣団体のコーディネーターに会うことが多く、手話通訳者の状況を共有したり苦労話も聞くようにする。
- 必ず指定された日時までに資料を届ける。内容的に8割であっても。派遣団体コーディネーターと通訳者の信頼関係を大切にするために。

図4 ①派遣団体との関係づくり

(今日の話題提供では職員が担当する通訳業務については割愛する。)

地域から派遣を受ける場合、まずは派遣センターのコーディネーターとの関係構築が大切で、私は特に3つのことに留意していた。(図4スライド参照)

- ① 学術分野に対応できる通訳者は非常に限られるため、十分な技術のある通訳者だけに依頼するのではなく、まだこれからという人材とペアで担当してもらい、助言しながら経験を積んでもらうという長期的な視点を大事にした。こうした方針は派遣センターのコーディネーターと相談の上で共有した。通訳者にとっても、コーディネートの方針が明確であることが安心につながった。
- ② コーディネーターと顔を合わせる機会にはこまめに声をかけ、通訳確保に奔走する精神的な負担を和らげたり、通訳者の状況を共有したりするように心がけた。
- ③ 通訳資料は必ず期日までに提供し、不必要に負担をかけないようにした。事前の情報提供は、コーディネーターとの信頼関係づくりの観点からも非常に大切だと言える。

### 3.4 現場での通訳者との関係づくり

通訳の前には、通訳者が安心して現場に入れる雰囲気づくりに努め、学生たちに通訳者を紹介したり自分から挨拶の声かけをしたりした。

通訳中は、通訳者の技量に合わせて話す速さなどを調整した。できるだけ「失敗した」ではなく「うまくいった」と感じて通訳を終えてもらえるようにと考えた。そうすることが次の通訳につながっていくと思っている。

通訳が終わった後の留意点としては、通訳中に行き詰まった部分をただ指摘するのではなく、どうしてうまくいかなかったのかまず通訳者に尋ねて一緒に課題を整理するようなやりとりをした。また通訳の反省会にはできるだけ自分も参加して、課題点について十分掘り下げた話し合いができるよう後押ししたり、コーディネートに関する要望等について意見をもらったりした。

## 3.5 手話通訳ニーズの顕在化

手話通訳との関係づくりに関して、手話通訳を使いたいと思っている聴覚障害学生（特にデフファミリーの学生）の存在に関して触れたい。彼らは手話はできるものの、手話通訳に対するニーズを具体的に言語化し、表明するには至っていなかったため、どんなニーズがあるのか改めてヒアリングを行った。

まず学生たちに、学術レベルに対応できる通訳人材はまだまだ足りていないという現状と、通訳者を育てるには自分たちがニーズを伝えていくことが必要であるということを説明した。そして、PEPNet-Japan の「大学での手話通訳ガイドブック」<sup>[3]</sup> 付録の通訳映像教材を使い、自分にとってわかりやすい通訳のタイプを選んでもらい、なぜそれを選んだのかを細かく確認する方法で、学生のあいまいなニーズを顕在化させていった。さらに、うなずきが多すぎると文の切れ目がわかりにくい、専門用語の表現に口形がはっきりついていると、日本語が想起しやすくノートが取りやすくなる、といった具体的なニーズまで引き出し、文章にまとめて通訳依頼と一緒に派遣センターに提供した。同様に読み取り通訳についても、学生へのヒアリングでニーズの掘り下げを行ったが、詳細は時間の関係で割愛する。

## 3.6 通訳の質担保（技術の向上）のための取り組み

これまで自分自身が培ってきた手話言語学や手話通訳の知識、およびコーディネートの経験などをもとに、通訳者をフォローするための取り組みをしてきた。次の 3 点を紹介する。

### ①専門用語の手話表現 DVD

例)「かかわる」「かかわりあう」にあたる手話表現は、コミュニティ通訳の中では同じ手話表現を使っても問題ないかもしれないが、聴覚障害児教育の領域では意味合いが異なるので表現も分ける必要がある。そうした例を 170 ほど収録して DVD にまとめた。担当する通訳者が変わっても表現が統一されてわかりやすいという効果もあった。



図 5 筆者（松崎）  
（写真）

### ②研修等の講師として通訳者養成に貢献

例) 聴覚障害のある学生はどのような手話通訳ニーズをもっているのか  
高等教育で扱われる談話にはどのような特徴があるのか  
研究発表の構成（研究の目的・方法・結果・考察）  
論理的思考を磨くためのトレーニング など

### ③映像教材としてデータを提供

研修用のデータとして、授業や各種時の映像を録って派遣センターに提供した。通訳者が読みとって日本語に翻訳したものを提出してもらい、添削して返すといった対応も行った。





### 3.7 まとめ

今日話したような実践を通して、現在も、通訳者のスキルアップを図るための方法について工夫と研究を重ねている。

### 4. 手話通訳支援を行う上での留意点

本セミナーでは、地域センターと連携しつつ、大学独自に手話通訳の登録や雇用を行う例について紹介した。最後に、こうした取り組みを行う上で、留意すべき点があるので、これらを掲載することでまとめに代えたい。

- ① 手話通訳者のほとんどは、地域センターに登録しながら、地域での活動も並行して行っている方々だということを忘れないでほしい。このため、大学が何らかの取り組みを始める際には、地域センターと良好な関係性を築いていく必要があるし、手話通訳者に対しても、これからも地域で手話通訳を担っていく人材として、地域センターとの関係性には十分な配慮をして欲しい。
- ② 大学で手話通訳を担えるレベルの手話通訳者は、非常に専門性が高く、地域の中でも主力選手である事が多い。このため、大学の中でそうした人材を占有し、地域の手話通訳派遣体制の機能低下を招いてしまうことのないよう、十分な配慮が必要となる。
- ③ 手話通訳には、頸肩腕症候群などの職業病もある。地域と大学など、依頼元が複数になると、一人の手話通訳者にかかっている負担の大きさを把握できる機関がなくなってしまうため、手話通訳者の健康管理にも十分な配慮が必要である。
- ④ 大学の手話通訳は、専門性も高く、求められるものが非常に大きいため、常に不全感を抱えがちである。より質の高い支援体制を構築していくためには、こうした手話通訳者の悩みを聞いたり、スキルアップのための研修会を開催するなど、十分な心のケアと身分保障が不可欠になる。

### 参考文献

- [1] 白澤麻弓, 吉川あゆみ, 江原こう平 (2019) 高等教育機関における手話通訳の利用に関する予備的調査. 第 57 回日本特殊教育学会大会予稿集, P9-30.
- [2] 大杉豊 (2019) 専門分野における手話言語通訳者の育成カリキュラムを検討するためのニーズ調査研究事業成果報告書, 筑波技術大学. (p.33 に報告書ダウンロードページのQRコードを掲載)
- [3] 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) 情報保障評価事業 (手話通訳) ワーキンググループ (2012) 大学での手話通訳ガイドブックー聴覚障害学生のニーズに応えよう！ー.



参考：当日資料（スライド）

※松崎氏スライドは当日資料の冊子に掲載済み


日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム  
セミナー 2 企画

## 手話通訳ニーズ に応えるための コーディネート 体制のあり方

司会：白澤 麻弓  
筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター  
講師：松崎 丈  
宮城教育大学障害児教育講座

## 企画趣旨

- 聴覚障害学生支援の広がり



- 大学から何らかの支援を受けている  
重度聴覚障害学生 = 91.3% (JASSO, 2019)
- しかし...
  - 手書きノートテイク 153校 (29.8%)
  - パソコンノートテイク 109校 (21.2%)
  - 手話通訳 63校 (12.2%)

2

## 調査の結果を見ても..

- PEPNet-Japan正会員・準会員大学(70校)では？
  - 手話通訳による支援を行っている大学  
27校 (63%)
  - 授業において定期的に利用している大学  
8校 (18%) 週4回以上と回答した大学も
  - 手話通訳支援を実施する上での課題  
①予算の不足、②技術のある通訳者の不足、  
③地域のリソース不足 ※特に②③は大きい

厚生労働省 平成30年度障害者総合福祉推進事業  
指定課題II「専門分野における手話言語通訳者の育成カリキュラム  
を検討するためのニーズ調査研究事業」より

3


## この背景には..

- 現在の手話通訳制度を支えているのは  
「障害者総合支援法」による
  - 地域生活支援事業
  - 意思疎通支援を行う者  
(手話通訳者及び要約筆記者)
- 聴覚障害者の日常生活・社会生活を支えるた  
めの手話通訳を基本としてきた
- しかも、ほとんどの自治体で手話通訳は不足  
している状況にある

4

## つまり..

- 大学における手話通訳支援を支えるための  
リソースはごくわずか
- 手話通訳支援を進めるためには、**大学の手で  
リソースを生み育てる努力**が不可欠



- 本セミナーでは  
実際の大学における事例を元に、**手話通訳支  
援を可能にするコーディネート体制のあり方**  
を考える

5

## 本日の流れ

- 10:45～ 企画趣旨
- 10:50～ 大学における手話通訳ニーズと  
20分 コーディネート体制  
白澤麻弓（筑波技術大学）
- 11:10～ 地域の人材と協同で築く  
30分 手話通訳支援の事例  
松崎丈（宮城教育大学）
- 11:40～ 質疑&ディスカッション  
20分

6



## 大学における 手話通訳ニーズと コーディネート体制

厚生労働省 平成30年度障害者総合福祉推進事業 指定課題Ⅱ  
「専門分野における手話言語通訳者の育成カリキュラムを検討する  
ためのニーズ調査研究事業」

第3章 教育分野の手話言語通訳に関する調査  
白澤 麻弓 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター  
吉川あゆみ 関東聴覚障害学生サポートセンター  
江原こう平 東京都手話通訳等派遣センター

報告書ダウンロード <http://u0u1.net/XCOz>



## 話の流れ

- 大学における手話通訳ニーズ
  - なぜ手話通訳が必要なのか？
  - ノートテイクのみでは不十分なのか？
- コーディネート事例3選+1
  - 手話通訳ニーズに応えるために
  - 先進大学ではどんな工夫がされているのか？

8

## 大学における 手話通訳 ニーズ

- なぜ手話通訳が必要なのか？
- ノートテイクだけでは不十分なのか？

聴覚障害教職員への調査から

## ノートテイクの特性は？

おはようございます。  
先週は手話の種類について少しお話を  
しました。3種類の手話について説  
明したと思いますが、覚えています  
か？  
今日は、日本手話の文法について精  
かくお話をしたいと思います。まず  
はじめに、短い手話のビデオを見て  
もらいます。

【長所】

- 用語や用いたことばの  
正確な伝達  
(日本語で何と言ったのか？)

【短所】

?

10

## 手話通訳だからできること！

聴覚障害教職員への調査から

- リアルタイム性 (即時性・双方向性) ➡ 自然な会話に参加できる
- 細部の表現性 (抑揚・強弱・意図) ➡ 相手の言いたいことがはっきり分かる
- 言語モデルの提示 (日本語・手話) ➡ どんな風に話せばいいかわかる
- 場の調整 (タイミング・ずれ) ➡ ハンドを補ってくれる

手話通訳とノートテイク  
両方が保障できてはじめて支援が成り立つ

11

## コーディネート 事例3選+1

- 手話通訳ニーズに  
応えるために  
先進大学では  
どんな工夫が  
されているのか？

積極的に取り組んでいる  
大学への調査から

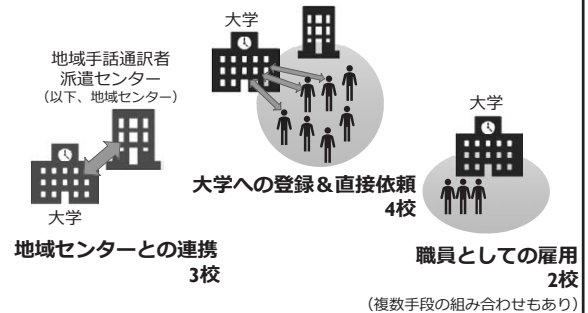


## お話を伺ったのは・・

- 日常的に手話通訳を利用し、課題解決のために積極的に取り組んでいる大学（6校）
- 共通の課題：
  - そもそも大学のある地域の中にリソースが少なく、一定のレベル以上の手話通訳者が確保できない。
  - 一般教養の授業なら比較的対応可能だが、専門性が高くなればなるほど、これに応じたスキルを持った通訳者の確保が難しい。

13

## コーディネート体制の工夫



14

## 地域センターとの連携

- 地域センターに依頼して、**手話通訳チーム**を構成
- **事前情報**を伝えるとともに、**話し合いの場**を設定
- 早めに大学に来てもらい、**引継ぎ事項**等を読んで準備をしてもらう
- 授業終了後には、**手話通訳者同士で話し合い**を行い、記録作成→**担当教員・聴覚障害学生**等に繋ぐ
- 聴覚障害学生から**ニーズ**を聞き取り通訳者に伝達
- 全体で共有が必要な**情報を整理して蓄積**  
(授業概要／当日の流れ／大学用語／専門用語／手話表現等)
- 定期的な**意見交換会**の実施

15

## 連携上の課題

- コミュニティに対する手話通訳派遣だけでも手一杯な状況があるため、毎週通訳が必要となるようなケースへの派遣は負荷が大きい。
- 派遣制度の制約上も、授業のような**定期的な場面には派遣できない**ことが多い。
- **派遣条件に一定の縛り**があるため、大学として必要な環境構築が難しいことがある。  
(準備・話し合い時間を見込んだ派遣、意見交換会への出席)

大学への登録&直接依頼, 職員としての雇用  
さらなる連携強化?

16

## 大学への登録&直接依頼

- 地域センターと相談の上、大学での手話通訳を担ってくれそうな通訳者に依頼して登録してもらう
- 通訳案件ごとに、大学から通訳者に連絡をして、都合がつく方の中から**適任者を選んで依頼**
- 授業ごとに必要な**フォローアップの実施**
- 状況に応じて**勉強会&意見交換会の実施**

柱になる  
人材の  
必要性

求められる技術に見合ったサポート体制  
(研修・相談・身分保障)  
現場のニーズと通訳者の特性に配慮したコーディネート

17

## 職員としての雇用

- 地域センターと相談の上、手話通訳支援の基軸になる手話通訳者を募集し、職員として採用
- OJTとして**自身もトレーニングを積みながら、外部通訳者と共同で手話通訳を担当**
- よりよい情報保障のために必要な環境について提案し、実現に向けた取り組みを行う  
(研修会・意見交換会の開催、OJTの充実、教員・聴覚障害学生・地域センターとの共同による取り組み等)

求められる技術に見合ったサポート体制  
(研修・相談・身分保障)

18



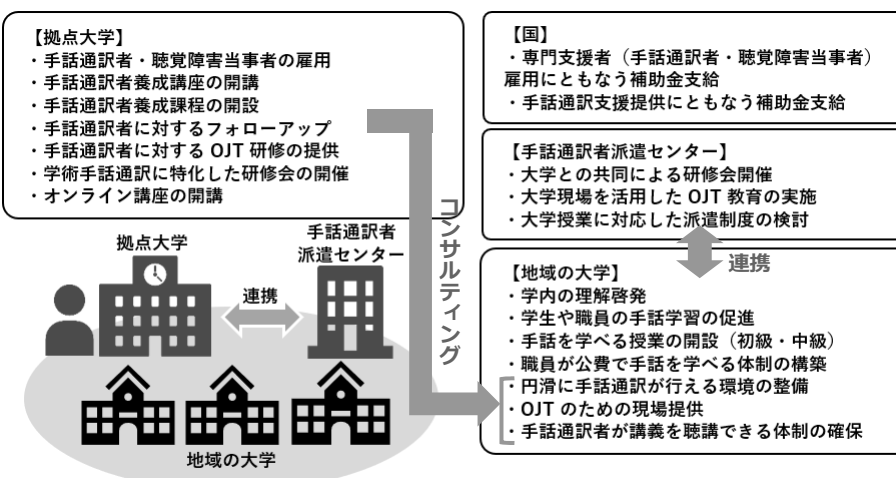
## さらにステップアップ ↑↑↑

- ・聴覚障害学生支援の基軸になる**聴覚障害者を募集し**、職員または教員として採用
- ・自身に対する手話通訳を現場としてOJTを行いながら、**大学で求められる手話通訳者を養成**
- ・聴覚障害学生のニーズと教育目標、手話通訳者の特性を見極め、**本人の成長に繋がる支援を提供**
- ・情報保障環境充実のために必要な取り組みを提案し、**実現に向けて主翼を担う**

(手話通訳者に対する指導、学内の理解啓発、聴覚障害学生に対するエンパワメント等)

19

## 地域の連携による支援体制充実



白澤麻弓・吉川あゆみ・江原こう平（2019）高等教育機関における手話通訳の利用に関する予備的調査. 日本特殊教育学会第57回大会 ポスター発表資料より 20

## 大学への登録 & 依頼 職員としての雇用上留意すべき点

「インサールディング」の活用

- 通訳者にとって地域センターとの関係性は非常に重要。これからも地域で手話通訳を担っていく人材として、**関係悪化を招かないよう十分な配慮が必要**
- 大学で通訳を担えるレベルの手話通訳者は、地域でも主力選手。そうした**人材を占有してしまうことの問題性に配慮した調整が必要**
- 手話通訳には頸肩腕症候群などの職業病も。依頼元が複数になることで、**過度な負担がかからないよう配慮が必要**
- 大学の通訳は求められるものが非常に大きい。通訳者の悩みを聞いたり、スキルアップのための研修会を開催するなど、**十分なケアと身分保障が不可欠**

21

## 参考文献

- 【はじめて手話通訳を利用するときのガイド】日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）（2015）大学教職員のための地域通訳依頼ハンドブックよりよい連携を目指して―国立大学法人筑波技術大学.
- 【大学で求められる手話通訳技術】日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）情報保障評価事業（2015）大学での手話通訳ガイドブック―聴覚障害学生のニーズに応えよう！―筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター.
- 【質的向上のためにできる工夫①】白澤麻弓（2015）大学における聴覚障害学生支援の高度化に向けた取り組み―米国ロチェスター工科大学における手話通訳者の取り組みと日本への示唆―.通訳翻訳研究.第15号,35-54.
- 【よりよい支援に向けた体制整備】白澤麻弓（2014）ロチェスター工科大学アクセスサービス部門に見られる手話通訳支援の概要 その1―きめ細かなサービスを支える組織とコーディネート体制―.筑波技術大学テクノレポート.第22号1巻,78-82.
- 【質的向上のためにできる工夫②】白澤麻弓（2014）ロチェスター工科大学アクセスサービス部門に見られる手話通訳支援の概要 その2―手話通訳の質的確保に向けた環境整備―.筑波技術大学テクノレポート.第22号1巻,83-89.

22





## コーディネート体制ごとの長所・短所

	地域センターとの連携	大学への登録&依頼	職員としての雇用
利点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域センターが大学の特性を理解して通訳者を派遣してくれていれば、安心して任せられる。</li> <li>・地域全体の状況を見越したりリソースの分配が可能になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域センターを通すと、コーディネート費が発生したり、時間計算の方法が大学と異なったりすることがあるため、独自で依頼した方が費用が抑えられる。</li> <li>・大学のニーズに合致した手話通訳者を選ぶことができるし、聴覚障害学生のニーズについて丁寧に伝えていくことができる。</li> <li>・一定の通訳者に固定で通訳に入ってもらうことで、ノウハウを積み上げていける部分があり、これが大学における支援体制の向上にも繋がる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用場面が多い場合は、結果的に費用面でのコストが抑えられる。</li> <li>・短時間の通訳や突発的に手話通訳が必要になった時などに、すぐに対応ができる。</li> <li>・大学のニーズに合致した手話通訳者を選ぶとともに、OJTを通してしっかりとした養成に繋げることができる。</li> <li>・外部の通訳者と共同で通訳を行うときにも、ペアの通訳者のフォローを行うなど、全体的な通訳の質的向上につながる。</li> <li>・雇用されている手話通訳者をコーディネートや養成の柱に据えることで、大学における手話通訳支援の体制を作り上げることができる。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の通訳者と大学で求められる通訳の内容は異なるため、質にばらつきができてしまう。</li> <li>・できれば固定のチームで対応してもらいたいのが、地域センターの事情によっては叶わないことも多い。</li> <li>・コーディネート担当者に大学の持つ手話通訳ニーズが伝わりづらいため、求める通訳者が派遣されづらい。</li> <li>・コミュニティに対する手話通訳派遣だけでも手一杯な状況があるため、依頼時間数も多い大学への対応は、地域センターにとっても負担が大きい。</li> <li>・派遣制度の制約上も、授業のような定期的な場面には手話通訳派遣ができないことが多い。</li> <li>・派遣条件に一定の縛りがあるため、大学として必要な環境構築が難しいことがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学にノウハウがないと、人脈や情報がなく、人材確保や力量の見極めが難しい。</li> <li>・経験豊富なコーディネーターが学内にいないと、適切なコーディネートを行うことができず、派遣調整も機械的になりがち。</li> <li>・地域センターに登録することで守られている側面もあるため、大学と直接契約になることで、現場で生じた問題が通訳者に直接降りかかってしまうことがある。</li> <li>・求められるものの大きさに比して十分な保証ができないことも多く、適切な人材の確保が難しい。</li> <li>・大学で通訳を担えるレベルの通訳者は、地域でも主力であることが多く、そうした通訳者を大学が占有してしまうことで、地域センターの機能低下を引き起こしてしまう。</li> <li>・通訳者によっては地域センターとの関係性から、立場上、個人依頼ができない方もいる。</li> <li>・一般的には、地域センターにも登録している手話通訳者に依頼することになるため、各通訳者がどの程度通訳を担当しているか等の情報が一元的に把握できなくなる。</li> <li>・大学側が通訳者の悩みを聞いたり、スキルアップのための研修会を開催したりするなど、十分なケアをしていかないと通訳者のモチベーションが続かない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・業務量の面で過重労働になりがちなので、大学として十分なケアが必要。</li> <li>・通訳者として悩みや課題を抱えたときに、サポートしてあげられる体制が必要。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・そもそも大学のある地域の中にリソースが少なく、一定のレベル以上の手話通訳者が確保できない。</li> <li>・一般教養の授業なら比較的対応可能だが、専門性が高くなればなるほど、これに応じたスキルを持った通訳者の確保が難しい。</li> </ul>		



## 「聴覚障害学生の『参加』を支える支援—話し合い場面から考える—」 全体企画報告書

村田淳<sup>1)</sup>，中野聡子<sup>2)</sup>，有海順子<sup>3)</sup>，小佐野貴恵<sup>4)</sup>

京都大学 学生総合支援センター<sup>1)</sup>，群馬大学 教育学部<sup>2)</sup>，

山形大学 障がい学生支援センター<sup>3)</sup>，山梨県立ろう学校<sup>4)</sup>

**要旨：**高等教育機関における障害学生支援は、支援そのものを目的としているわけではなく、それぞれの機関における普遍的な教育・研究の権利を障害の有無にかかわらず保障することが目的である。本企画では、話し合い場面における聴覚障害学生の「参加」をテーマとして、映像教材ならびに聴覚障害学生へのアンケートによる課題の抽出、また登壇者それぞれの立場における知見・経験から課題解決のポイントや必要となるマインドを整理した。合理的配慮の提供に留まらず、個々の学生が直面する物理的／心理的なバリアを包括的な観点で捉えた支援のあり方について議論する機会となったことに加えて、全ての学生が「参加」できることの教育機関としての価値を再確認する機会となった。

**キーワード：**聴覚障害学生，参加，グループ活動

### 1. はじめに

障害者差別解消法の施行後、各高等教育機関においても聴覚障害学生への合理的配慮が進められている。しかしながら、合理的配慮が提供されているにもかかわらず、聴覚障害学生が講義等での議論や話し合いといった、集団でのコミュニケーションのプロセスに「参加」しにくい状況が生じ、結論や結果だけを知る、ということも少なくない。聴覚障害の有無にかかわらず、社会の一構成員として、議論を経た物事の決定プロセスに参画する経験は非常に重要であり、特に社会に出る前の学生時代にその経験を積んでおくことが、その後の社会生活に大きな影響を及ぼすものと考えられる。それが実現してはじめて、聴覚障害学生も「平等」な立場に立てるのではないだろうか。

本企画は、聴覚障害学生が参加する話し合い場面の映像教材や、聴覚障害学生を対象に実施した「授業場面におけるグループでの会話や活動に関するアンケート」を基に、各講師から話題提供をいただき、聴覚障害学生が安心して「参加」できるための支援のあり方や、「参加」を阻害している要因、またその時の心理状況についての理解を深めることを目的に実施したものである。以下、各司会ならびに講師からの話題提供を掲載する。







## 2. 趣旨説明ならびに話題提供

### 2.1 趣旨説明ならびに教材・アンケート結果紹介（村田淳）

まず、聴覚障害学生が話し合い場面に「参加」する際の困難を具体的にイメージするために、話し合い場面の映像教材を 2 パターン上映した。映像の設定は下記の通りであった。

登場人物：聴覚障害学生 1 名、支援担当職員 1 名、支援学生 2 名

場面設定：パソコンノートテイク勉強会についての話し合い場面

場面 1→聴覚障害学生が参加困難に陥っている場面

場面 2→聴覚障害学生が比較的参加できている場面

コミュニケーションの状況：聴覚障害学生は手話や口話を使用している。職員・支援学生ともに簡単な手話ができ、普段対面での聴覚障害学生とのコミュニケーションはおおむねとれている。

その他：どちらも聴覚障害学生の視線を再現する形で撮影されており、聴覚障害学生に伝わっていなかった会話や理解できなかったところは音声がなく、字幕にもなっていない。

さらに、本シンポジウムに参加した聴覚障害学生に事前に依頼したアンケート（授業場面におけるグループでの会話や活動に関するアンケート）について、結果の概要を説明した。アンケートは授業におけるグループでの会話や活動への参加について、自身の経験や現在の状況を問うもので、26 名から回答があった。結果の詳細は別途掲載しているので参照されたい（企画主旨スライド 7 以降）。

特に特徴的だったのは、授業におけるグループ活動場面での「サポートへの満足度」と「聴学生と比較したグループ活動への参加度」の結果であった（企画主旨スライド 11）。「サポートへの満足度」では中程度（4～7）～高評価（8～10）を選択した者が半数を超えていたにもかかわらず、「グループ活動への参加度」が高評価だったのは 2 名のみで、低評価（1～3）が半数であった。つまり、ある程度の満足度のサポートがあっても、グループでの会話や活動に充分に参加できない現状があると言えるだろう。

このような状況を踏まえて、各講師から話題提供をいただいた。その概要を以下に掲載する。



図 1 筆者（村田）  
（写真）

### 2.2 聴覚障害学生の「参加」に関して一当事者の視点から—（小佐野貴恵）

ご覧いただいた映像教材のうち、まず場面 1 で聴覚障害学生がどのような状況に置かれていたか整理したい（小佐野スライド 2）。場面 1 では誰が話し始めたのかが分からず、話の冒頭が掴めていなかった部分がいくつかあったと思う。また、音声のみで話され手話が



表出されていなかったり、手話が間違っていたり、聴覚障害学生が見ていない間に話が続きたりして、誰が何を話しているのか掴めない状況になっていたと思われる。他にも、聴覚障害学生が話の内容を確認しようとした際に、周りが必要だと思った情報だけが与えられる形になっていたり、聞き返した際に否定的な表情や言い方をされたりしていたところもあった。このような経験の積み重ねにより、聴覚障害学生は「分からなかった自分が悪いのだ」という思いを募らせてしまう。結果、疎外感を感じ、聴覚障害学生が諦めてしまった様子が見て取れた。たとえ周りができる限り手話や筆談を使って対応していても、聴覚障害学生が議論や会話に充分に参加できないことは多々ある。

次に、場面 2 について述べたい（小佐野スライド 3）。発言する時に手を挙げたり、聴覚障害学生に呼びかけたりして、聴覚障害学生と視線が合ってから話し始めることが全員で意識されていた。また、聴覚障害学生がメモを取っている間は待つことや、見ていなかった間の会話の説明もなされていた。さらに、聴覚障害学生の思い違いを支援学生が責めることなく「自分が伝えきれていなかった。申し訳ない」、「聴覚障害学生にきちんと説明したい」という気持ちを持って答えていた。

このように答えてもらえると、聴覚障害学生も確認がしやすくなる。さらに、ホワイトボードに「12 月の勉強会『 』」と書かれていたことでテーマが明確になり、聴覚障害学生が会話に参加しやすくなる。このようにして、場面 2 では聴覚障害学生が自分から確認したり、提案したりする雰囲気ができていたと思われる。

では、「参加」のために聴覚障害学生自身ができる方策として、どのようなものがあるだろうか（小佐野スライド 4）。まず 1 つ目としては、話し手に対して、自分の視線がそちらに向いてから話し始めて欲しいと伝え、あわせてその理由も伝えておくことが大切である。多くの聞こえる人にとっては、聞こえない・聞こえにくいことのイメージがしづらいため、例えば「見ていないところで話された情報はわからない（わかりにくい）」というようなこともあえて言わなければ伝わりづらい。また話し合いを始める前に、「話す時は挙手をする」、「話し始める時には名前を言う」といったルールを確認しておくのもよい。ホワイトボードやノートなどの視覚的な情報を活用するのも、聴覚障害学生だけでなく参加者全員に有効な方法である。さらに聴覚障害学生は「知りたい」「参加したい」という気持ちを周りに伝え、自分の聞こえ方を知り、自分自身について説明できる力を身につけておく必要がある。

「聞こえない・聞こえにくいこと」、「分からないこと」は決して悪いことではない（小佐野スライド 5）。それと同時に、自分では聞き取れている（読み取れている）と認めてい



図 2 筆者（小佐野）講演の様子（写真）



でも、実は聞き落としや見落としがあるものだ、と自覚することも必要になってくる。私自身、大学で初めて情報保障に出会うまでは、聴覚活用や口話で全く問題はないと思っていた。ある時先輩の勧めでノートテイクをつけて授業を受けたところ、自分が理解できていると思っていた情報と、実際にノートテイクで得られた情報に大きな差があり、大変なショックを受けた。これまでどれほどのものを取りこぼしてきたのかと、現実を受け止めるまでに時間がかかった。

聴覚障害学生にとって、周りに自分の状況を説明し、具体的な方法を提案していく力が重要であるが、それは自分のためだけでなく、周りのためにもなることだと考えている。よりよい環境を作っていくために働きかけていく際、いろいろな困難があるかと思うが、解決策や様々な方法を知っていることは強みになる。皆さんもこのシンポジウムの中で、情報を集めるなどして様々な解決策や方法を蓄積できたのではないだろうか。なかなか自分から動くのは難しいかもしれないが、周囲に自分の思いを言って損はない。とはいえ、勇気を出して行動しても周りの理解が得られないこともあるだろう。もし自分だけでは難しければ、味方を見つけるのも 1 つの方法だと思う。当事者以外からの意見の方が理解が得られることもある。聴覚障害学生には、参加を諦めず、勇気を出して、周りに伝えていってもらいたい。

### 2.3 聴覚障害学生の「参加」にかかわる課題と支援—支援者の視点から—（有海順子）

支援者の視点から、参加にかかわる課題とそれを改善するために考えられるアプローチについて話したい。2つの映像で強く感じたのは「周囲の理解・意識の違い」である（有海スライド 2）。聴覚障害学生に伝わっているかいないかをいかに意識し、気づけるか、といった意識の違いが、聴覚障害学生の参加に大きく影響していたと思う。場面 1、2 とともに手話は使っているものの、場面 1 では聴覚障害学生が見ていないところで会話を進めるなど「伝わっていない」ことに気づいていない状況があった。一方場面 2 は、話し方に注意するだけでなく、視界に入ってから話をする、ホワイトボードを活用する、聴覚障害学生がノートをとっている間の情報が伝わっていないことに気づき補足する等、「伝わる」ように意識しながら会話を進めていた。この意識の違いで、聴覚障害学生が得られる情報や受け取る印象は大きく異なってくる。

それを踏まえ、支援者として意識すべき点を 3 つ挙げたい。1 点目は、討論場面における聴覚障害学生の情報取得・理解の困難さである（有海スライド 4）。冒頭に紹介されたアンケートで、何らかのサポートを受けてグループ活動に参加しているという回答が多くあっ

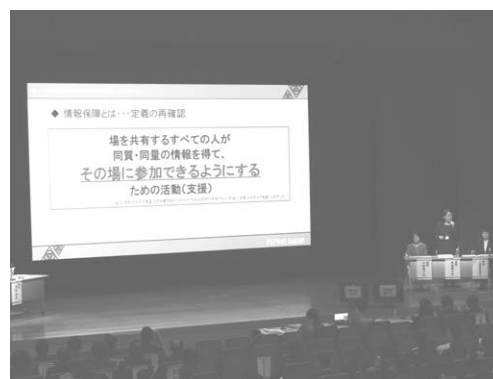


図 3 筆者（有海）講演の様子（写真）

たが、サポートがあっても 100%の情報が得られるわけではない。パソコン通訳において支援経験豊富な支援学生であっても、内容を 7～8 割しか伝えられていないことが有海 (2013) <sup>[1]</sup>からも明らかになっている。また、支援を通じた情報はどうしてもタイムラグが生じる。有海 (2013) <sup>[1]</sup> では支援経験豊富な支援学生が連係入力した場合でも、3～10 秒のタイムラグが生じていたことも明らかにされていた。そのような状態で聴覚障害学生が発言のタイミングをうかがうのは非常に難しい。内容の理解が不十分であれば、なおさらであろう。

2 点目は、聴覚障害学生が様々な手がかりを利用して情報を得ていることへの理解である (有海スライド 5)。アンケート結果から、多くの学生が複数の手段を併用していることがわかったが (企画主旨スライド 10)、複数情報の同時処理は難しく、視界に入らない情報はさらに気づきにくい。支援があれば情報は伝わるだろうと思いがちであるが、支援者は聴覚障害者の様子を確認しながら、丁寧に情報を伝えていかなければならない。

3 点目は、情報保障の定義の再確認である (有海スライド 6)。PEPNet・Japan が作成した「大学ノートテイク支援ハンドブック」<sup>[2]</sup>によれば、情報保障とは「場を共有するすべての人が同質・同量の情報を得て、その場に参加できるようにするための活動 (支援)」であり、情報保障がそもそも目指すところは「参加」の保障であると言える。

最後に、課題解決のためのアプローチについて 2 つの立場から述べたい (有海スライド 7)。まず障害学生支援担当者としては、周囲への継続的な理解啓発が重要である。例えば「Access! 聴覚障害学生支援②」<sup>[3]</sup>に収録されている聞こえのシミュレーション体験を使うなどして、教職員に身をもって情報取得の難しさを理解してもらうことで、結果的に情報提示の工夫や試行につながる。そして支援者としては、聴覚障害学生とのコミュニケーションを日頃から大切にすることが重要である (有海スライド 8)。例えば聴覚障害学生の参加のしやすさを考慮した座席位置や表示画面の設定等の調整ができることも支援者に求められる。討論場面であれば、全体に文字情報を提示して、聴覚障害学生の「参加」について全員で意識を向けるなど、支援者の立場からも提案し、説明できる力が求められることもある。小佐野先生の話にあったように、本来は聴覚障害学生が説明できるのが望ましいが、支援者もそれを支えられるような存在であって欲しいと思っている。

### 2.4 アクティブ・ラーニング『参加』の高い壁は乗り越えられるのか (中野聡子)

今回は特に聴覚障害学生の心理面を踏まえて述べていきたい (中野スライド 2)。聴覚障害学生は、「アクティブ・ラーニングなどなければよいのに」というのが本音ではないだろうか。しかしながら日本の高等教育では、近年アクティブ・ラーニングが推奨され、グループワークやディスカッションが積極的に取り入れられつつある。今回の



図 4 筆者 (中野、有海、小佐野)  
(写真)



アンケート結果で非常に衝撃的だったのは、聴学生と比較して、アクティブ・ラーニングへの実質的な参加度が低いと感じている聴覚障害学生が多かった点である。文部科学省「障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第二次まとめ）」<sup>[4]</sup>に「障害のある学生が障害のない学生と平等に参加できるようにアクセシビリティを確保することが重要である」と記載があるが、平等な参加が実現できていないことが明らかになったと言える。

ただし、「参加度」は低いと感じていても、自分が受けているサポートへの満足度は高い傾向があった。なぜ、このような結果になったのだろうか。例えば、グループワークで受けている支援について、聴覚障害学生に様子を聞くと「大丈夫です」と答えることがあると思うが、それはさまざまな配慮をしてもらっていることに対する感謝の気持ちや、「支援を受けても実質的な参加ができない部分はあきらめるべき」という気持ちからの発言かもしれない。本来の意味では「大丈夫」ではない場合があることに留意が必要である。支援室や大学は、聴覚障害学生の参加度を高められる有効な支援や環境調整を打ち出せていないという現実に向き合う必要がある。

グループワークやディスカッションにおいて「参加度」を下げる最も大きな原因は、聴覚障害学生が発言しにくい、ということにある。その背景として、大きく 4 つの要因があり、相互に影響しあっている（中野スライド 3）。例えば聴覚障害学生が発言のタイミングをつかむことに関して言えば、「複合移行適格場」（Ford、C.E.& Thompson、S.A.（1996）<sup>[5]</sup>）をとらえることの困難さが挙げられる。ああこのへんでこの人の会話が終わるな、というのは、イントネーションや統語、語用論的につかむのだが、これが通訳の中に十分に反映されていなければ、聴覚障害学生は自分の発言タイミングを逃してしまう。この他に、情報保障を介することによるタイムラグや情報の欠如、入力と出力形式の違いも大きく影響する。このように、グループワークやディスカッションへの参加困難さは、情報保障をつけるだけでは解決しきれない、複雑にからみあったものであることを念頭に置く必要がある。

グループワークやディスカッションでの支援について考える際、聴覚障害学生だけでなく支援室スタッフにも、心のどこかで「(参加できないのは)仕方がない」という諦めの気持ちがあるのではないだろうか。聴覚障害学生も支援スタッフも何らかの支援を実施してみても、「ここまでやったのだから仕方がないよね…」と心情的に納得しようとする前に、なんとなく心の隅にひっかかっている「参加を阻害している要因」を分析的に捉える姿勢が必要であろう。

阻害要因には、①情報保障要因、②人的環境要因、③個人要因があり、特に②は①の「通訳のしやすさ」に大きく影響し、②と③は影響しあう関係にある（中野スライド 4）。聴覚障害学生の参加を阻害する大きな要因となっているものを探り、どれを調整すべきか検討していく。その際、三角形の形は問わず、トータルの面積が大きくなるように調整することが重要である（中野スライド 5）。例えば聴覚障害学生が 1 年生で、場のコントロールがまだ難しいだろうと判断した場合は、情報保障を改善したり（情報保障要因へのアプロー



チ)、聴覚障害学生について周囲への理解を求めたりして(人的環境要因へのアプローチ)、個人要因をカバーしていく方法が考えられる。

しかし、人的環境要因に関しては、聴覚障害者にどのような配慮が必要か頭でわかっていたとしても、なかなか行動に結びつかないということもある。聞こえる人が聞こえない状態をずっと意識し続けるのは難しく、また、実際に有効な配慮に結びつけて実践する力には個人差がある。目指すべきは、その場面の構成員全員が完璧な配慮を行えていることではなく、配慮が漏れてしまったときに、ぎくしゃくせずにさらっと指摘しあえる関係、あるいはお互いの得意／不得意を調整しあって落としどころを作っていける関係である。

大学での学びにおいて、他者の考えを知り、意見を交わすことによって研ぎ澄まされる力は、非常に重要なものであり、独学では得ることができない。今のアクティブ・ラーニングで生じているバリアの状況について、支援室のスタッフも聴覚障害学生も、改善できる要素は何か、を今一度考えてみてほしい。教員や周囲の学生の協力が得られにくい、すべて外国語でやりとりが進むなど、さまざまな超えがたいバリアが生じているケースもあるだろう。改善には時間がかかることもある。いろいろやってみたけれども、やっぱりしんどい…。そのときに、「仕方ないよね…」のことばが、聞こえる／聞こえないに関係なく重みを持って共有される。今回を機に、改めて「参加」の本質について考えていただければと思う。

### 3. まとめにかえて

村田／それぞれのお話は「安心」がキーワードだったように思う。最後に講師から一言ずつお願いしたい。小佐野先生には、心理的側面について。有海先生には周囲の理解を得ることについての利用学生の意識付けに関して。中野先生には、「参加」は何を生み出すのか、なぜ我々が「参加」に拘るのかについて。

小佐野／情報保障があっても十分に「参加」できるわけではない。お互いに気持ちよく「参加」するためにも、日頃から指摘し合える関係を作ることが大事だと思う。

有海／聴覚障害学生には4年をかけて、周りに説明していく力を身につけて欲しいと思う。

支援者には、聴覚障害学生と対話し、時には代弁しながら、後押しをして欲しい。

中野／様々な背景を持つ人々が議論に参加することで化学反応が生まれ、新しい知が生み出される。それが大学での学びのおもしろさであり、ダイバーシティによる知の創出である。聴覚障害学生も多様性を持つ人々の1人。聴覚障害学生が高等教育機関の教育や研究に「参加」できることで新しい化学反応が生まれ、それが大学全体のメリットにつながる。大学関係者が、それぞれの立場で聴覚障害学生の本質的な「参加」の実現に向けた努力を継続してほしい。

村田／すべての学生は、場に参加し、お互いの関係性から学び合い、大学という場の価値を作り出す一員であると思う。1人の学生がそこに参加できないことは、大学としての





価値そのものを 1 つ失ってしまうことと同義である。すべての学生が価値を生み出せる存在であるよう、大学として必要なことは何か、今一度考える場となることを願い、結びとしたい。

#### 参考文献

- [1] 有海順子 (2013) 聴覚障害学生に対するパソコン要約筆記の特徴に関する研究：大学の授業場面・支援者・当事者の要因から．筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻博士論文．
- [2] 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク情報保障評価事業グループ編著 (2007) 大学ノートテイク支援ハンドブック．人間★社，56-57．
- [3] 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (2009) DVD「Access！聴覚障害学生支援②小さな「気づき」で変わる授業・変わる大学」．
- [4] 文部科学省 (2017) 障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第二次まとめ）について．文部科学省，2017 年 4 月，  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/074/gaiyou/1384405.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/074/gaiyou/1384405.htm)  
(2020 年 3 月 6 日閲覧)
- [5] Ford, C.E. & Thompson, S.A. (1996) “Interactional units in conversation: syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turns” *Interaction and grammar: Studies in interactional sociolinguistics 13* . Ochs, E., Schegloff, E.A., Thompson, S.A. (Eds.), New York, Cambridge University Press, 134-184.



図 5 全体会企画の様子（写真）



参考：当日配布（スライド）

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 聴覚障害学生の『参加』を支える支援 —話し合い場面から考える—

1

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

### 「話し合い場面 1・2」

#### ○登場人物

聴覚障害学生（1名）

支援担当職員（1名）

支援学生（2名）

#### ○場面設定

パソコンノートテイカー勉強会の企画について話し合っている場面

2

PEPNet-Japan

## 「話し合い場面 1・2」

### ○コミュニケーション方法

#### ・聴覚障害学生

手話・口話使用／聴覚活用△

発言は手話＋音声

#### ・職員・支援学生

ゆっくり話す＋簡単な手話を時々つける

※両場面とも使用されている手話のレベル  
はそれほど変わらない（どちらも不十分）

3

PEPNet-Japan

## 「話し合い場面 1・2」

### ○撮影方法

「聴覚障害学生目線」で撮影

### ○字幕

・聴覚障害学生の発言 → 黄色字幕  
(心の声: カッコ書き)

・職員・支援学生の発言 → 白色字幕  
(聴覚障害学生の理解状況を表現)

4

PEPNet-Japan

## ポイント

2つの場面は聴覚障害学生から  
どう見えていたか？

「参加」がうまくいかない時・・・

- ・周りの気づきはあったか？その対応は？  
(コミュニケーションのずれ、視線、フォロー・・・)
- ・聴覚障害学生はどう対処していたか？
- ・聴覚障害学生はどのような心理状況だったか？

5

PEPNet-Japan

話し合い場面 映像  
場面1：音声なし、字幕あり  
場面2：音声あり、字幕あり

6

PEPNet-Japan



# 授業におけるグループでの 会話や活動に関する 聴覚障害学生向けアンケート

7



対象：本シンポジウムに申込みのあった  
聴覚障害学生（49名）  
方法：Web調査  
期間：2019年10月30日～11月10日  
回収状況：26名

8

## 質問項目：

### 授業におけるグループでの会話や活動の場面において

- ・受けているサポート
- ・サポートへの満足度とその理由
- ・もっとも苦勞している場面での参加度とその理由
- ・困ったこと
- ・授業担当教員や支援室教職員への相談経験の有無
- ・相談した結果、講じられた改善方法
- ・困った状況への対処方法
- ・自由記述（うまく参加できていないと感じたことや、困っていること、逆にうれしかったことなど）

9

PEPNet-Japan

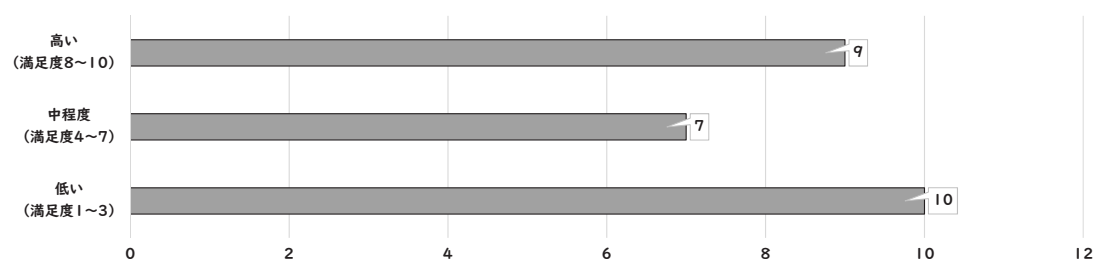
### 授業におけるグループ活動場面において 利用しているサポートや手がかり【複数選択】(N=105)

パソコンノートテイク	18
配布資料・教科書等	14
手書きノートテイク	13
自分の耳で聞く	12
口話	12
板書	10
音声認識（修正者あり）	6
音声認識（修正者なし）	5
友人のノート	5
手話通訳	4
補聴システム	3
サポートは受けてない	2
その他	1
合計	105

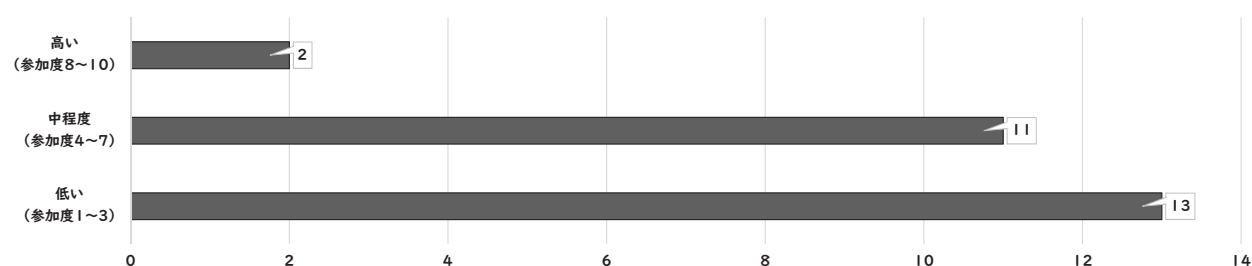
PEPNet-Japan



授業におけるグループ活動場面でのサポート満足度(N=26)



授業におけるグループ活動場面への参加度(N=26)



## 満足度の理由：(高満足度群)

- ・補聴システムがあればあらかた拾えるから。
- ・ほぼ内容が分かるから。
- ・グループでの会話をするとき、ノートテイクがいて、どんな内容なのか分かる。
- ・サポートはゆっくりしてるけど的確にしてくれてるからやや満足。
- ・障壁がない。
- ・テイクを通していろいろな学科の人と仲良くなれる。
- ・みんなが話していることをしっかりテイクしてくれてるので、結構助かっているから。
- ・手話を使ってくれる先生でも、時々他の聴者と話す時に手話を使い忘れていたり、抜けていたりするときがあるから満足度は10ではない。







## 満足度の理由：(中程度群)

- ・情報量が充分ではない。タイムラグを感じる。
- ・グループの人数や場所にもよるが、大講義室などで行う際には聞き取りづらさを感じる人が多いため。
- ・ないよりまだから。
- ・会話についていけずグループが笑った時に気になる。
- ・話している内容はパソコンテイクで理解できるが、リアルタイムな会話の流れとズレがあるため発言のタイミングがわからないため。また話の流れを理解することに集中しなくてはならないため自分の意見を考える余裕があまりないことも影響している。
- ・同じ班の学生同士の席が近く、話し声が聞き取りやすいから。
- ・大人数になると、なかなか自分から発言は難しいと感じるから。  
(聴覚障害とは別で、性格が関係あると思います。)

13

PEPNet-Japan



## 満足度の理由：(低満足度群)

- ・情報保障のおかげで相手の話してる内容はわかるが、自分の意見を話すときに手間がかかってしまって、自然と一方通行のコミュニケーションになってしまう。
- ・自分の思うとおりに、聞けない、伝えられない。
- ・相手も、言えば協力してくれるが、手本となるものを知らない上に、私自身も何がベストなのかが分からず、黙って聞くことに専念してしまう。
- ・情報に即時性が無いので、「参加」できていないと感じてしまうため。
- ・音声認識(修正者あり)を使用しているが、座学で一斉講義なら大丈夫なのですが、会話になるとついていけない事が多い。
- ・情報保障がつくことの意味とテイカーや通訳のデメリットを知らない人が多い。そのため声が小さかったり先に話を進めたりすることが多い。
- ・テイカーさんがいることで、自分も相手も気を遣ってしまって、グループワークにならないから。
- ・同じ空気を共有できない。他人の目が痛い
- ・病院等での看護実習では情報保障をつけられないから。
- ・病院側のほうで情報保障の許可がでても、患者さんから拒否があった場合は情報保障そのものを検討することができないから。

14

PEPNet-Japan



## 参加度の理由：（高参加度群）

- ・片側難聴だが、聞こえるように席を自分でしっかり確保するなど「自分で」工夫をしているから。
- ・基本口話でやり取りしているので、事情を伝えればほとんどの人はゆっくり話そう配慮してもらえるから。ただ、口の形によってはゆっくり話してもらっても分からない人はいるのでその時はどうしても分かったふりをしてしまう。

15

PEPNet-Japan

## 参加度の理由：（中程度群）

- ・わりとできる時とできない時の差が大きいから。
- ・グループでの会話をすると、自分から話すのが少し苦手で、時間がかかることがある。
- ・自分の耳で聞ける学生は2人の会話が被っても聞けるが、口話や音声認識の場合は1人の声しか聞く事ができない、2人で話されると参加できない。こういう場面が多くある。
- ・慣れてきたグループだと私に意見を聞いてくれたり配慮してくれたりするが新しいグループでやると全然発言できなかったことがある。
- ・会話を把握するタイミングにズレがあるので、ぽんぽんと盛り上がる会話に参加することが出来ないため。全員が手話ができ手話で議論する場合と比べると半分くらい。
- ・盛り上がったときに、みんなの話が早すぎてついていけない時があるから。

16

PEPNet-Japan

## 参加度の理由：（低参加度群）

- ・情報が入ってくるのに時間差があり、なかなか話し合いに参加できないから。
- ・1番苦勞する場面は口話で全く聞き取れない時だから。
- ・ディスカッションの形式の講義は、避けるようにしてしまう。
- ・ペアになる人は大体同じ人で、毎回同じになってしまう相手にも申し訳ないと思う。
- ・情報量が充分ではない。タイムラグを感じる。
- ・自分で発言はしない。求められた時にだけ答える。やはり、理解がないというのがでかい。それは、もしかすると逃げの言葉として楽したいがために使っているのかも知れない。
- ・周りが面倒臭がる空気があるため。
- ・また、アセスメントやカンファレンスの演習では、アドリブでの会話がが多く、話の内容すら把握できないため。
- ・初めから声を出すと聞いてくれたり質問してくれたりするが、他の人が進めると何を話してるのか理解することで精一杯になってなかなか意見を言えない。また、口話だけだと今何を話してるのか分からないことから主張できない。
- ・雑談の時は入らなくていいと思われてるのか情報保障がない。
- ・全く聞こえないので、音声認識など工夫すれば会話についていけることもあるが、マイクの配置や聴者側の使い方によってはうまく生かせないこともあり、常に不安があるため、全く参加出来ていないように感じるが多い。
- ・話せる時は話せるが、自分からは基本的に、聞こえる学生とグループを作って話すことはないと感じているから。
- ・プリントに書いた考え・意見を読み出すだけで、話し合いの時間が終わってしまうこともあったから。
- ・情報保障が全くない場合はほぼわからない。
- ・テイクがワンテンポ遅れているので、意見を出そうと思ってもその時に言えない。
- ・話についていくのが精いっぱい、自分が発言できる余地がないため。

17

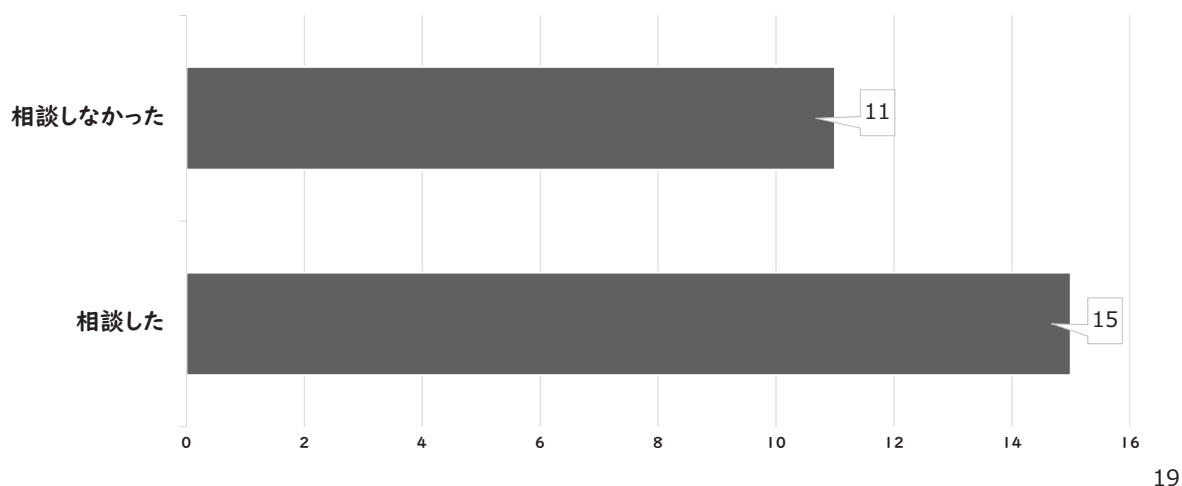
PEPNet-Japan

## 授業におけるグループ活動場面において困ったこと【複数回答】（N=146）

発言のタイミングがつかめなかった	18
会話の流れやポイントがよくわからなかった	15
聞き返したり確認をしたりするなど会話や活動を止められる雰囲気ではなかった	15
どのような結論になったのかわからなかった	14
自分以外のメンバーだけで会話や活動が進んでいった	14
聞かれている内容や意図がわからず回答や発言ができなかった	13
誰がしゃべっているのかわからなかった	11
場違いな発言をしてしまった	10
自分や通訳者がいることで会話や活動がもりあがらなかった	9
通訳が追いついていないのに他のメンバーに待ってもらえなかった	9
会話の流れやポイント、自分の発言のタイミングがつかめる通訳ではなかった	7
自分の発音がよくないため自分の言ったことが通じていないようだった	6
その他	5
合計	146

PEPNet-Japan

## 授業担当教員や支援室教職員に相談をしましたか (N=26)



## 授業担当教員や支援室教職員に相談をした結果とられた改善方法【複数回答】(N=40)

教員自身がグループ活動をサポートしてくれた	8
具体的に守ってほしいルールや協力してほしい内容について口頭や文書で教員や聞こえる学生に周知された	7
グループ編成を少人数にする、コミュニケーションをとりやすい友人にする、といった変更が行われた	7
情報保障手段が変わった	5
座席位置や可動式の机・椅子がある教室への変更が行われた	5
よりスキルの高い通訳者・支援学生に変わった	3
サポーターやTAが配置された	2
グループではなく単独で課題に取り組むように変更された	2
その他	1
何もしてもらえなかった	0
合計	40

第 15 回日本聴	困った状況においてとった対処方法【複数回答】(N=136)		
	とにかく一生懸命見たり、聞いたりした	20	
	はじまる前や途中でグループ内で配慮をお願いした	17	
	終わってから、話し合いの記録を見て確認した	15	
	しかたなくわかったふりや作り笑いをしてやり過ごした	13	
	他の人の様子を見て同じように動いた	12	
	グループ活動中、誰かに質問したり確認したりした	12	
	終わってから、誰かに質問したり確認したりした	12	
	隣の人のメモを横目で見た	11	
	近くの人に書いてもらうようお願いした	6	
	司会をやるなどして話し合いや活動の主導権をにぎるようにした	5	
	グループとは無関係に1人で課題をやった	4	
	あきらめて何もなかった	4	
	助けてくれそうな人に視線を送った	3	
	その他	2	21
	合計	136	Net-Japan

### これまで授業でのグループ活動に関して、うまく参加できていないと感じたことや、困っていること、逆にうれしかったことなど

- ・グループ活動をするときに、自分から話すことがあまり得意ではなく、話すのに時間がかかる時もあった。自分が書いた紙を他の人に見せてもらうと、理解してくれたこともある。
- ・なにも言っていないのに、隣の人が筆談(ノートテイク)をしてくれた。
- ・知り合いのグループの人が分からなかった時にさりげなくノート見せてくれたり、先に私を紹介してくれてとても助かったことが嬉しかった。
- ・まず自分が発言することでその場に自分がいることをアピールできました。なんでもよいのでなにか発言して話しかけられやすい雰囲気を作ることが大切になると思います。
- ・考えすぎかもしれないが、自分がいることで雰囲気が悪くなっていると自己嫌悪に陥ることが大半であるため、グループワークがある日はとても憂鬱で、逃げ出したくなります。



## 聴覚障害学生の「参加」に関して －当事者の視点から－

山梨県立ろう学校  
小佐野 貴恵

### 話し合い場面 1（「参加」がうまくいかない状況）

－当事者の視点から－

- 誰が話しているのかわからない。（話し始めの冒頭がわからない）
- 何を話しているのかわからない。（手話、口形が見えない。手話の間違い、手話がない、見ていないところでの話など）
- 自分の理解と周囲の話のテンポが違う。
- 聞き返しても教えてもらえない。自分に必要だと思われる事項のみ伝えられる。（何が必要かは自分で決めること）
- 意見を言うタイミングが掴めない。（話の内容が掴めないからということもある）
- わかったふりをしてしまっている。（頷き）
- 聞き返したときの相手の反応によって、聞き返しにくくなることも。理解できなかった自分に嫌悪感を感じてしまう。
- 一生懸命見ているがわからないことも多い。→諦め

### 話し合い場面 2（「参加」できている状況）

－当事者の視点から－

- 挙手して自分を見たのを確認してから話し始めている。「聴こえない人が話し手を見てから話す」ということを周囲が常に意識している。
- 手招きして確実に呼んでくれる。
- 書き終わるのを待ってけている。
- 見ていなかった時の話を伝えてくれる。
- 相手が伝えきれていなかったという自覚をもち、再度説明する態度が見られる。
- 相手も伝えようとしてくれている雰囲気がある。→聞き返しやすい。
- 曖昧なところを確認しようとしている。

### 対策案

- こちらが話し手を見てから話し始めてほしいと伝える
- なぜそれが必要なのか説明する
- 周囲のメモを確認させてもらう
- 自分が置かれている状況を伝える
- 発言するときのルール（挙手、顔を見てから話す）の確認
- 板書やノートなど視覚情報を活用する
- 座席の工夫（発言者、板書が見渡せる位置がよい）
- 知りたい、参加したいという気持ちを伝える



周囲の理解

自分の聴こえ方について知り、自身について説明できる力が必要

### 聴覚障害学生として

今回の話し合い場面は、何度か似たような話し合いをもつケース  
同じメンバーで何度かやっても起こりうる

☆きこえにくいこと、わからないことは悪いことではない

☆聞き取れている、読み取れていると思っても、聞き落としや  
見落としがある ← このことを自覚する

☆自身の状況を説明し、どのようにしたいか具体的に提案することが、  
自分のためだけでなく、周囲のためにもなる

言葉にして周囲に伝えることが大切



第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 聴覚障害学生の「参加」にかかわる課題と支援

— 支援者の視点から —

山形大学 障がい学生支援センター  
有海 順子

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 聴覚障害学生の「参加」にかかわる課題

- 2つの映像資料を見比べて…

周囲(グループメンバー)の  
**理解・意識の違い**

↓

「伝わる」ことの意識  
「伝わっていない」ことの意識

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

場面1	場面2
<ul style="list-style-type: none"> <li>手話は部分的に使用</li> <li>聴覚障害学生が自分の方を見ていない、話しに気づいていないのに話し始める</li> <li>伝わっていないことに気づいていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>手話は部分的に使用</li> <li>聴覚障害学生の様子を見ながら話す</li> <li>注意を向けさせ、視界に入ってから話す</li> <li>視覚情報の活用</li> <li>ノートを取ったり、別の話者を見ている間の情報を改めて伝える</li> </ul>

確実に伝わることを意識

伝わっていないかも？と気づける

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 支援者・周囲は何を理解・意識すべきか

◆ 討論場面における聴覚障害学生の情報取得・理解の困難さ (手話や支援があっても！)

```

    graph LR
      A[支援による情報] --> B[断片的・不完全]
      A --> C[タイムラグ]
      B --> D[内容がわからない]
      C --> E[発言のタイミングがつかめない]
      D --> F[参加が難しい]
      E --> F
  
```

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 聴覚障害学生の情報取得方法

聴覚障害学生は様々な手がかりを利用して情報を得ている  
(アンケートより) Ex. 支援、配付資料・教科書等、話者の口元、板書、周囲の様子など

↓

複数の情報の同時処理は難しい  
視界に入らない情報はわからない・気づきにくい

したがって…

「手話で話している」  
「支援をつけている」

≠

情報が伝わる  
参加を保障する

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 情報保障とは…定義の再確認

場を共有するすべての人が  
同質・同量の情報を得て、  
**その場に参加できるようにする**  
ための活動(支援)

出典: 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク 情報保障評価事業グループ(編)「大学ノートテイク支援ハンドブック」

- ✂ 情報保障のゴールは、**参加の保障**である
- ✂ 情報保障は、授業の時だけ必要なものではない

PEPNet-Japan



第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

### 課題解決のためのアプローチ これまでの経験を踏まえて

障害学生支援担当者として 周囲への(継続的な)理解啓発

支援者として 参加の保障を意識した(継続的な)対話・調整

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

### 課題解決のためのアプローチ これまでの経験を踏まえて

障害学生支援担当者として 周囲への(継続的な)理解啓発

- ・聴覚障害学生のいるコース教員に対して
- ・ゼミメンバーに対して
- ・養成講座において支援学生に対して

「聞こえのシミュレーション」体験で支援の必要性を理解してもらう  
(PEPNet-Japan作成「Access」聴覚障害学生支援DVD②」内に収録)

情報取得の困難さを理解 → 「伝わる」ことを意識する → 情報提示の工夫・試行

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

### 課題解決のためのアプローチ これまでの経験を踏まえて

支援者として 参加の保障を意識した(継続的な)対話・調整

- ・聴覚障害学生が支援に関する要望を言いやすいよう、コミュニケーションを大事にする
- ・参加のしやすさ、支援のしやすさを考慮した対話・調整
  - 一 座席の位置
  - 一 表示画面の設定(文字の大きさ、行間の幅、背景色など)
  - 一 情報提示のタイミング、視線誘導 など
- ・ゼミ・討論場面(特にパソコン通訳)
  - 一 参加者全体が文字情報を確認できるよう、モニターやスクリーン投影を行う
  - 一 話者(名前)の確認 → 座席表の作成
  - 一 他の参加者に説明する(聴覚障害学生と相談しながら)
    - … 支援が完全ではないことを伝え、発言の仕方などについてお願いする

・司会・書記を設ける  
・発言前に挙手・名前を言う  
・発言の重なりを避ける  
・参加を確認する など

PEPNet-Japan

第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

大阪大学  
OSAKA UNIVERSITY

聴覚障害学生の『参加』を支える支援  
—話し合いの場面から考える—

アクティブ・ラーニング『参加』の  
高い壁は乗り越えられるのか

大阪大学キャンパスライフ健康支援センター  
中野 聡子

1

アクティブ・ラーニングなんてないほうがいいのに…

「授業においては、講義、演習等その形態を問わず、障害のある学生が障害のない学生と平等に参加できるようにアクセシビリティを確保することが重要である」

…とあるものの

(文部科学省「障害のある学生の修学支援に関する検討会報告(第二次まとめ)より抜粋)

2



## グループディスカッションにおける参加困難の背景

### 文字通訳があったとしても…

各要因が相互に影響

- ◆文字通訳作業によるタイムラグ
- ◆音声発話と文字発話の速度差
- ◆他者の発言のポイントや内容がつかめる通訳になっていない
- ◆音声日本語から書記日本語への変換
  - 非言語情報の消失
  - 要約によるディスコースマーカーの脱落
- ◆複合移行適格場(Complex Transition Relevance Place) (Ford & Thompson, 1996)をとらえることの困難さ
- ◆反応的トークン(Reactive Token) (Clancy et al., 1996)の困難さ
- ◆日本語の談話におけるターンテイキングの特徴
  - 「自己コンテキスト化」しやすさ…話すときに周囲の状況に注意して自分だけを強く押し出すことを避ける戦略(メイナード, 1993)

3

## 「仕方がないよね…」の前に 参加度に影響する3つの要因を分析する

◆2つの要因は影響し合う関係  
◆構成員によって極めてダイナミックに変動

### 【情報保障要因】

- ◆補聴援助機器だけで十分なのか
- ◆ノートテイクや手話通訳は、聴覚障害学生が発言のポイントや内容を的確に把握し、また自身の発言が行いやすい訳出方法になっているか
- ◆通訳によるタイムラグは最小限に抑えられているか

通訳のしやすさに影響

### 【人的環境要因】

- ◆司会進行や会話の調整役を設け、ディスカッションや共同作業が構造化された進め方ができるか
- ◆場面構成員一人ひとりが、通訳が入ることや聴覚活用での聞きとりに配慮した話し方や資料の示し方ができているか
- ◆お互いに配慮しあう雰囲気や誘導できるキーパーソンがいるか、聴覚障害学生といつもコミュニケーションをとっている人物がいるか

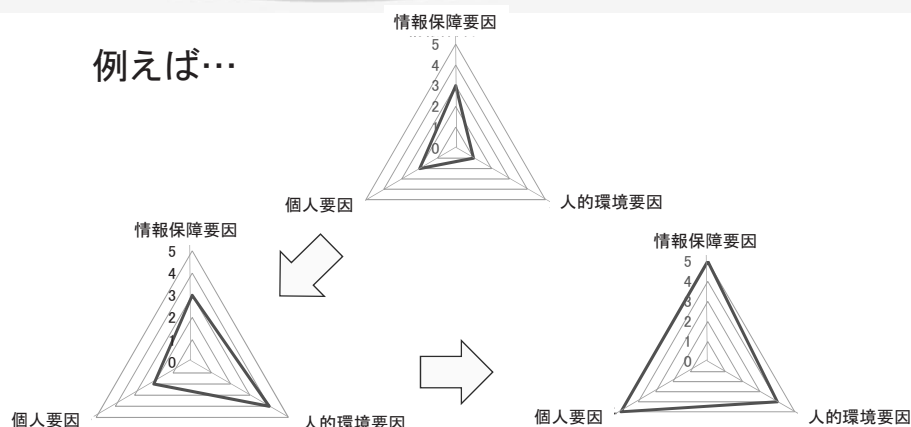
### 【個人要因】

- ◆内向的／外向的
- ◆ストレスがない状態でのアクティブラーニングの経験があるかどうか
- ◆アクティブ・ラーニングに適した通訳スキルをもつ通訳を受けた経験があるかどうか
- ◆アクティブラーニングに求めるもの

4

## 3つの要因をコントロールする

例えば…



場面や構成員によって、取りうる対応策を調整する

5

## 人的要因向上の目標地点 理解と行動の完全一致は難しいから…

- 聴覚障害者の聞こえや理解の状況にずっと意識を向け続けることは困難
- 理解が「ある／ない」の差ではなく、「気づく力」「配慮する力」には個人差がある

最低ラインの情報アクセシビリティの担保は必要だが…

完璧に  
配慮されている



- ◆ 配慮が不十分なときに  
ぎくしゃくせずに  
さらっと指摘しあえる
- ◆ 個々が無理なくできる  
範囲をつかむ

6





…そしてもう一度「参加」について考えよう

7



## セッション企画報告

(聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2019

教職員による聴覚障害学生支援実践発表 2019

関連団体活動紹介

聴覚障害学生支援に関する個別相談)

石野麻衣子<sup>1)</sup>，関戸美音<sup>1)</sup>，中島亜紀子<sup>1)</sup>

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター<sup>1)</sup>

**要旨：**聴覚障害学生支援の質的向上を図るにあたっては、学内にとどまらず学外の様々なリソースにアクセスし、助言や情報を得ることが、非常に有効である。本シンポジウムでは、第3回（2007年）よりセッション企画を実施し、多様な形で当事者・関係者が交流し意見交換・情報交換する機会を設けてきた。今回は、例年実施している「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2019」「教職員による聴覚障害学生支援実践発表 2019」「関連団体活動紹介」に加え、事前申込制の「聴覚障害学生支援に関する個別相談」を実施した。これにより、参加者同士の情報交換にとどまらず、個別の課題に対して情報提供を行う場を設けることができ、参加者の多様なニーズに応える企画となった。

**キーワード：**聴覚障害学生支援，支援実践，実践発表，相談対応

### 1. 聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2019

#### 1.1 はじめに

「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト」は、2008年に初めて実施し、以降毎年開催しているシンポジウムの一企画である。本コンテストは、全国の大学・機関が日頃実践している支援の取り組みを発表し、参加者同士の情報交換を行うとともに、関係者の創意工夫やアイディアの斬新さを表彰するものである。また今年度は、ポスターによる発表だけでなく、全体会 I において各団体の PR を実施し、参加者に活動をアピールする機会を設ける取り組みも行った。

本稿では、今年度シンポジウムで実施したコンテストについて報告する。

#### 1.2 参加団体 30 秒アピール

今年度、本コンテストは2つの企画を行った。1つ目は、全体会 I（10時～10時30分）にて実施した「コンテスト参加団体 30 秒アピール」、2つ目は、セッション企画（10時45分～12時30分）で行った「ポスター発表」である。



コンテスト参加団体 30 秒アピールでは、発表者が舞台上に登壇し、各 30 秒で自らの取り組みや発表の見所を発表した。発表方法や情報保障の方法は、各団体で決定することとした。その結果、聴覚障害学生が手話で発表し、それを横で聴者の支援学生が読み取る団体や、発表者全員で登壇し、全員で手話を使って大学名を表現する団体、横断幕を掲げる団体など、様々な工夫が見られ、参加者を楽しませた。同時に、その後のポスター発表でどの団体に話を聞きに行くかの参考にできたようだった。



図 1 30 秒アピールの様子（写真）

### 1.3 ポスター発表及び表彰

#### 1.3.1 方法

ポスター発表では、参加団体があらかじめ作成したポスターを掲示し、その前で発表及び質疑応答を行う形で実施した。今年度は 16 団体が応募し、これを前半（10 時 45 分～11 時 35 分）、後半（11 時 40 分～12 時 30 分）に分けて発表することとした。

参加者は、各団体の発表を見て、応援したい、参考になるなど、良いと感じた団体に対して一人 2 票投票が可能であり、得票数の多い大学に対して表彰を行った。また、プレゼンテーション賞は、障害の有無やコミュニケーション手段の違いに関わらず、全ての人に伝わる工夫を行った団体に対して授与するもので、審査員が立場を隠して各団体の審査を行い、評価の高かった団体を受賞団体として決定した。

全ての賞は、全体会Ⅱの表彰式（15 時～15 時 30 分）で授与を行った。



図 2 ポスター発表の様子（写真）

## 1.3.2. 応募状況及び結果

今回は、16 大学から応募があり、投票及び審査の結果、表 1 の通り受賞団体が決定した。

表 1 投票及び審査結果

賞	受賞団体
PEPNet-Japan 賞	宮城教育大学 しょうがい学生支援室 聴覚しょうがい部会
準 PEPNet-Japan 賞	関西大学 学生相談・支援センター
グッドプラクティス賞	大阪教育大学 障がい学生修学支援ルーム
新人賞	東北大学 特別支援室 利用学生・学生サポーター
プレゼンテーション賞	九州ルーテル学院大学 障がい学生サポートルーム
奨励賞	東京学芸大学 障がい学生支援室 首都大学東京 ダイバーシティ推進室 千葉大学 ノートテイク会 九州大学 障害者支援ピア・サポーター 北星学園大学 アクセシビリティ支援室 NoteTakers 松山大学 学生支援室 障害学生支援団体 POP 日本福祉大学 学生支援センター 学生スタッフ 愛媛大学 障がい学生支援ボランティア 東北福祉大学 障がい学生サポートチーム 札幌学院大学 アクセシビリティ推進委員会 愛知教育大学 情報保障支援学生団体てくてく

## 1.4 発表内容

PEPNet-Japan 賞を受賞した宮城教育大学は「前進～共に歩むために～」をテーマとしたポスターであった。利用学生、支援学生、運営スタッフが共に歩む様子をウサギとカメに例え、新たな活動を紹介する映像や広報誌の作成など、お互いの距離を縮め、考えを共有するための取り組みを発表した。また、準 PEPNet-Japan 賞を受賞した関西大学は、高校まで支援がなかったとある聴覚障害学生と、学生を支えるスタッフの大学入学後 4 年間の歩みを、手書きのかわいらしく、わかりやすいイラストで紹介した。

発表全体を通して見ると、情報保障の質的向上を目的とした取り組み、音声認識技術等支援技術を用いたサポート、授業以外での支援活動など、幅広いテーマが見られたが、特に聴覚障害学生・支援学生・教職員間のコミュニケーションを円滑にするための工夫や実践が多く紹介されていた。

また、プレゼンテーションスキルや障害の有無、コミュニケーションモードに関係なく、誰にでも伝わる発表を行ったのかどうかを基準とした「プレゼンテーション賞」は、多様な背景をもつ複数の審査員が発表を見て回り、審査を行った。この結果、最も評点が高かった





九州ルーテル学院大学が受賞した。評価の高かった大学は、一方的にパンフレットや説明資料を渡すだけでなく、発表を聞きに来る方に対する積極的な働きかけやコミュニケーション上の工夫が見られた。

表1のPEPNet-Japan賞からプレゼンテーション賞受賞団体のポスターについては、167ページ以降に掲載している。奨励賞も含めた全てのポスターは、当日資料及びPEPNet-Japanホームページのシンポジウム報告ページにも掲載しているため、ぜひご覧いただきたい。

### 1.5 まとめにかえて

今年も様々なテーマをもとに発表、活発な情報交換がなされていたが、関係者間のコミュニケーションに関する課題が多く取り上げられていた点は、昨年度と共通しており、昨今の聴覚障害学生支援における重要なトピックスの一つと言えるのではないかな。

また、本コンテストは学生が主たる発表者となって活躍しているという点で、他に類を見ない企画となっている。事務局には「コンテスト参加を契機として、学生たちが活動を振り返り、課題を整理し、未来に向けた議論ができる」といった、プロセスに価値を見出す大学の声や、「学生たちの頑張りが目に見える形で承認される」といった声など、情報交換の場としての価値だけではない、多くの肯定的な意見が寄せられている。障害者差別解消法が施行され、合理的配慮の提供が大学の責任で行われつつある今、それを支える学生にフォーカスが当たる企画を今後も継続することが望まれているのではないかな。



図3 表彰式の様子（写真）

## 2. 教職員による聴覚障害学生支援実践発表 2019

### 2.1 はじめに

「教職員による聴覚障害学生支援実践発表」は、2016年よりシンポジウム内企画として実施している。対象者は、聴覚障害学生支援に関わる教職員であり、自らの実践を報告し、参加者と共有することで、新たな支援実践につなげることを目的としている。

今年度は9大学の関係者よりご発表をいただき、大変充実した情報交換の場とすることができた。本稿ではこの様子を報告する。

## 2.2 概要

本企画は、セッション企画の一つとして、シンポジウム当日の 10 時 45 分～12 時 30 分  
に実施し、うち 11 時 15 分～12 時 5 分は発表担当者による説明を必須とした。

企画実施時間の参加対象者は教職員とした。これは、本企画が教職員同士で密な情報交換  
を行うことを目的としているためである。ただし、学生やその他関係者にもニーズがあるこ  
とから、教職員以外の参加者が見て差し支えないと発表者が判断した場合に限り、昼休憩中  
もポスター展示のみを継続し、自由に見ていただけるようにした。



図 4 発表の様子（写真）



図 5 発表の様子（写真）

## 2.3 発表内容及び発表者

発表内容及び発表者は表 2 の通りである。

今年度の発表も、大学における手話通訳者養成プログラム、外国語科目や実技科目におけ  
る支援実践、学内外に向けた研修会等、多岐に渡るテーマで発表がなされ、どのブースも熱  
心な情報交換がなされていた。

各発表の詳細は、当日資料の巻末に掲載している。ぜひお読みいただきたい。







表 2 発表内容及び発表者

タイトル	機関名及び発表者
体験を通して考える授業者としてできること ～FD研修会での取り組み～	宮城教育大学 しょうがい学生支援室 前原明日香 及川麻衣子 佐藤晴菜
授業における手話通訳者養成の実践報告 手話通訳者養成講座実践レベル準拠「日本手話と 日本語の違いを学ぶⅢ」について	群馬大学 教育学部 能美由希子 金澤貴之 学生支援センター・手話サポーター養成 プロジェクト室 下島恭子 川端伸哉
ろう・難聴者の就労上感じる具体的困難と 就労移行支援プログラムの検討	群馬医療福祉大学 社会福祉学部 益子徹
体育大学の実技科目における音声文字化 アプリ・iPadの活用方法の検討 ・聴覚障害学生を対象として・	東京女子体育大学 体育学部 体育学科 池和田克彦（教務部教務課） 小野田桂子（体操研究室） 小林福太郎（教務部長・道徳研究室）
大学の英語科目における聴覚障害学生 支援の実践報告	東京農業大学 応用生物科学部 谷本佳子
目白大学におけるビデオ教材字幕付支援に 関する実践報告	目白大学・目白大学短期大学部 学生課 障がい等学生支援室 荒木朋依
聴覚障害学生支援におけるキャリア発達支援 教職員のキャリア発達支援を含めて	小田原短期大学 杉中拓央
中国語の授業における人工内耳使用学生に 対する情報保障について	大阪府立大学 高等教育推進機構 清原文代
障がい学生支援に関する地域開放型講演会 開催の意義 ー九州ルーテル学院大学の7年間の取り組みー	九州ルーテル学院大学 障がい学生サポート委員会 佐々木順二

## 2.4 まとめにかえて

多くの大学にとって身近な話題から、先進的な取り組みまで、幅広い実践を多くの教職員と共有できたことが、本企画の成果と言えるだろう。今年は聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテストや関連団体活動紹介と同一会場で開催できたことで、多くの教職員が行き来していた印象を受けた。

一方で、今年は昼食休憩中に継続して展示されていたポスターが例年より少なかったこともあり、教職員以外の参加者からは見られず残念だったという声もあった。今後も、教職員の情報交換の場としての機能を維持しつつ、多くの参加者と共有するための工夫を模索したい。



## 3. 関連団体活動紹介

### 3.1 はじめに

本企画は、大学間・関連機関間のネットワーク形成と活性化に寄与することを目的に、セッション企画の一部として実施したものである。聴覚障害学生や支援担当教職員等が地域で活用可能な支援に関連する社会資源を知るための場としての効果を期待し、実行委員会でも検討したうえで、開催地の関連団体等に呼びかけ、実施している。

### 3.2 内容

聴覚障害学生支援に関わる周辺領域の諸機関に依頼し、以下の団体に出席いただいた。

#### 【関連団体紹介】

- 東京大学 障害と高等教育に関するプラットフォーム形成事業（PHED）
- 京都大学 高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）
- 関西学院大学 手話言語研究センター
- 国立民族学博物館 日本財団助成手話言語学研究部門（みんぱく手話部門）
- 社会福祉法人 全国手話研修センター
- 公益社団法人 大阪聴力障害者協会
- 全日本ろう学生懇談会
- ソノヴァ・ジャパン株式会社

#### 【筑波技術大学 活動紹介】

- 産業技術学部
- 障害者高等教育研究支援センター
- 教育関係共同利用拠点「障害者高等教育拠点」事業
- 聴覚障害者のための社会連携・協調型教育拠点の構築事業（高大連携プロジェクト）
- 聴覚障害者のためのキャリアサポートセンターの設置事業（※日本財団助成事業）
- 遠隔情報保障システム「T-TAC Caption」
- 誰もが学び・楽しめる博物館を！手話ガイド育成支援プロジェクト
- ISee TimeLine によるリアルスポーツイベントの次世代の情報保障
- ウェブベース遠隔 PC 文字通訳システム「captiOnline」
- 大学院技術科学研究科「クラウドソーシングによる手話文字通訳」



図 6 関連団体紹介 説明の様子  
(写真)

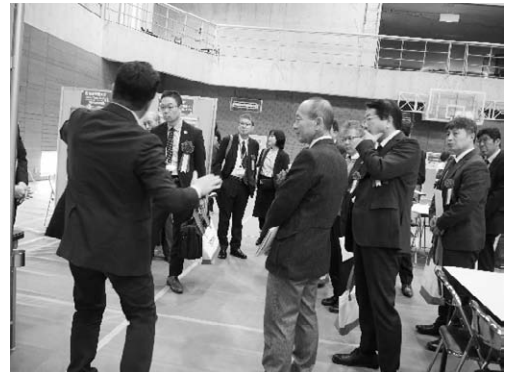


図 7 筑波技術大学活動紹介説明の様子  
(写真)



## 【PEPNet-Japan 紹介】

- 正会員大学・機関活動紹介
- 実行委員校・機関活動紹介ならびに各校紹介スライドショーの上映
- PEPNet-Japan 活動紹介・成果物（各種教材）展示

本シンポジウムでは、2会場にて各種団体紹介を実施し、いずれも多く参加者が各ブースに足を運び熱心に説明を聞く姿が見られた。コンテスト等と同会場に設けた会場では、大学と聴覚障害者支援、情報保障支援に関わる各種団体が相互に活動の様子を知り、参加者との交流を図る場となっていた。また、筑波技術大学における各種プロジェクトの取り組み紹介の展示にも、多くの参加者が訪れ、最先端の支援技術に関する意見交換がなされた。

コンベンションセンター1階ホワイエでは、PEPNet-Japan や、正会員大学・機関、実行委員校・機関の紹介のパネル展示が行われた。さらに初の試みとして「実行委員校・機関紹介スライドショー」を上映し、各校の障害学生支援の取り組みや支援室の様子を紹介した。直接各大学を訪問することは叶わなくとも、実際の様子や特徴を、映像を通して知ることができ、多くの参加者が足を止めて鑑賞している様子が見られた。本企画は、今後も各開催地域で関連団体との連携を図りながら実施していきたい。

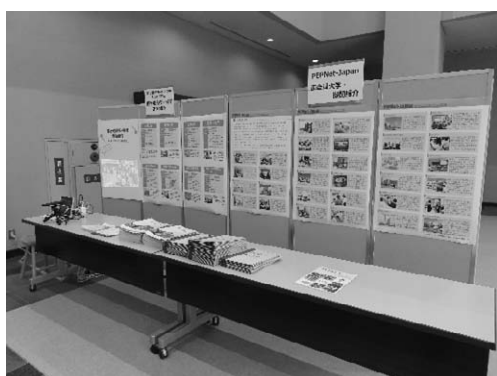


図8 正会員大学・機関活動紹介  
実行委員校・機関活動紹介  
展示の様子（写真）



図9 実行委員校・機関活動紹介  
スライドショーの一部（写真）

## 4. 聴覚障害学生支援に関する個別相談

### 4.1 はじめに

本シンポジウムは、聴覚障害学生支援に携わるさまざまな属性の方が、新しい情報や人との出会い、他大学での実践事例などを求めて参加されており、それらに応えるための多様な形態の企画で2日間のプログラムを構成している。中でも、参加者個々が抱える支援上の困難や悩みについて、個別に話を伺い情報を提供する場として、個別相談の企画を設けた。

各参加者が自律的に情報収集し、必要な人材とコンタクトを取って行くのを後押しできるよう、相談希望者には事前に相談内容を確認し、内容に応じて相談員を割り振って実施した。本稿では、個別相談企画の実施状況と今後の課題について報告する。

### 4.2 内容

#### 4.2.1 受付と対応の体制

これまでのシンポジウムにおいても、個別の相談に対応する趣旨で「相談コーナー」（第 8 回～第 11 回）や「懇談コーナー」（第 13 回）を設け、事前予約不要で気軽に立ち寄れる常設企画として、対応者と 1 対 1 で話したり、複数の参加者と共に意見交換をしたり、柔軟なやり取りができる場を提供してきた。

今回は、対応者が事前準備をして、短時間の相談時間内でも効果的な情報提供ができるよう、事前申込制・定員制（10 名）とし、相談したい内容をあらかじめ確認した上で実施することとした。但し、事前の申込がなく当日来場して相談や質問を希望する参加者がいた場合には、「当日受付」に案内し、改めて別の機会に相談対応できるよう、予約・調整する場も設けた。その結果、事前申込で 9 名、当日受付で 2 名の来場があった。

#### 4.2.2 当日の様子

個別相談は、1 件当たり 30 分とし、相談員が原則 2 名ずつで対応する形をとった。対応体制については、助言内容に偏りが出ることを防ぐと同時に、複数から情報を得ることで幅広い事例や情報に触れられることを相談者が体感し、積極的に情報収集することへの肯定感につながることを期待し、2 名体制とした。相談員は、PEPNet-Japan 運営委員、相談対応事業委員、正会員大学・機関で障害学生支援に携わる教職員から合わせて 9 名の方に担当いただいた。

参加者は主に大学教員や支援室職員であったが、その他、聴覚障害学生が職員等と一緒に、あるいは一人で来られたケースもあった。それぞれ現状で抱えている課題について、相談員が基本的な情報提供を行い、例えば支援室職員の支援体制に関わる相談については、他大学の事例を紹介するとともに、それら事例を参考として体制作りを進めるにあたってのポイントなどについて助言を行った。

#### 4.2.3 相談員及び参加者の声

シンポジウム終了後、参加者全体に対して行ったアンケートでは、個別相談に関する評価・感想として「支援担当者として日々迷うことが多いが、このような機会はあるといい」との感想が寄せられた。また、個別相談に参加した後、学内で協議を進めたり近隣大学との情報交換を行ったりと、具体的な体制整備の動きにつながったとの報告もいただいた。

対応した相談員からは、「事前に相談の概要を聞いておけたのである程度準備して臨むことができ、限られた時間の中で必要な話をすることができた」「シンポジウムで各種資料が





展示されているコーナーと連動すれば、その場ですぐ必要なコンテンツを紹介しアクセスしてもらえるのではないか」といった意見が寄せられた。

#### 4.3 到達点と課題

今回のシンポジウムは関西地区での開催であったため、同地域から初めて参加する大学教職員からの相談ニーズがあるのではないかと想定もあって個別相談を実施した。実際、個別相談の参加者の70%以上が関西地区からの参加者であった。また、シンポジウムに初めて参加したと申告された方も半数ほど見られ、想定した参加者のニーズに応える企画となり得たことがうかがえた。

また、事前に申込を受け付け、情報提供の準備をしておくという運営方法が奏功した面が大きい。同時に、当日になって話をしたいと申し出てこられる参加者への受け皿もきちんと用意しておく必要性を感じる。さらに、相談員からの指摘にある通り、教材やコンテンツ、関連する他機関の情報など、提供したい情報にその場ですぐアクセスしてもらえるような、資料展示や情報リストの提供など工夫も求められる。

今後も、さまざまな参加者が集まり、多様な企画に触れていただけるシンポジウムの効果を最大限に活用できるような、個別相談の企画を検討していきたい。



# 前日特別企画報告



.....  
SYMPOSIUM 2019





## 「アセスメントに基づいた合理的配慮と支援プランの作成」 ワークショップ報告

中野聡子<sup>1)</sup>，諏訪絵里子<sup>2)</sup>，池谷航介<sup>3)</sup>，金澤貴之<sup>1)</sup>

群馬大学 教育学部<sup>1)</sup>

大阪大学 キャンパスライフ健康支援センター<sup>2)</sup>

岡山大学 高大接続・学生支援センター<sup>3)</sup>

**要旨：**本企画では、(1) 修学場面における聴覚的機能制限の状況を実際的に把握し、合理的配慮として適切な支援方法を柔軟かつ多面的に考えることができる、(2) 聴覚障害学生が直面している困難について、聴覚的機能制限以外の個人因子や環境因子を考慮しながらアセスメントを行い、公平性・妥当性・教育の本質を保持しつつ支援を計画することができる、(3) 聴覚障害学生の心理的・社会的成長をふまえたアセスメント及び支援を計画することができる、の3点を到達目標として、障害学生支援の最前線で活躍している講師3名のレクチャーと、架空事例のアセスメント及び支援計画を検討するグループワークを行った。

**キーワード：**アセスメント，合理的配慮，支援計画

### 1. はじめに

聴覚障害があれば一般の聞こえる学生と同じやり方では困難、というのは誰にとっても認識しやすい事実である。しかし、個々の聴覚障害学生にとって聞こえの状況は聴力のみならず相手や環境によって大きく左右され、学業成績には情報保障だけでなく、本人の学力が影響する。また、アクティブラーニングでは、コミュニケーション成立の人的・動的要因が大きく影響するため、情報保障を配置するだけでは解決できない。一般の聞こえる学生との公平性、支援の妥当性、教育の本質を保持しつつ配慮や支援

を行っていくためには、聴覚障害学生が直面している困難について、聴覚的機能制限とそれ以外の個人因子、そして環境因子を適切に見積もるアセスメント力とそれらの結果を適切かつ有効な支援計画に落とし込む力が問われる。



図1 筆者（中野）  
（写真）



## 2. 話題提供

### 2.1 支援計画作成におけるアセスメントの役割（諏訪絵里子）

高等教育における合理的配慮とは「できる限りの最上の配慮」ということではない。抱えている修学上の困難が障がいによるものであるということの根拠があり、かつ学生の機能障がいにより適切な内容でなければならない。また、教育の水準や本質、ルールを変えないこと、公平性が損なわれないこと、が前提である。

ではなぜ最大の配慮ではないのか。過剰な配慮や妥当でない配慮は、公平性の問題を孕むだけでなく、障がい学生の学びの機会を奪い、学びを阻害する。さらには周囲の学生や教員の障がい学生に対する誤った認知を拡大することになりかねない。つまり、配慮が合理的であることではじめて学生の学びの機会は保証され、正しい障がい理解が促進されるのである。結果として、配慮の合理性を考えることは、大学および大学教育の水準を守るだけでなく、多様な学生が多様に学べる環境を拡大していくことにつながる。

本学では障害学生が所属学部にて配慮を申請すると、キャンパスライフ健康支援センター（HaCC）に依頼が寄せられ、合理的配慮決定のプロセスをサポートしていく。まず、HaCC担当コーディネーターが学生と面談し、ニーズや希望する配慮を明確化していく。その後、別の専門スタッフによるアセスメントを経て、合理的であると考えられる配慮案を作成する。この独立したアセスメント機能が、本学の支援体制の特徴の一つであろう。

アセッサーはコーディネーターのまとめた所見を合理性という視点からチェックする役割を担っている。必要に応じて主治医等に照会したり、検査を実施したりすることで、学生の機能障害を客観的に評価し、実際に配慮が必要な機能制限があるのか、学生の機能制限と希望する配慮内容に整合性があるかを確認する。アセッサーは機能評価を行うだけではない。学生の主張に整合性があるかどうか確認しながら、配慮が大学生としてのコンピテンスやアカデミックスタンドアードと矛盾しないか、またその配慮



図2 筆者（諏訪）  
（写真）

方法が困難に対して最も妥当か、公平性が保たれているかという点を考慮して、配慮内容の妥当性・適切性を評価することも求められる。コーディネーターはアセッサーのフィードバックを受けてニーズレポート（支援計画にあたるもの）を作成し、それをもとに合意形成の場である「合理的配慮検討委員会」において学生本人や所属学部教職員と共に具体的な配慮内容を決定していく、という流れになっている（詳細はスライド5参照）。このように本学ではアセスメントを行うことで、配慮の合理性をできるだけ客観的に判断できるよう努めている。

さて、そもそも配慮が十分に提供できなかつたり、逆に過剰になったりする原因の1つに、大学の義務と学生の義務が明確化されていないことが考えられる。大学の義務とは、

基準や責任の範囲を明確にすることであり、卒業要件やディプロマポリシーなどを明確にすることも含まれる。そしてそれを事前に学生に周知する必要がある。その上で、合理的配慮の内容をしっかりと決定し、大学の責任の範囲を明確にした上で提供する。必要があれば教育的配慮も行うが、あくまで義務として大学が行う範囲を定めておく必要がある。一方で学生の義務は、障害に対して適切な配慮を受けながら、大学のアカデミックスタンダードを満たすことである。そのためには、満たすべきスタンダードが何かを知っておかなければならない。そしてその上で安全に学生生活を送る努力をする必要がある。

合理性の判断をどのように行うかは各大学がその現状に合わせて検討していくことであるが、これらの義務を具体的に明確にすることは大学教育全体において適切な合理的配慮の提供の第一歩であると考ええる。

### 2.2 聴覚障害の実践的アセスメント（金澤貴之）

初めに参考資料として挙げた、中央審議会で立ち上がった特別支援教育に関する委員会（特特委員会）合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ報告の一部を紹介したい。小中学校を想定したものではあるが参考になる点も多い。例えば④（スライド 12 参照）では「専門性のある指導体制の整備」とあり、適切な専門機関との連携は障害学生支援でも重要な視点である。また同資料の「心理面・健康面の配慮」も重要で、時には聴覚障害学生同士の交流の場を情報提供することが結果的に配慮につながることもある。

また、①（スライド 9 参照）「学習内容の変更・調整」にある「外国語のヒアリング等における文字による代替問題の用意」は非常に慎重さが求められるもので、「まったく聞こえない学生にとってのヒアリングに該当する文字による代替問題とはどういったものか」を考えなければならない。このように通常学級での合理的配慮の取り組みも参考になると思う。

続いて、聴覚障害の基本を改めて資料にまとめた（スライド 2、3 参照）。基礎的な知識を知っておくことはやはり重要で、例えば聴力についても数字からある程度学生の状況を推測することができるので、知っておく必要がある。

ただ、むしろ今回私が話したいのはそれだけではない。「実践的アセスメント」としたのは、評価シートを単になぞっていくだけのアセスメントではなく、例えば私は学生の「目の動き」に注目しているが、そこから学生の背景を想定したり、理解度を図ったりするようなことも時に必要になってくる。

学生の潜在的なニーズを見逃さないためには、「本人の要望に応じる」ことの落とし穴を知っておくべきである。例えば入学したての場合、大学の授業のイメージがわからず、支援のなんたるかも知らないために「支援はいりません」と言っているのかもしれない。だ



図 3 筆者（金澤）  
（写真）



からこそ、ニーズの掘り起こしが重要であり、在学中に自分で最適な手段を要望できるような学生を育てていく必要がある。また、ニーズは個人因子と環境因子で成り立つものであり、環境因子にはどの学部で学ぶかが深く関係する。特に卒業までの間にどのような授業を学生が受けていくことになるか、卒業後の進路を見据えたうえで学部教員へのヒアリングを行うことは重要である。ただし学部教員が想定しきれない部分は、支援室側から情報提供していく必要があるだろう。

次にアセスメントの指標として、データとして事前にチェックしておくことと、面談でチェックすることに分けて、自分自身が大事にしていることをまとめたので参考にして欲しい（スライド6参照）。

最後に、支援にあたっては短期的対応と中長期的対応があり、短期的対応としては4月から用意すべき情報保障者の確保等が挙げられる。一方で中長期的対応としては、高学年を見据えた環境整備や、学生に対する障害認識・セルフアドボカシーへの支援等がある。これらの見通しを立てるためのアセスメントを行い、今現在の支援だけでなく数年後を見据えた準備をしていくことも大学の責務であろうと考える。

### 2.3 支援プラン作成の実際（池谷航介）

スライドに示した事例を考える場合の留意点としては、（スライド2、3参照）、障がいに基づく合理性に留意しつつ、これまでの経緯や教育歴、受けてきたサポートの履歴にも目を向ける必要がある。

例えばパソコンテイクで情報を正しく得るためには相当な集中力が必要であるが、そこにはこれまでにパソコンテイクをどの程度受けてきたのかが関係する。つまり、その学生に情報保障を活用するスキルに不足はないか、という視点である。また、周囲の学生との交流状況はどのような様子なのか（イン



図4 筆者（池谷）  
（写真）

フォーマルな情報の欠如はないか）もあわせて考えたいポイントである。大学生活においてはインフォーマルな情報も大きな部分を占めており、例えば授業中は聞き逃していても、授業後の友人同士の会話から「レポートの締切は来週だよね」という情報を補足することも少なくない。聴覚障がい学生はそういった情報の得にくさがあるのではないか、という点も考える必要があるかもしれない。

また、困ったときの対処について見通しがあるのか、キャンパスライフスキルの不足はないか、という点についても検討する余地があるだろう。

これは提案的な考え方であるが、障がいに基づいた「合理的配慮」とその他「必要な配慮」とを区分して考える必要があるのではないだろうか。それらが概念として区分されないと、過剰な支援を提供してしまったり、現在の配慮が適切かどうかのモニタリングが不



十分になったり、学生から申し出がないことの背景等に気づかなかつたりということが起きてしまう可能性がある。

支援のプランニングにあたり、まず「合理的配慮」とその他「必要な配慮」をコーディネーターは整理する必要がある。ただしこの二つは支援の実施上、明確に分けられるようなものではないので、実際の具体策は両方にまたがっている場合もあることを理解する必要がある。また、日々の学生の様子をモニタリングしつつ、定期的に支援内容の見直しを図ることに留意することも大切である。

とはいえ、あくまでも大学という場は自分自身で何かを獲得することが醍醐味であり、「転ばぬ先の杖」を準備しすぎて、学生が歩む大学生活を「安全マット」のようにしてはいけない。いわゆる大学の本質がサポートによって揺らいでしまったり、軽減されたりすることがあってはならない。そのために常に「必要最小限の支援」であるかを見極め、調整を図る必要がある。支援プランは、学生が自己のニーズに気づいていくためのものであり、学生自身がセルフアドボカシーを高め、自分にとっての「合理的配慮」や、その要請方法・活用方法を理解できるようにするような働きかけや後押しが、作成の過程において重要であると考えている。

### 3. グループワーク

グループは、参加者の専門的背景、学内の障害学生支援体制における立場や経験等を考慮して、1 グループ 6～7 名で編成した。各グループには、参加者とは別に、障害学生支援の経験豊かな 2 名のファシリテーターをあらかじめ配置するようにした。グループワークでの検討対象は、私立大学理工学部応用化学科に在籍する高度難聴の学生 A（架空事例）である。入学前相談をステージ 1、入学後半年間で様々な問題が顕在化してきた時期をステージ 2、支援的介入～研究室配属までの時期をステージ 3 として、各ステージにおける支援計画作成上での検討課題（スライド 4、9、12 参照）について、グループで話し合いを行ったあと、各グループの代表に発表してもらい、講師からコメントをした。

ステージ 1 の課題は、インテークの段階で、A の言動から、聞こえの実態やコミュニケーションを通して学習しようとする意欲、あいまいにしかわからないことを確認しようとする



図 5 グループワークの様子  
(写真)



図 6 グループワークの様子  
(写真)





る意欲、人との関わりを築き上げようとする意欲等を、いかに鋭く観察するか、ということにある。実際に支援を行うかどうかに関わらず、修学において将来生じる可能性のある問題を予見し、A とそのような話題に深くふみこめる関係性を築いていくことが大切である。

ステージ 2 の課題は、A の直面している様々な困難に対して、合理的配慮の範囲を適切に判断すること、また、教員と A の問題に対する捉え方のズレに対してどのように調整・介入していくかということがポイントである。

ステージ 3 の課題は、ノートテイクを配置しても A 本人が違いを実感できていないことに対する原因背景の究明とそれに対する支援の再検討、そして、A の対人形成スキルや社会スキルの成長サポートをどのように展開するか、がポイントである。

#### 4. まとめ

優れたアセスメントと支援計画の作成には、コーディネーターに下記のようなスキルが必要とされるであろう。これらは、知識の蓄積のみならず、コーディネーター自身が担当するケースに対して常に自分の各段階の判断に深い洞察を加えることの繰り返しにより、スキルをアップさせていくことができる。

- ①オーディオグラム等の医学的データから聞こえの状況を詳細に読みとる力
- ②聴覚障害学生自身の話すことだけでなく、さまざまな環境下における聞き取りやコミュニケーション理解の状況から聞こえの困難を具体的に分析し、読み取る力
- ③聴覚障害学生と修学上の問題について深く話し合える信頼関係を構築する力
- ④障害学生支援の合理的配慮提供における原則を理解する力
- ⑤困難の背景について、聞こえ以外の原因も含めて分析する力
- ⑥把握した困難について、合理的配慮提供の原則論の中で支援計画に落とし込む力
- ⑦把握した困難について、パターンの手段ではなく柔軟な発想や工夫による支援を提案する力
- ⑧目先の支援対応の要不要ではなく、聴覚障害学生の全人的成長をサポートする支援計画力



参考：当日配布（企画趣旨）

### ワークショップ「アセスメントに基づいた 合理的配慮と支援プランの作成」

司会・企画コーディネーター：中野聡子（大阪大学）

講師：諏訪絵里子（大阪大学）

池谷航介（岡山大学）

金澤貴之（群馬大学）

グループファシリテーター：

望月直人（大阪大学）・藤原隆宏（関西大学）

生野 茜（関西学院大学）・脇坂紗帆（京都産業大学）

中津真美（東京大学）・藤野友紀（札幌学院大学）

船越高樹（京都大学）・前原明日香（宮城教育大学）

- 到達目標 ① 修学場面における聴覚的機能制限の状況を実際的に把握し、合理的配慮として適切な支援方法を柔軟かつ多面的に考えることができる。
- ② 聴覚障害学生が直面している困難について、聴覚的機能制限以外の個人因子や環境因子を考慮しながらアセスメントを行い、公平性・妥当性・教育の本質を保持しつつ支援を計画することができる。
- ③ 聴覚障害学生の心理的・社会的成長をふまえたアセスメント及び支援を計画することができる。

#### 企画趣旨

聴覚障害があれば一般の聞こえる学生と同じやり方では困難、というのは誰にとっても認識しやすい事実です。しかし、個々の聴覚障害学生にとって聞こえの状況は聴力のみならず相手や環境によって大きく左右されます。学業成績には情報保障だけでなく、本人の学力が影響します。また、アクティブラーニングでは、コミュニケーション成立の人的・動的要因が大きく影響するため、情報保障を配置するだけでは解決しません。一般の聞こえる学生との公平性、支援の妥当性、教育の本質を保持しつつ配慮や支援を行っていくためには、聴覚障害学生が直面している困難について、聴覚的機能制限とそれ以外の個人因子、そして環境因子を適切に見積もるアセスメント力とそれらの結果を適切かつ有効な支援計画に落とし込む力が問われます。

本企画では、第1部でアセスメントと支援計画作成の基礎について3人の講師から話題提供を行います。第2部では架空事例をもとにアセスメント及び支援計画を検討するグループワークを行います。





(第 1 部:13:00～13:55)

- ① 支援計画作成におけるアセスメントの役割 【諏訪絵里子】  
大阪大学の合理的配慮提供までのプロセスを紹介しながら、アセスメントの役割について解説します。
- ② 聴覚障害の実践的アセスメント 【金澤貴之】  
修学面における聴覚障害のアセスメントのポイントについて紹介します。
- ③ 支援プラン作成の実際 【池谷航介】  
アセスメント結果をもとに実際の支援プランとして落とし込んでいく際の留意事項等について事例を挙げながら紹介します。

(第 2 部:14:05～16:00)

- ◆ 1 グループ 8～9 名ずつ, 5 つのグループに分かれてグループワークを行います。グループはあらかじめ決められておりますので, 指定されたグループの場所に着席ください。
- ◆ 各グループに2名のファシリテーターが配置されております。検討課題についてファシリテーターを中心に議論を行ってください。
- ◆ 架空事例は 1 人の聴覚障害学生について述べられています。入学前相談から始まって時間経過に伴い 3 つのステージに分かれており, それぞれのステージについて検討課題が提示されます。グループで話し合った後, 適宜発表していただきます。

## 参考：当日配布（スライド等）

第15回日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)シンポジウム  
2019.11.23 大阪大学コンベンションセンター

### ワークショップ アセスメントに基づいた合理的配慮と支援プランの作成 企画趣旨説明

大阪大学キャンパスライフ健康支援センター  
中野 聡子



1

### 〇〇障害？

- 履修登録ができていない
- レポートなどの提出期限が守れない、補講日や試験日に欠席する
- 単位を落とす
- 「要領よく」こなすやり方を知らない
- 友人がいない
- 授業中は熱心に教員に質問するが、学生同士ではほとんど話さない
- グループワークなどで共同作業や話し合いに関わりたがらない
- 相手が言ったことを字義通りに受け止めてしまう
- 融通がきかない
- 他人の言うことに耳を貸さない
- 自分のことばかり話す
- 空気を読まない発言や行動をする
- 見通しを立てず思いつきで行動をする
- 他人との「距離」のとり方に違和感がある
- 研究室で対人関係トラブルを起こす
- 年齢相応の成熟性が感じられない
- 長期欠席が続く

2

### 聴覚障害からくる困難

聴覚障害のきこえ

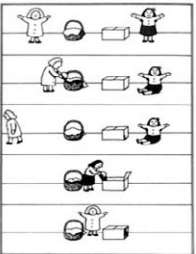
話者の声質や話し方、人数、授業形式、教室環境、内容、文字資料の提供などによって、きこえの状況が大きく異なる

聴覚障害＝コミュニケーション障害

（先天性の場合）

- ◆ 言語発達（理解・表現・思考）
- ◆ 認知発達
- ◆ 社会性の発達

に影響



誤信念課題の例  
(Frith, 2001より引用)  
聴覚障害児もASD児と似た発達遅延傾向を示す

3

### 困難の背景にある3つの要因

【聴覚的機能制限による困難】  
＝合理的配慮の直接的対象  
◆話者の声質や話し方、人数、授業形式、教室環境、内容、文字資料の提供などによって、きこえの状況は大きく異なる

【聴覚的機能制限以外の個人因子】

- ◆ 既知知識
- ◆ 学力
- ◆ 聴覚障害学生本人の概念駆動型処理能力
- ◆ 学習意欲、コミュニケーション意欲
- ◆ 対人コミュニケーションスキル
- ◆ 自己肯定感

【人的環境因子】

- ◆ 周囲の教員・学生の聴覚障害に対する理解・配慮

＝知識的なものというよりも、実際の場面で有効な配慮として行えるかどうかが大きく、現実的には行えていないことが多い

3つの要因が複雑に絡み合っていることが多い

4

### ワークショップのポイント

- 困難が生じている状態に対し、聴覚障害学生本人にもどの要因・要素が影響しているのか認識できていることは少ない
- 3つの要因はクリアに切り分けて数値化できるものではないが、どんな要素がどの程度影響しているのか見積もる必要がある
- 影響を及ぼしている要因・要素について、妥当性・公平性・教育の本質が保持できる範囲内で支援を計画する必要がある
- どんな支援を行ってもバリアは完全にはなくなる。聴覚障害学生が大学での学びや学生生活に自己肯定感を持ち、心の健康を維持できる落とし所を自分で作っていけるようなサポートが必要である

5

### ワークショップの到達目標

- ① 修学場面における聴覚的機能制限の状況を实际的に把握し、合理的配慮として適切な支援方法を柔軟かつ多面的に考えることができる。
- ② 聴覚障害学生が直面している困難について、聴覚的機能制限以外の個人因子や環境因子を考慮しながらアセスメントを行い、公平性・妥当性・教育の本質を保持しつつ支援を計画することができる。
- ③ 聴覚障害学生の心理的・社会的成長をふまえたアセスメント及び支援を計画することができる。

6



### 話題提供(第一部)【13:00～13:55】

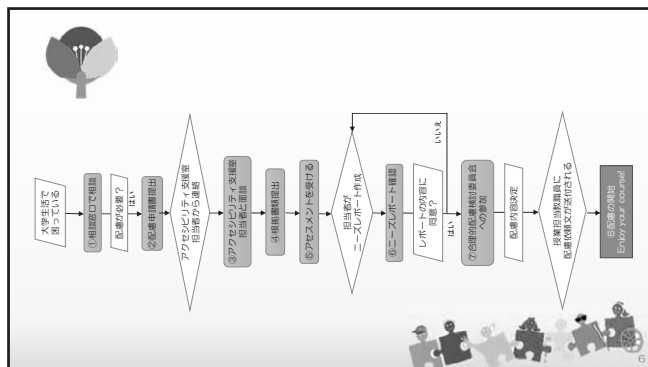
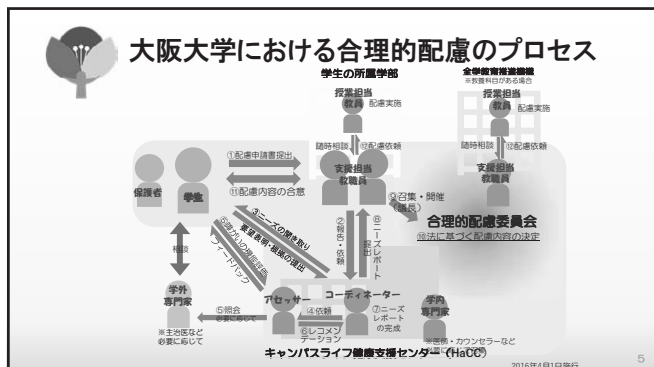
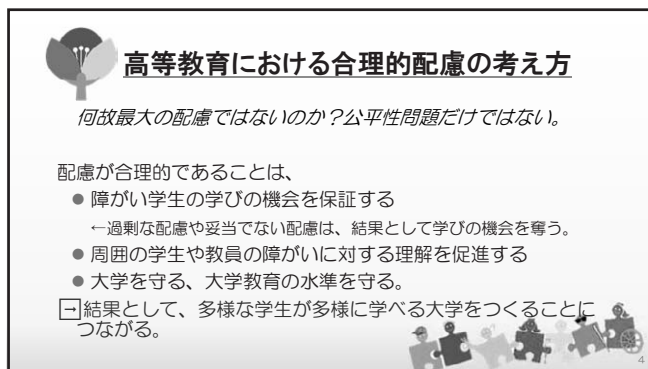
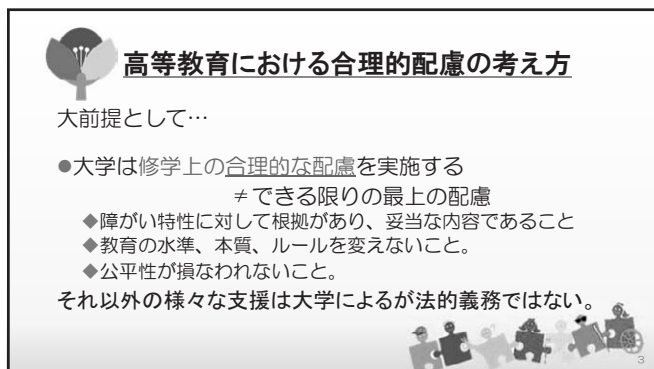
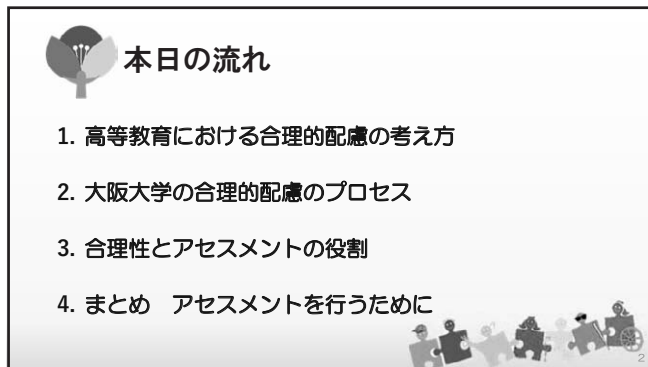
1	支援計画作成におけるアセスメントの役割	諏訪絵里子
2	聴覚障害の実践的アセスメント	金澤貴之
3	支援プラン作成の実際	池谷航介

7

### グループワーク(第二部)【14:05～16:00】

- 1グループ8～9名ずつ、5つのグループに分かれてグループワークを行います。グループはあらかじめ決められておりますので、指定されたグループの場所に着席ください。
- 各グループに2名のファシリテーターが配置されております。検討課題についてファシリテーターを中心に議論を行ってください。
- 架空事例は1人の聴覚障害学生について述べられています。入学前相談から始まって時間経過に伴い3つのステージに分かれており、それぞれのステージについて検討課題が提示されます。グループで話し合った後、適宜発表していただきます。

8



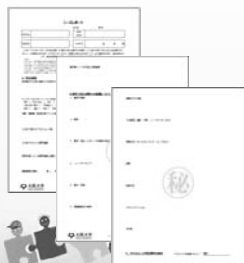


## 大阪大学における合理的配慮のプロセス

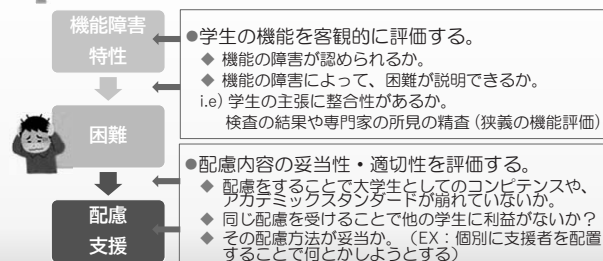
支援室はニーズレポート(指導計画にあたるもの)の作成をする

1. コーディネーターがニーズの聞き取りを行い、希望する配慮を明確化。
2. アセッサーが機能障害の評価を行い、配慮の妥当性を検討。
3. 支援室としての意見・所見をニーズレポートとして発出。

→実際に支援を実施する部局の議論のたたき台に。

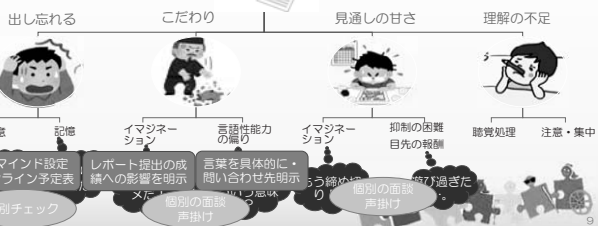


## 合理性とアセスメントの役割



## 合理性とアセスメントの役割

課題を出さない



## 合理性とアセスメントの役割

【例】授業中の配慮は必要ないが、語学リスニング試験は免除してほしい。

- 機能障害によって困難を説明しきれていない。
- 主張の一貫性に問題がある。
- リスニング試験の持つ意義を考えられていない。
- これまでの経験不足からの困難を、障がいによる困難と混同している可能性がある。



## アセスメントを行うために

### 大学の義務

- 大学の基準や責任の範囲を明確にする。  
ディプロマポリシーやアカデミックスタンダード、大学としての支援の方針やシステムを見直し、明確にする。
- それを事前に学生に周知する。
- 支援と教育的配慮、合理的配慮を提供。但し、義務は**配慮のみ**。

### 学生の義務

- 障害に対して適切な配慮を受けながら、大学のアカデミックスタンダードを満たす。
- 安全に学生生活を送る。





PEPNet-JAPANシンポジウム前日企画  
ワークショップ  
聴覚障害の実践的アセスメント

群馬大学教育学部  
金澤貴之

1

## 聴覚障害とはどういう状態か

- ① 伝音性難聴（外耳又は中耳の障害）、② 感音性難聴（内耳、聴神経の障害）、③ 混合性難聴
- 感音系に障害がある場合、補聴器をつけていても音に歪みが生じる。
  - 言語の聞き分けが困難
- 曖昧な音声情報をもとに、類推しながら聞き分けを行うことになる。
- 一対一でのやりとりなら、逐一確認しながら意思疎通を図ることができても、集団のやりとりに参入することが困難。自分に向けて話された話以外は、聞き取れていない。
  - 「裏情報」（周囲の話）にアクセスできない

2

## 聴覚障害がもたらす困難さ

- 聞こえないために授業がわからない  
しかし、それだけではない。
- 言語獲得の困難…発音も書き言葉も不得手
- 情報は耳から伝わる…社会常識に通じることの困難、「空気を読む」ことの難しさ
- 集団の中からの孤立…メンタルヘルスの問題にも
- 手話言語、ろう文化という異なる文化背景  
…日本語、日本文化特有の言い回しにズレが生じる  
困難さの多層性のどこに躓いているかを把握する必要

3

## 聴覚障害学生にとっての大学

- 通常学校卒の学生にとっては、他の聾・難聴学生との出会いの場、聾コミュニティとの接点
- 聾学校卒の大学生にとっては初のインクルーシブ教育
- これまでの対処方法が役立たないマスプロ授業
  - 情報保障の必要性への気づき（←ニーズが潜在）
- 全てが見てわかる授業との出会い、衝撃
  - 「わかる」ことがわかる。
  - 「わからない」ことがわかる。
- （難聴者特有の）「目が泳ぐ」会話からの脱却へ
  - 目を合わせて「キチンと話をすること」を知る
- これまで積み上げたアイデンティティとの葛藤も

4

## 潜在的ニーズを見逃さないために

- ① 「本人の要望に応じる」ことの落とし穴
  - ・ 入学したての障害学生は、大学の授業のイメージもわからないし、支援のなんたるかも知らない
  - …「自分には必要ありません」と言い切ってしまう学生も
    - 自分で最適な手段を要望できるよう育てていく
- ・ ニーズは個人因子と環境因子で成り立つ。
  - …同じ障害の程度でも、学部、専攻によっても異なってくる

環境因子は、周囲のサポート如何で変えられる！

5

## アセスメントの指標

- データとして事前を知っておきたいこと
  - ☐ 左右それぞれの聴力（オージオグラムをもとに）
  - ☐ 失聴時期
  - ☐ 補聴器等使用開始時期、（必要に応じて）機器の機能
  - ☐ 教育歴：聴覚障害の専門教育支援の開始時期。通常学校か聾学校か。聾学校経験があればいつ頃か。その聾学校のコミュニケーション環境は？
- 面談の際のチェック
  - ☐ 目を見て話せるか
  - ☐ 手話の使用状況
  - ☐ どの程度の音声を聞き分けられているか
  - ☐ 自分に向けて話されている話以外の話に関心を向けているか、反応しているか

6



## 短期的対応と中長期的対応

- ⑤ 4月から用意すべきこと
  - 情報保障者の確保（どんな？どの程度？）
  - 教室環境等の整備、確保
  - その他、諸々の配慮事項
- ⑥ 中長期的対応として
  - 高学年に向けた手話通訳者等の確保（地域の派遣、養成関係者への挨拶回りなども）
  - 聴覚障害学生の障害認識、セルフアドボカシーへの支援
  - その他、数年後に向けて今から準備すること

これらの見通しをたてるためのアセスメントを

7

## 参考

特特委員会合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ報告より  
通常学校における合理的配慮の例

8

## 通常学校における合理的配慮の例①

（特特委員会合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ報告より）

- ⑤ 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮：聞こえにくさを補うことができるようにするための指導を行う。（補聴器等の効果的な活用、相手や状況に応じた適切なコミュニケーション手段（身振り、簡単な手話等）の活用に関すること 等）
- ⑥ 学習内容の変更・調整：音声による情報が受容しにくいことを考慮した学習内容の変更・調整を行う。（外国語のヒアリング等における音質・音量調整、学習室の変更、文字による代替問題の用意、球技等運動競技における音による合図を視覚的に表示 等）

9

## 通常学校における合理的配慮の例②

（特特委員会合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ報告より）

- ⑤ 情報・コミュニケーション及び教材の配慮：聞こえにくさに応じた視覚的な情報の提供を行う。（分かりやすい板書、教科書の音読箇所的位置の明示、要点を視覚的な情報で提示、身振り、簡単な手話等の使用 等）また、聞こえにくさに応じた聴覚的な情報・環境の提供を図る。（座席の位置、話者の音量調整、机・椅子の脚のノイズ軽減対策（使用済みテニスボールの利用等）、防音環境のある指導室、必要に応じてFM式補聴器等の使用 等）

10

## 通常学校における合理的配慮の例③

（特特委員会合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ報告より）

- ⑤ 学習機会や体験の確保：言語経験が少ないことによる、体験と言葉の結び付きの弱さを補うための指導を行う。（話し合いの内容を確認するため書いて提示し読ませる、慣用句等言葉の表記と意味が異なる言葉の指導等）また、日常生活で必要とされる様々なルールや常識等の理解、あるいはそれに基づいた行動が困難な場合があるので、実際の場面を想定し、行動の在り方を考えさせる。

11

## 通常学校における合理的配慮の例④

（特特委員会合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ報告より）

- ⑤ 心理面・健康面の配慮：情報が入らないことによる孤立感を感じさせないような学級の雰囲気作りを図る。また、通常の学級での指導に加え、聴覚に障害がある児童生徒等が集まる交流の機会の情報提供を行う。
- ⑥ 専門性のある指導体制の整備：特別支援学校（聴覚障害）のセンター的機能及び難聴特別支援学級、通級による指導等の専門性を積極的に活用する。また、耳鼻科、補聴器店、難聴児親の会、聴覚障害者協会等との連携による、理解啓発のための学習会や、児童生徒のための交流会の活用を図る。

12

ワークショップ  
アセスメントに基づいた合理的配慮と支援プランの作成

## 「支援プラン作成の実際」

岡山大学 高大接続・学生支援センター  
池谷 航介

1

## 事例（学部1年生）

入学時に保護者と来談し、情報保障の申し出があった。授業には全てPCノートテイクによる文字通訳が可能である点を説明すると、「それがあれば大丈夫です」ということであった。

全ての授業にPCノートテイクが入り、欠席もなく授業に参加している。授業担当教員から、参加態度は良好ということが確認できた。

しかし、連休明けになって本人から、「必要な小レポートを提出できなかったの、授業を一つやめることにします」という連絡があった。

2

## 事例（学部1年生）

本人に確認すると、  
「自分がレポートの提出日に気が付かず、メ切がとっくに過ぎてしまった」ということであった。  
（残っていたテイクのログを見ると、小レポート課題の内容とあわせて提出日も表示されていたことが分かった）

合理的配慮はあるのだから、  
「次からちゃんと見とかなきゃダメだよ」  
ということではいかどうか

3

## この学生のアセスメントで必要なこと



大学から授業にテイクが付くことになったが、  
「読めて」いるのか。  
（情報保障を活用するスキルの不足はないか）

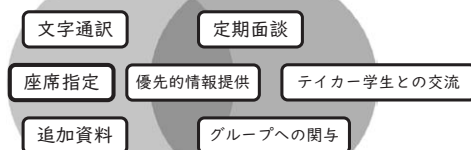
周囲の学生との交流状況はどのような様子なのか。  
（インフォーマルな情報の欠如はないか）

困ったときの対処について見通しがあるのか。  
（キャンパスライフスキルの不足はないか）

4

## 「合理的配慮」とその他「必要な配慮」

障がいに基づいた「合理的配慮」      その他「必要な配慮」



5

## 区分されないことによる問題

(あ) 「できないのなら」免除・TAがべったり  
>>>過剰な支援になっていないか？

(い) 文字通訳ついているんだからわかるはず・できているはず  
>>>モニタリングができているか？

(う) 申し出がないんだから大丈夫  
>>>申し出をしない背景に留意できているか？

6





### 支援をプランニングする上でのポイント

- (1) 「合理的配慮」とその他「必要な配慮」があることをコーディネーターが概念上区分する。
- (2) ただしこの二つは支援の実施上、明確に分けられるようなものではないので、実際の具体策は両方にまたがっている場合もある。
- (3) それゆえに、日々の学生の様子をモニタリングしつつ、見直しを図ることに留意する。

>>> 当該学生のセルフアドボカシーを高める

7

ただし、「転ばぬ先の杖」が増えすぎて、「安全マット」にならないように

困難があっても自分自身で克己することが大学の醍醐味

常に必要最小限の支援であるか

(本人が周囲の学生と同等にチャレンジできる状態であるか)  
を見極め、調整を図る必要がある。

8

### 学生が自己のニーズに 気づいていくための支援プラン

学生自身が  
自分にとっての「合理的配慮」が何かということや  
その要請方法・活用方法を理解できるようにする

「働きかけ」や「後押し」

9

1

### グループワーク

### 架空事例をもとにしたアセスメント及び支援計画の検討

2

### 聴覚障害学生Aのプロフィール

偏差値50.0～55.0の私立Z大学理工学部応用化学学科に在籍。

1歳6ヶ月児健診で聴覚異常の可能性を指摘され、大学病院の耳鼻咽喉科で精密検査の結果、両耳に75dBの感音性難聴があることがわかった。聴覚特別支援学校早期教育相談を紹介され、補聴器のフィッティング、母子コミュニケーション指導を受ける。両耳にデジタル補聴器を装用。その後、聴覚特別支援学校幼稚部を経て・小学校からは通常学校。Z大学には一般入試で入学した。片言の手話は使えるが、ふだんは家庭でも学校でも聴覚口話法でコミュニケーションをとっている。





3

## ステージ1

X年3月、理工学部および共通教育の支援に関わる教職員、障害学生支援室のコーディネーター（以下、Co）、本人と母親で入学前相談を行った。母親が言うことはよくわかっているようだったが、女性Coの音声は少し聞き取りづらそうであった。また、理工学部のカリキュラム説明のようなこみいった話は、はい…はい…わかりました、とうなずいてはいるものの、しばしば目が泳いでいた。母親が熱心にメモをとり、本人は何もしないで聞いているだけであった。

Coから、高校と大学の学習内容や進め方の違いなどについて説明するが、これまでずっと独学でやってきてテストもちゃんといい点がとれていたし問題ないので、支援は全くいらないとのこと。

教職員の中には、本人がそのように言うのであれば全く心配ないと考える人もおり、逆にAとのやりとりの様子から本当に大丈夫なのかと心配する人もいた。Coは、ひとまず前期の授業を受けてみてからその後の支援について改めて検討すること、2週間に1度定期面談を受けることに同意してもらったうえで、Aの意思を尊重し、支援なしで新学期がスタートした。

4

## ステージ1における検討課題 アセスメントに向けて

- ▶ プロフィールおよび入学前相談のときのAの発言や行動から、入学後、修学面と学生生活の上で、どのような困難が予想されるでしょうか。
- ▶ Aについて支援計画作成に必要なアセスメントを行うために、入学後、(1)どのような観点に注目し、(2)誰に、どのようにして、どのような「情報」を得る必要があるでしょうか。



5

### ステージ2(1/4)

ステージ1で話し合ったアセスメントの観点にたって  
ステージ2のエピソードを読み解きましょう。

Aは、支援室からメールを送っても返事がない、定期面談を無断キャンセルするなど、非常に連絡がとりにくいことが多かった。

X年5月、母親から支援室に連絡があり、「Aが語学のリスニングが全くわからないと言っている。そもそも高校までリスニングはずっと免除してもらっていた。なぜ大学では免除にならないのか。おかしい」と言われる。

X年6月初め、クラス担任の教員が、Aが提出したレポートの例(別紙参照)を持参して支援室を来訪した。Aの学力が他学生に比べて著しく低いように思う。授業が聞き取れていないせいなのか、本人の能力の問題なのかわからなくて困っているとのこと。

6

### ステージ2(2/4)

X年7月、共通教育の基礎化学実験の教員から支援室に相談があった。Aは「大丈夫です」「わかります」と言っているが、ちょっとしたやりとりでも、通じているときと通じていないときがあるように思う。化学実験は危険性の高いもので、安全に配慮して作業するなど重要な説明や指示が聞き取れていないことで、いつ事故を起こすのではないかとヒヤヒヤしている。同じグループの学生とも全くコミュニケーションがとれていないようだとのこと。





7

## ステージ2(3/4)

Aは、定期面談の中では、「大丈夫です」と言いつつも、わからないことがあったり、グループワークで疎外感を味わったりすることがあるという気持ちを吐露することもあった。しかし、Aはすべて諦めの境地で「そういうものだと思います」「どうしようもない仕方ない」というように、自分の気持ちの折り合いをつけていた。

友人はあまりいないという。サークルは、テニス部と漫画部に入ったが、テニス部は「おもしろくない」ので1ヶ月くらいでやめてしまった。漫画を書くことが好きなので漫画部は続けている。ネット上に自分の作品をあげて批評しあう形で、オフラインで集まったりしないので、コミュニケーションで苦労しないとのこと。

8

## ステージ2(4/4)

X年8月、前期の成績が出た。定期面談の中で、Aに成績がどうだったか聞いてみたところ、ほぼすべて出席していたにもかかわらず必修科目で2つほど単位を落としてしまったとのことであった。

そのため、Aは、積極的にというところまではいかなかったが、支援を受けることに同意し、Coは、授業担当教員向けの配慮依頼文書案を作成することになった。

9

### ステージ2における検討課題 支援計画を作成する

- ▶ 授業担当教員に送付するAの配慮依頼文書の「1.障がいについて」「2.授業時の配慮事項」「3.その他(必要であれば)」を完成させてください。
- ▶ 上記の配慮依頼文書に記したこと以外に、(1)Aにとって必要だと考えられる支援・教員への情報提供・環境調整、(2)(1)であげた内容を、公平性や妥当性の均衡を維持しつつ実施するための具体的なやり方、について考えてください。

10

### ステージ3(1/2)

X年10月より、補聴援助機器の使用をメインに、一部はノートテイクを配置し始めた。しかし、X年3月に出た後期の成績では選択科目ではあるが1科目単位を落としていた。このため、X+1年4月より、受講する授業のすべてにノートテイクをつけることになった。A本人としては、ノートテイクがつけばいろいろと連絡など面倒も増えることもあって積極的というわけではなかったが、単位を落としていることを心配した母親からうるさく言われて、しぶしぶ受け入れたという側面もある。しかし、ノートテイクがある/ないによって、自分に伝わる授業の情報がどれくらい違うかとか、ノートテイクをつける意味についてはあまりよくわからないと言う。ただ、単位はなんとか履修した科目のすべてでとれるようになった。





11

## ステージ3(1/2)

X+2年2月, Aが配属された研究室の指導教員より支援室に相談があった。Aは、研究室のゼミにノートテイクをつけて参加しているが、じっとだまっていたり何を考えているのかよくわからないと思ったら、急に場の雰囲気や他の人の話、そのときのトピックスに関係なく、1人よがりでの的外れなことを発言したりするという。

また、研究室全体の研究計画や役割分担に関係なく、大学院生の指示も無視して自分で勝手に実験室の器具や試薬を使ってめちゃくちゃな実験を行ったりと、研究室のトラブルメーカーになっている。

A自身、研究室の仲間とうまくやっていきたいと思っているのに、どうしてこのようになってしまうのかわからないといって悩んでいるようだ。

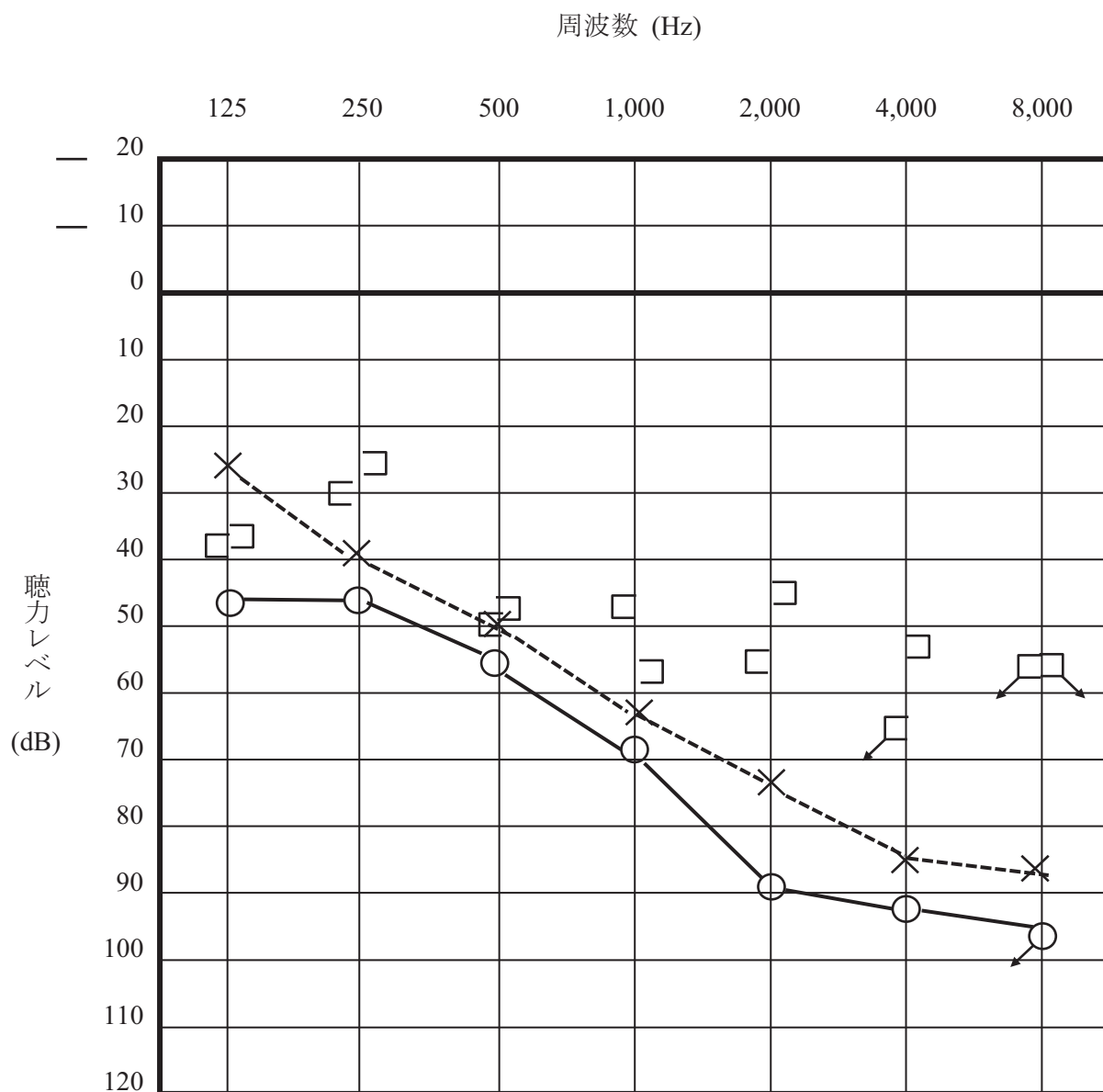
ゼミでのAの発表はかなりレベルが低く、応用化学の基礎的なことも身につけていないおらず、このままでは卒業論文を書き上げるのも難しいと思われる。ただAの自己評価は他の学生に比べて平均的という認識で、危機感が感じられないという。

12

## ステージ3における検討課題

- ▶ 研究室のトラブルについて、(1)聴覚障害という機能制限に由来する原因、(2)A自身の学力や社会性の獲得に由来する原因の2つの観点から、支援計画の見直しを行ってください。
- ▶ Aに対する心理支援の観点から支援計画の見直しを行ってください。

# Aのオーディオグラム（X年3月）





## フレッシュマンセミナーについて

理工学部応用化学科 1 年 A

先日のフレッシュマンセミナーではディベートを行い、テーマは「小学生に宿題は必要か否か」をグループ内で話し合いをした。このディベートの目的は、一年生同士の協力でお互いを理解しあい、友好的になることである。

はじめに、「必要」と主張するグループと「必要ない」と主張するグループで分けられたことだった。自分の希望は関係なかった。私は「必要ない」になった。

グループでお互いの意識を出し合い、協力しながら考えをまとめた。また、相手の意見を予想し、それに対する逆説に準備をした。途中感情が難しく、うまくまとまらなかったところもあった。最後に、主張を述べる発表者を決めた。発表者は△さんになるのだった。

まず相手グループの主張から聞いたが、力強い発表で共感を得られた。しかし負けられないため、続いて△さんが私たちのグループの意見を延べた。お互いのグループの主張に対して質問や反対尋問をし、最後はお互いに握手をして健闘をたたえたのであった。

感想として、他のみんなは多量の意見を出していたが、私は意見を述べるのが難しかった。他の人が思うのが嫌だからである。しかし、大学生としては自分の意見を表現することも重要だと認識しており、今後の学生生活の中には積極的な行動をしたいと考えたのであった。



令和〇年〇月〇日

授業担当教員 各位

〇〇学部長

〇〇 〇〇

障がい学生支援室長

〇〇 〇〇

## 障がいのある学生の授業履修に伴う配慮のお願い

理工学部応用化学科 1 年に在籍の A さんに対して、下記の通り「修学上の配慮」を行うことに決定いたしました。

学生が障がいによる不利益を被らないよう、ご担当科目において、以下の配慮を実施いただきますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

なお、ご不明な点がございましたら、末尾の問い合わせ先までご連絡をいただきますよう併せてお願い申し上げます。

### 記

#### 1. 障がいについて：

症状：1歳8ヶ月のときに、両側性感音性難聴（右75dB・左75dB）の診断を受ける。

デジタル補聴器を両耳に装用。

（障害の状況について、特にコミュニケーション面を中心に記載のこと）

#### 2. 授業時の配慮事項

- （情報保障の方法と実施にあたっての留意事項・協力依頼事項）
- （語学授業におけるリスニングとその試験について）
- （グループワークについて）
- （実験について）
- （視聴覚資料の使用について）
- （スライドや参考資料の配布について）
- （重要事項の伝達について）
- （教室内環境について）





### 3. その他

- 
- 
- 

- ・ 上記以外に追加の配慮をお願いする場合が生じるかもしれませんが、その際は別途ご相談させていただきます。

なお、上記の配慮内容は令和〇年〇月末まで有効です。

※ 本学は、平成 28 年 4 月 1 日に施行された「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」に基づき、障がい学生支援を実施しています。従って、各担当教員には、令和〇年〇月〇日の障害学生修学支援委員会にて承認された上記の合理的配慮を提供することが求められています。

以上

#### 【問い合わせ先】

- ・〇〇学部 障がい学生相談窓口（担当： ）  
電話:XXXXXX 電子メール: :XXXXXXXXXXXXXXXXXX
- ・ 障がい学生支援室窓口（担当： ）  
電話:XXXXXX 電子メール:XXXXXXXXXXXXXXXXXX

## 「支援技術のさらに効果的な利用に向けて —活用事例紹介・利用体験を通して— ワークショップ報告

楠敬太<sup>1)</sup>，仲兼久知枝<sup>2)</sup>，三好茂樹<sup>3)</sup>，太田琢磨<sup>4)</sup>，岡田孝和<sup>5)</sup>

大阪大学 キャンパスライフ健康支援センター<sup>1)</sup>

京都産業大学 障害学生教育支援センター<sup>2)</sup>

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター<sup>3)</sup>

愛媛大学 教育学生支援部 学生生活支援課 バリアフリー推進室<sup>4)</sup>

明治学院大学 学生サポートセンター<sup>5)</sup>

**要旨：**聴覚障害学生支援で活用される様々な支援技術は、新たな技術導入も行われるなど変化しつつある。本企画では、こうした技術を導入している大学からの活用事例と、活用の基盤となる考え方について話を伺った。いずれの事例からも、学内体制の基盤を有した上で「これまでのノートテイク等の支援ではできなかった新たな事例に対応できる技術」として音声認識等を活用することが求められること、学生のニーズを引き出しつつ対応していくことが欠かせない点が確認された。

**キーワード：**情報保障支援技術，音声認識，遠隔情報保障，補聴援助技術

### 1. はじめに

聴覚障害学生の多様な学びの広がりにより、各大学ではノートテイクやパソコンノートテイクだけでは支援提供が難しい場面に対応できるよう、新たな支援技術の活用に期待が寄せられている。その中でも、遠隔情報保障技術や音声認識技術の活用、映像教材への字幕挿入については、様々なシステムが開発・公開されていることから、こうした技術の導入により課題解決が進められることが期待されている。しかしながら、これらの支援技術導入を試みたものの、円滑な利用が出来なかったという声や、場面に応じた有効活用方法が見出せずに利用を断念したという声も聞かれる。

そこで、聴覚障害学生支援の場面で情報保障支援技術を円滑に活用するためのノウハウ共有を目的として本企画を実施した。運用時に必要となるポイントの確認、および事務局に多く寄せられている活用を断念した事例の解説を通して、どのような工夫をすることでより良い活用方法となるのかを検討した。さらに実際の機器操作体験を通して、支援技術を活用する際に求められるポイントや、様々な場面で有効に活用するための方法や必要な事前準備・環境整備について、改めて確認できる機会となった。





## 2. 内容

本企画は以下の司会・講師により進められた。

司会：楠敬太氏（大阪大学 キャンパスライフ健康支援センター）

仲兼久知枝氏（京都産業大学 障害学生教育支援センター）

講師：岡田孝和氏（明治学院大学 学生サポートセンター）

太田琢磨氏（愛媛大学 バリアフリー推進室）

三好茂樹氏（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

今回取り上げた支援技術について、各講師から活用事例を報告してもらいながら進行された。

### 2.1 遠隔情報保障支援技術の活用例

#### 2.1.1 システムの紹介

現在活用されているシステムのうち、三好氏により開発された遠隔情報保障システム「T-TAC Caption」について説明がなされた。

三好／T-TAC Caption システムの概要としては、教室の先生の音声をタブレットで拾い、異なる場所にいる 2 人の入力者に対してインターネット上で映像・音声を送信する。



図 1 企画の様子（写真）

入力者はインターネット上で連係して 1 つの文章を作成し、タブレットに文字が表示されるという仕組み。これは同様の遠隔情報保障システムでも基本的に変わらない仕組みとなっている。

T-TAC Caption システムは現在、一般高校の 6 校が年間 2,100 時間ほど使用している。一般の大学では約 10 校で年間 1,300 時間使用されている。全ての情報保障が必要な場面に對して、「遠隔」という方法で支援している訳ではない。現地で見聞きして取得できる情報はとても大きいので、できる部分は現地でやる。現地で入力できないような場合、例えば大学の中の異なるキャンパス間での支援者共有を目的とするなど、特別な例だけ遠隔というシステムが使われている。高校での支援では、支援者は地域の要約筆記団体やボランティア等の有償・無償の入力者で成り立たせている例が多い。

#### 2.1.2 明治学院大学 海外研修での運用事例紹介

岡田／本学で情報保障を使う時の考え方と、北欧に学生が行った際に T-TAC Caption を使用してサポートした時の様子を報告したい。

まず本学における基本的な考え方について。遠隔情報保障支援をすること自体は簡単。Skype でも携帯でも今あるものを組み合わせれば何らかのシステムは組める。でもキチン

と支援として成立させるためには、聴覚障害学生だけでなく教員や支援者も含めて入念な準備が必要になる。

本学では学生が北欧に 1 週間研修に行った際に利用した。時差が 7 時間なので、現地の午前中が日本時間では夕方や夜早めの時間なので、何とか大学に集まってサポートできるが、現地の午後の時間になると日本時間では真夜中になってしまうことがネックだった。そのため、支援者それぞれが自宅など離れた場所にいてもできる手段として T-TAC Caption を使用した。

本番までの流れについて。本番は 2 月だが、春学期の間にどのようなシステムを使うのかを先生に説明し、デモンストレーションをして実際に見て頂いた。実際に懸念を示されたことはないが、デモをすることで、情報が外に漏れるのではなどの心配に対する説明の機会となると思う。その後、旅行会社とも話をし、こういうシステムを使用する、現地コーディネーターや通訳者とも共有して頂きたいと、細かいことは具体的になっていない段階から情報の共有を図った。



図 2 筆者（岡田）  
（写真）

秋学期に入ったら、学生とも本格的に打合せをして、このシステムを使うにあたって自分自身が準備しなければならないことを整理して、それにどう対応するのかを話し合った。具体的には学生が現地で自分の携帯を表示機として使うのか、その場合キャリアの料金プランはどうなっているのか、モバイルルーターを持って行くとか通信方法はどのようなのかなどを、自分の責任で調べさせている。その過程の中で、学生にも自分の責任の一環で支援システムを使うという考え方が少しずつ生

まれてくるのではないかなと思う。同時に、うまくいかない時の対応についても、学生・先生と相談を重ねていく。これまで北欧研修の支援を 3 回程実施したが、いずれもトラブルが起きた場合には現地でクラスメイトに手書きでサポートしてもらうことになった。当然、そのためにはスキルの伝授が必要なので、授業内で各回 20 分ほど数回、ミニテイク講座をやったりしている。聴覚障害学生もその際に自分でできるところは説明したり、手伝ったりしながら、クラスの中での雰囲気作りも行った。この頃になると実際に行く施設や街も決まってくるので、現地のネットワーク環境も確認した。携帯が通じないということはないが、見学ルートに地下があるか、圏外の場所があるかなどを、可能な限り確認を行った。

このような準備を重ね、本格的に一気に動き出すのは 1 ヶ月くらい前になる。秋のうちにこんなことをやるよと予告していたが、現地スケジュールの確定と並行して改めて支援学生を募集し、システムの説明会を実施した。そこからリハーサルとテストを繰り返していく。普通の教室の中でやってみたり、大学近くの道路脇でやってみたり、学生が遊びに行ったテーマパークでもリハーサルを行った。これらを通して、例えば、普段使っている IPtalk と T-TAC Caption の違いを認識してもらい、いつもと違うところや、どんな工夫や対応をしなくてはいけないのかを考えてもらう。聴覚障害学生には、特にマイクの特徴を





把握してもらおう。現地に行った時に、話者のどのくらい近くにいればいいのか、携帯での集音では難しい時に外付けのマイクを使うか使わないか、どうやって使うかなどを試行させた。そこでの気付きを Excel で作成した「振り返りシート」に学生それぞれが書き込む。すべてのリハーサルに参加することは難しいので、このシートを見ることでシステムの特長や状況に応じた動きが分かり、イメージの共有が進む。こうして積み重なった経験から抽出してその年のルールを作っている。システムが繋がっていることの確認の手順はどうするか、音が聞こえないに日本から現地にどうやって伝えるか？などをルール化していく。

これらの準備を重ねてようやく本番を迎える。ここまでの事前の準備がしっかりできていれば、本番は成功できると思う。ほぼ成功したようなもの。現地のネットワーク環境がだめになるとかはもう運任せになる。現地での 1 週間で特に大事なのが、支援が始まってからのこまめな連絡と現地からの情報共有。突然現地で新たな予定が入ることもあれば、次の施設に行く時間が遅れそう、予定よりも時間が伸びそうなど、細かな連絡も重要になる。ただこれも学生が LINE グループを使って自発的にコミュニケーションを取りあっているんで、ほぼ問題ない。本当に細かいところまで連絡を取り合ったり、お互いに状況を伝えているのを見ているので安心して任せている。場合によっては、私共コーディネーターがあるトラブルを知らずに 1 週間が終わることもある。色々トラブルは生じていたようだが、クラスメイトの中からコーディネートを担う学生が出てきて、例えば「今日何かあったらあなたが担当ね」と人材を振ってくれていたようで、聴覚障害学生からも非常に安心して過ごせた、との感想も聞かれた。

遠隔情報保障をする時の成否は事前のこのような準備がすべてだと思っている。準備はシステム的なこともそうだが、シミュレーションをいかに何度もやれるかということと、聴覚障害学生が積極的にそのシステムに関わるかどうか。そしてある意味で聴覚障害学生の人間性がなければ無理だと思う。例えばクラスメイトの中からコーディネーター役の学生が出てきたのも、聴覚障害学生がこれまで他の学生とちゃんと関わっていたから、この学生のためならサポートしようという雰囲気が自然と醸成されたのかなと思う。

ただ、こういうことはいきなりできるわけでもない。結局は普段のノートテイクや手話通訳などの支援をいかに丁寧にしていくか、丁寧に使うかが大事で、つまりは「支援制度」があるというベースの上でこそ遠隔情報保障の成功に結びつくのではないかなと思う。

楠／遠隔情報保障、実際には様々な例があると思う。今回は特殊な例だと思うが、大事にしたい点は共通しているだろう。



図3 筆者（楠）  
（写真）

### 2.1.3 遠隔情報保障支援技術の困難例

今回の企画にあわせて募集した事例や、普段から PEPNet-Japan に寄せられる相談例などの困難例について、講師それぞれから回答を得た。



・授業担当教員が授業内容が他に漏れるのではないかと心配しているため、有効に使えない。

三好／こうした相談はとても多い。先生方としても、大事に作ったコンテンツを学生に届けよう、でも関係ない人が関わることで盗用されるのではないかと不安を抱くこともあるだろう。インターネット上に自分の音声データ化されて送信される、その後はどうなっているのか、録音されるのは嫌だ、と考える先生も多くいる。確かにそうで、その目的以外に使用しないことと、送受信されるデータは人が通常元に戻すことはできないものであること、希望があれば暗号化することもできることなどを説明して、理解を得なければならない。そして、その音は蓄積されているものではなく、情報保障者が聞いているだけである、などの説明で理解してもらって進めている。手話通訳や日英音声通訳には守秘義務がある、そういうものを信頼して使ってもらっている。

・教室には無線 LAN が入らないが、遠隔情報保障支援技術は活用できる？

三好／最近はタブレットであってもパソコンと同じように有線 LAN での接続もできる。ネットワークを管理している学内担当者に対して、使用するこのポートを開放してほしい、聞こえない学生の学修支援のために教育目的で敷設された無線 LAN を有効活用させてほしいなど、相手が同意しやすい説明の方法で技術的サポートを行い、協力をお願いしている。楠／学内で障害学生支援を担当しているが、インターネット環境や WiFi 環境を整える上では、学内の情報システム管理担当部門と連携をとりながら調整を図ることが重要である。

・学内での支援者確保が難しい。遠隔情報保障技術を活用して学外から支援をしてもらうことはできないか？

太田／選択肢の 1 つとしては良いと思う。実際に遠隔での情報保障支援を提供する会社もあるが、費用が高額であることがネックになる。愛媛大学の場合は、現在 200 人の支援学生がいるが、それでも全く足りていない。また、学生の場合には授業の多い時間帯が重なることで支援者が不足するので、その時間をカバーする方法として、地域の方に愛媛大学の所定の養成講座を受けてもらい、支援に入ってもらっている。学生は 4 年間で卒業してしまう、上手になってきた 3 年生後期から 4 年生になると、多くの学生が就職活動や研究などで支援に入れなくなってしまうため、支援者を養成しても終わりが無い状況のため、安定的に支援者の提供ができるようにと取り組みを始めた。

### 2.2 音声認識技術の活用例

仲兼久／音声認識技術で活用されているシステムの一例を紹介する。UD トーク、AmiVoice、Google が提供している Google Live Transcribe、JV2T など。ただし、システムを導入しても表示される文字量の多さや、誤字脱字・誤変換から実際の支援活用につながっていないのではないかなと思う。その辺りも含めて活用例を紹介する。





### 2.2.1 愛媛大学での運用事例紹介

太田／本学では、現在 13 人の聴覚障害のある学生が在籍し、うち 11 人が支援を利用して  
いる。本学の支援では「文字通訳」という括りの中で、手書きノートテイク、IPtalk を使っ  
たパソコンノートテイク、そして音声認識を活用している。音声認識は UD トークの法人  
契約と補聴援助システムの Roger ペンを組み合わせて使用、遠隔情報保障は、captiOnline  
システム（開発：筑波技術大学 若月氏）を活用している。状況に応じて文字通訳の方法  
を柔軟に変更しながら行っている。他には手話通訳支援と、軽度の難聴学生対象に代筆支  
援を提供している。

この 4 種類の文字通訳の違いについて  
(図 4)。私の感覚ではあるが、それぞれ  
の方法で左棒線が要約率、右の棒線が情  
報量を示した。一番左の手書きの場合、  
要約率は上がり情報量としては下がって  
くる。パソコンで要約しながら入力した  
場合では、大体どちらも 50% ぐらい。パ  
ソコンのベタ打ち（全文に近い入力）で  
情報量はだんだん増えてくる。最後の音  
声認識では情報量が 100% になっているが、基本的に要約の作業をせずに、聞こえたまま全  
て文字が出てくるのが特徴。その前提で話を進めたい。

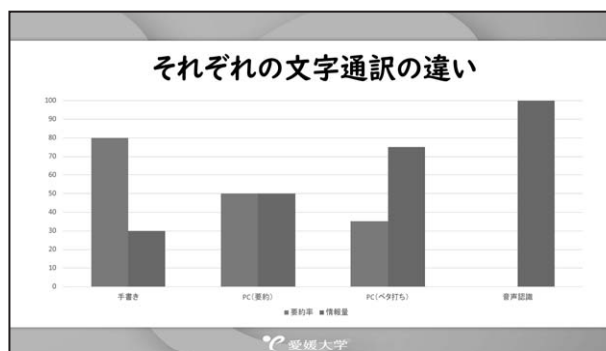


図 4 それぞれの文字通訳の違い

音声認識支援が有効となる事例、まず滑舌のよい教員、話の間をとって分かりやすい話  
し方をする教員は、認識率が高い傾向にあると思う。他には、専門用語のストックがある  
かどうか。そして教室内のネットワーク環境、WiFi のアクセスポイントから離れていると  
ネットワーク接続が途切れる場合があるため、その際にはキャリア契約のモバイルルー  
ターで対応している。また、利用中に何かトラブルが起こった時に学生自身が臨機応変に  
対応できる力が重要になる。実際に利用している場面でトラブルが生じ、操作が分からず  
授業に集中できなくなったというケースもある。

最後は、日本語の読解力が求められるという点が挙げられる。本学は UD トークを導入  
したのはかなり前だが、現時点では正式な支援としては提供していない。理由は、日本語  
の読解力が不十分な学生は、情報が多くなりすぎて授業で何を話されているか理解できな  
いというケースがあったため。先生の滑舌や話速も確認し、認識率と学生の適性を支援室  
で確認し、大量の情報を頭の中で考えてまとめられるという学生である場合に活用する形  
が良いのではないかと。

本学の運用で行っている、認識率を上げるための工夫について説明する。普段の文字通  
訳においても、全ての授業で支援者のための資料や授業ごとの引き継ぎ事項・専門用語を  
記録・保管するための情報共有ファイルを作成しており、集まった単語リストは学期ごと  
に職員が集約している。その上で、重要な単語を各学部の UD トークのサブアカウントご

とに、またパソコンの単語辞書にも学部ごとに分けて専門用語を登録し、必要に応じて切り替えられるよう工夫をしている。実際の利用にあたっては、突然マイクだけを渡されて困った、という先生からの指摘を受けて、利用方法やシステムの説明などをまとめたファイルを作成し、学生から授業前に先生に提示をして説明するようにしている（図 5）。ファイルにはもう 1 つ、グループワークの時に周りの学生の協力を得るために、情報をまとめており、この資料を活用して聴覚障害学生自身が説明して理解を得ることを大切にしている。

試験的に行っている運用形態を紹介する（図 6）。教室内での利用では、学内無線 LAN に接続して利用し、2 名の支援者を修正者として配置しているが、学外での運用では現地には利用者（聴覚障害学生）だけが行くというケースが多い。県外で山や川に入る授業もあり、そこには支援者を同行できないので、現地に利用者だけが行き、送られてくる音声を大学内で聞きながら入力をしている。状況に応じて captiOnline システムを使うこともあれば、UD トークのみを使用して表示される文字を修正するなど、柔軟に対応している。

また、毎年英語のみで進められるシンポジウムが学内で開かれており、その際には Microsoft Translate を活用している。アメリカのロチェスター工科大学では多くの授業で使われているため、理系の専門用語もかなり正確に認識・表示される。音声認識が得意な分野・不得意な分野もあることを知っておいて欲しい。英語の授業での活用の際に難しいのは、基本的には英語で進む中で時々日本語が出てくる場合。その場合には、語学の堪能な職員が教室に行き、認識率を確認し、概ね 75% 以上の認識率の場合は音声認識を使っている。支援学生も工夫をしており、英語が発せられている場合には Microsoft Translate を使用、日本語が発せられた時には UD トークに切り替え、ペアワークが始まった時には手書きをするなどしながら活用をしている。

最後に、音声認識技術を活用した支援のための課題について。

利用する聴覚障害学生については、まず要約されていない日本語を理解する力が必要であること。次に、自分でセッティングが可能であり、システムで生じるトラブルなどの特性を理解できる学生を育てていかなければならない。

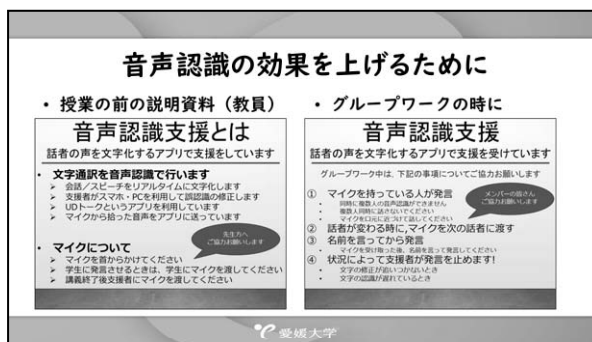


図 5 音声認識の効果を上げるために



図 6 愛媛大学の運用形態 学外【試験運用中】



修正を担う支援者側は、通常のパソコン通訳よりも聞き溜めが必要になること、トラブルが生じた場合にも慌てずに対応できるスキルが求められることを踏まえた養成が必要になるだろう。情報保障としての質の保証も欠くことが出来ない。情報量が多く文字がキレイに表示されている、それがイコール良い支援かどうかは、利用する聴覚障害学生側に委ねられなければならない。学生としっかりコミュニケーションを取った上で、授業をキチンと理解できる支援方法を探ることが必要だろう。その点、本学では1年次から支援内容について提案をしつつも、学生本人に決定させるようにしているが、その際には必ず「トラブルがあったらどうしたい？手書きに切り替えてもらう？」など、現場で判断ができる力を身に付けられるように支援を行っている。



図7 筆者（太田）  
（写真）

### 2.2.2 明治学院大学での運用事例紹介

岡田／本学の音声認識の基本的な考え方、特に UD トークを活用した音声認識技術をどのように使っているか説明する。音声認識は、「話し方に気をつけて声をキレイに入れる」「修正者を入れる」「辞書登録をする」が一般的に「正しい」とされる方法だと思うが、本学ではちょっと特徴的な考え方で行っているかもしれない。まず一番気を使っている部分が、音声をいかにキレイに入れるかということ。逆に言えば、音声入力がキレイにできないなら音声認識は使わない、というのが本学の考え方。よくあるのが学生にタブレットだけを渡して、使ってみたら認識率が悪かったから使えない、という例。それは当然で、そんな万能のシステムではない。音をキレイに入れるための工夫として、Bluetooth のマイクを使って先生が話している声を直接できるかぎりキレイに入れることや、補聴援助システムの Roger から iRig2 を通してタブレットに入れるなど、機材も色々使用しながら活用している。また、当然ながら滑舌の良くない先生には使わないことにしている。よく言われるのが、UD トークがあることを前提に話し方を意識しましょうということ。でも現実的に、「キレイに話して」と言われても無理がある。基本的には認識させやすい話し方の先生を選んで使用している。また、今年から学内の施設管理部門に依頼をして、音響システムから直接音を取れる仕組みを作っている。音響システムの出力端子から音を取れるようにしておき、その端子とつないだケーブルを学生が触れる場所においている。聴覚障害学生は必要ときにそのケーブルをつないで使っている。こうすればマイクを複数本使ったり、学生にマイクを渡すときも音が入るようになる。現在6つの教室に整備できたので、来年度は教務課と相談しながら、これらの教室に音声認識システムや Roger を使う聴覚障害学生が受講する講義を優先的に割り当てる予定にしている。

2 つ目の修正者に関してだが、本学では修正作業は基本的にはしていない。というのは、修正はノートテイクより簡単と言われることが多いが、言うほど簡単ではないと思う。こ




れについては色々な考え方はあると思うが、本学の考え方としては、結局人の養成が必要ならばその労力はノートテイカーの養成に使いたいと考えている。また、利用している聴覚障害学生にとっても修正されたものを読むのは結構大変だと思う。今認識しているところが次々と表示され、上の方で文字が修正され、しかも修正するところとしないところはまちまち。そういう中でキッチリ読んでいくこと、特に授業のスピード感の中で読んでいくことは実際はきついのではないかな。そのため、具体的な事例は後で話す、本学では音声認識そのものを頑張って良くするのではなく、シンプルに認識されただけの範囲で使えるのであれば使う、そしてもしそれで不十分であれば、修正を入れたりして改善するよりは、他の方法をプラスして質の担保をしよう、という考え方をとっている。また、このように組み合わせて使うなど、支援技術をあれこれと考えながら使う経験を通して、学生や先生にも教育的な視点でアプローチをしていこうというのが本学の考え方。例えば、単語登録についても言える。それをするかどうかは、利用する学生の判断に任せている。学生 1 人 1 人にサブアカウントを与えているので、自分が受ける情報保障の質にこだわりたい学生は単語登録をしっかりやるし、そうではない学生は適当にしているが、それも学生の選択権の 1 つと思っているし、使っていく中で効果を感じられれば自主的にするようになると思う。

他に留意しているところは、音声認識は結構リスクな手段である、ということ。これは忘れてはならないと思う。誰かがそばで確認してくれない限りは、出てきた文字が合っているかどうかを誰も保障してくれない。これはかなり怖いということをコーディネーターや支援者が把握しておく必要があると思う。

もう 1 つが、学生の聴力や配布資料など補完的な手段の有無で誤認識の許容度が大幅に変わること。大体同じくらいの認識率の文字を、難聴学生が見た時には、「これいい、使う」と言っていたが、聴力を活用していないろう学生が見た時は「怖い、使えない」と言っていた。支援者側が「このくらいであれば使えるかな」と思っても、聴覚障害学生もそう受け取るとは限らない。そのくらい違うということを踏まえて考える必要がある。要するに、ノートテイカーがいらないから、足りないから代わりに使うということではなく、ノートテイクや手話通訳にプラスされる別の手段と考える必要がある。代わりではなく、「ほぼ加工しない生に近い文字が出る」「よりリアルタイムで文字が出る」など、これまでのノートテイクができないことができるかもしれない別の手段としてリスクも考えながら考えて使っていくことが大事だと思う。

いくつか具体例を話す。まず、パソコン

**運用/工夫事例：パソコンノートテイクとの併用**



- 聴覚障がい学生は、UD トークを見ることで思考が「話しことば」モードに。ライブ感や微妙なニュアンス、言い回しも伝わりやすくなる。
- 誤認識や認識が難しいもの（固有名詞やカタカナ語）は、少し遅れて表示される PC テイクを見て理解。
  - 時々単語登録も行う
- 通常の連係入力を残したまま UD トークを手前に設置（修正なし/先生には Bluetooth マイク）
- PC テイクは無理に先生を追いかけるに、ケバ取りや整文しながら丁寧に表出
- 役割が明確になることで、テイカーも心理的に楽に。

図 8 運用/工夫事例  
パソコンノートテイクとの併用

ノートテイクと音声認識を併用している例（図 8）。先生の話速が相当に速く、3 人での連係入力でも間に合わない。加えて、ライブ感のある話し方で学問的な話しをされているが、その面白さをどうしても手を加えざるを得ないパソコンノートテイクだと伝えられない、ということがあった。そこで、パソコンノートテイクはそのまま使って、表示用 PC の画面の前に UD トークを表示したタブレットを置いて併用した。この結果、タブレットには先生の話している声がほぼそのまま文字で表示されるので、ライブ感や微妙なニュアンスなど話し言葉の言い回しが伝わりやすくなった。この時は先生の話し方がとてもキレイだったので、内容理解ができないほどの誤認識はなかったが、パソコンノートテイクはそのまま使っているため、その何秒後かに出てくる IPtalk の画面を向こう側に覗き見ることで対応できた。ノートテイク者にとっても、音声認識を入れてスピードや言い回しは任せてしまうことが明確になった結果、話の筋や専門用語、数字などを落とさずに丁寧に打てばいいと心理的に楽になった。



図 9 企画の様子（写真）

他には、ゼミで使った例もある。この時はゼミ生全員が自分のスマートフォンに UD トークをインストールし、QR コードで繋げて活用する方法を行った。当初は手話通訳を入れることを考えていたが、担当教員から、4 年生での実習や就職後を考えて、支援者がいない状況で直接コミュニケーションを取る方法を考えていくことも大事ではないかとの意見をを受けて実施した。教員から学生に上記の考えを話してもらい、

本人とコーディネーターの間でも話し合いを重ね、学生も納得した上で実施した。実際に始める時には、コーディネーターも 2~3 回説明のためにクラスに行った。ゼミ生にはその場でアプリをインストールしてもらい、手を動かしながらやってもらった。マニュアルを作成して渡すだけでは、ちょっとうまくいかないかと「ああ、ムリだな」「面倒だな」と思われるので、実際にその場で一緒にやって、操作面で突っかかることなく、また実際に音声認識をさせてみて「意外といいかも」と実感してもらうことで、スムーズな運用に移行できた。さらに時々様子も見に行行ってフォローもした。相互のやり取りが醍醐味のゼミなのに皆自分のスマートフォン画面しか見ていないということがあったので、「そこまですなくても大丈夫」「こんな感じで自然に」と状況に応じて軌道修正もした。ただ、この事例も音声認識だけでは難しくどうしても通訳が必要な場面があると思い、手話通訳も 1 人配置して対応した。

基本は修正者はいれないけれども、入れて行った事例もある。経済学の授業で、先生の話が速くて情報の密度が高く、淡々と話をするので、ノートテイクがなかなか難しかった。また、特殊な記号や読み方が使われることが多かったため、そこへの対応も苦労していた。



ただ、先生の滑舌はとても良く、また配付資料を 2～3 日前には提供して下さっていたというプラス面もあり、それなら音声認識を使って単語登録も活用してということができるのでは？と使用した。

運用時のポイントは 2 つあり、1 つは教室の音響機器から音声を取得すること。もう 1 つは、修正者はここだけは修正しないと理解できない所だけに絞る、その代わりに、特殊な記号を言われたりグラフの説明があった時に、手書きノートテイクのフォローのように配付資料に書き込むなどのサポートを行った。このような形で上手く入ったが、副次的な効果もあった。この例では先生が UD トークに興味を持ってくださり、「私も手元のタブレットで文字を見られるか？」「手元で見られれば少しは工夫できるかも」と言って下さったので、教卓にもタブレットを準備した。また、ログも全部先生に渡すことで、どれぐらいの認識率なのかも分かってもらえた。時々授業の様子も見に行き行って学生に助言もした。例えば、字幕が表示される画面をずっと見ていて、先生が板書で説明していることに気が付いていなかった事があったので、学生には視線はあげておうほうがいいよと助言するとともに、先生にはこんなことがありましたとフィードバックもした。すると、先生自身が「じゃあ、今からグラフを書きます等あえて言ったほうがいいですね」などと気付いて下さるということもあった。音声認識にしても普通のノートテイクにしても、単に入れるだけではなく、あらゆる機会を通して学生や先生に気付きを広げていけるようにすることが大事だと思う。

仲兼久／お二人の話から、事前の準備が必要だと改めて分かった。システムの導入に関してだけではなく、先生に説明するポイントや学生自身が理解して操作ができるようにすることの重要性も感じた。

大学の授業は 1 セメスター 15 回なので、初回の授業から検証・試行をしていると 15 回目でやっと方法を確定できることになるだろう。かなり計画的に準備をして、どの授業に音声認識を入れるかも検討した上で進めないと、授業で支援に使うのは難しいことを改めて思った。



図 9 筆者（仲兼久）  
（写真）

### 2.2.3 音声認識技術の困難例

続いて、音声認識技術の困難例について、講師から助言を得た。

- ・初めて聴覚障害学生が入学することになり、文字による支援を本人が希望している。学内で支援者を確保することが難しく、音声認識のアプリをインストールした端末を学生に貸し出して必要な授業に使ってもらう。
- ・音声認識での支援を利用している学生さんから、誤認識が多いので授業内容が理解できない。ノートテイクの支援をしてほしい、と希望されたが、ノートテイクができる学生がいないのでどうしたらいいか困っている。





岡田／これまでUDトークを使ってみたくていくつかの大学から相談を受けたことがある。多いのが、ノートテイクがいないから音声認識を活用する、という大学。それぞれの大学に事情があり、たとえば夜間部で学生がいないなどの事情があるのは分かるが、音声認識技術であっても遠隔情報保障技術であっても、結局はノートテイク制度がベースとして必要なのだと思う。週に1〜2コマでもノートテイクが付く中で利用するのと、全くいない中でシステムだけを利用するのでは違う。1年後、3年後を考えた時に、非常に差が出ると思うし、大学全体としての支援制度構築という意味ではよろしくないと思う。音声認識をまずは誤認識をなるべく出さないように、音を直接入れるなどをした上で、上手に活用しつつ、ノートテイクについても何とか頑張って1コマでも2コマでも導入に向けて努めてほしいと思う。

・英語と日本語が混ざる授業で、うまく認識できない。

太田／現在の音声認識システムでは、言語を自動的に選択できないので、複数言語が同時に交ざると、設定で選択した言語で変換されてしまう。メインで音声認識させる言語は何かを確定する必要がある。英語で話しているのに、時折ポロッと日本語が出てくることがあり、支援者が手書きやUDトークで修正をしている。先生の授業のスタイルに合わせて、先生と連携を取りながら使っていくことが必要だろう。

三好／太田さんの話の中で聴覚障害学生それぞれの日本語能力によって情報保障として選択すべきものが何かという話があったので関連して。以前、アメリカの視察に行った際に、情報保障の手段をほぼ100%に近い字幕を用いているのか、それとも半分程度に要約した字幕なのかを大学ごとに異なる選択をしていた。具体的には、学力的にもかなり上で、英語力も堪能である場合、できるだけニュアンスも外さないように100%に近い全文表示を目標とするCARTを選択していた。一方、留学生や移民の方が多く、ネイティブの英語ユーザが多くないコミュニケーションでは、半分程度に要約したC-Print等を選択していた。それぞれの大学ごとの言語力や授業のバランスを考えた選択。これを日本語能力で考えると、全部音声認識で良いという判断ではなく、できれば学生ごとに手段を選択できるようにして欲しい。音声認識の特徴としてしゃべり言葉がそのまま文字になるため、それ自体の読みづらさもあるなど、いくつか注意が必要だろう。



図10 筆者（三好）  
（写真）

仲兼久／聴覚障害学生が文字を見たときにどう受け止めるかが、音声認識技術の活用では重要なのだと思った。

## 2.3 補聴援助技術の活用例

楠／次は文字情報ではなく聞こえを援助する補聴援助システムを紹介する。最近よく使わ

れているのは Roger のシステムで、PEPNet-Japan 作成のマニュアルに詳しく操作方法が載っているので参考にして欲しい。

### 2.3.1 明治学院大学 学生自身の選択肢を広げる活用例

岡田／大前提として、学生の聴力とのマッチングと使用環境の調整は必要だと思っている。最近では人工内耳の装用学生が増えてきているし、「人工内耳があるから特に配慮はいらないでしょう。大丈夫でしょう」という誤解も多いが、そんなことはない。補聴器であっても人工内耳であっても聞こえない部分はあるし、そこを補聴援助システムで補うことが大事。逆に補聴援助システムを使っても不十分な場合もある。その場合にはノートテイク等を使用すべきで、その意味でも聴力とのマッチングは不可欠である。

Roger は非常に進歩していると感じる。私自身、以前 FM 補聴システムを使用したことがあったが、気持ち悪い聞こえ方で全く合わなかったが、学生のために導入した Roger を使ってみたら、とても良い聞こえ方で今では私自身も頻繁に使用しているくらいである。そんな進化している Roger であっても、環境調整は必須。例えば、グループで使う時に周りの声が入って聞こえにくいこともある。その場合には教室の隅にグループを配置する、間隔を一行空けるなどが必要。補聴援助システムを使っているからといって問題が全部解消されるわけではないので、残る問題をいかに丁寧に潰していけるかが大事だと思う。

そして使う時は、各機器の特性の把握も大切になる。Roger の送信機も色々な機種があり、それぞれの聞こえ方の特徴や得意な場面・苦手な場面が異なっている。そこを考えながら使うことが大事になる。ただ、コーディネーターが何かをするというよりは、学生が自分で試して自然にこの授業ではこれの方が合う、この授業ではこれが、と特徴を把握して使いこなせるようになってくるようだ。学生任せではダメだが、一方で学生が自分でできることはお任せする、ということだと思う。

特段の活用事例としては、音声認識の時と同じだが出力端子の活用がまず 1 つ目。先生に Roger を掛けてもらっても当てられた学生の声が入らないといった問題があったため、音響機器から出力ラインを使用し、音声を一本化して対応するときもある。または複数台を同時に利用することも多い。使い方は説明書を参照していただきたいが、時にはタッチスクリーンのグループと、Roger ペンのグループを同時に使いたい時もある。その場合は単純に受信機のマイリンクを 2 つ首に下げて使っている。もちろんここまでの内容は、音声分岐すれば音声認識と同時に使えるので、音声認識と併用している学生も多い。

分岐するという意味では、英語の授業での事例もある。ある学生は、通常は Roger のみを使用して授業に参加しているが、英語の授業の際にスピーカーから流れるリスニング音源が聞き取れないという状況が生じた。そのため、この時は先生のスマートフォンが音源だったが、二股のオーディオ分配ケーブルを利用して、スマートフォンから教室のスピーカーシステムに流れるラインと、Roger タッチスクリーンマイクに入っているラインの 2 つに分けることで、教室内に流れるスピーカーの音声は確保しつつ、聴覚障害学生には





Rogerを通して音が届くようにした。当該学生からは「今振り返ると、ケーブルを抜き差ししたときに数秒間の無音部分が出てしまうことに気がついたので、それを早く先生に伝えられれば良かったけれど、授業が何回か進んでから気が付いたので言いにくかった。逆に言えばもっと早くからリハーサルなどを重ねておけばよかった」、「もう 1 回同じ方法で使用するのであれば、先生にも「これが私の聞こえ方です、聞いてみてください」と実際に聞いてもらうようにする」といった振り返りがあった。やはり機器を使っておしまいではなく、キチンと振り返りをしながら、次に繋げていくことが大事だと思う。

### 2.3.2 補聴援助技術の困難例

補聴援助技術に関する困難例について、講師から助言を得た。

- ・人工内耳装用学生から文字による支援希望の申し出があった。人工内耳で聴き取れているのなら、文字の支援まではいらないのでは？

太田／私も人工内耳を利用している。最近入学してくる人工内耳の学生の傾向を見ると、両側とも人工内耳を使っていて、かなり普通に話をする学生もいる。「なぜ聞き取れないのか」という質問も多く聞かれるが、私自身も 1 対 1 で話すことは困難ではないけれども、授業中になると難しい。先生の口も見て内容を理解しているので、ノートをとるために下を向いていると先生の声が聴き取れなくなる。人工内耳をしていても、必ず本人が何の情報も落としているのかを確認して、必要に応じて文字通訳をつけたほうが良いのではないかと思います。

楠／大阪大学でも人工内耳装用の学生も入ってきている。全てにノートテイクを配置しているのではなく、この授業はあったほうが分かりやすいとか、この授業ならノートテイクがなくても大丈夫などを本人との面談で確認しアセスメントした上で配置している。人工内耳を装用しているから問題はない、ということではなく、本人のニーズを把握しながら支援調整をすることが大事だと思う。

### 2.4 映像教材の字幕作成

仲兼久／映像教材の字幕作成に関しては、どこまでの支援をしているのかが大学により大きく分かれるところだと思う。

一般的な字幕作成の流れを確認したい。まず、映像を見ながら文字起こし作業をするテキストデータの作成をする。次に、映像と字幕を同期するタイムコードの作成

をする。最後に、映像と字幕の同期作業で映像への字幕付与をする。

このステップのどこまでをやるのかは、大学それぞれ対応が異なっていると思う。

図 11 は正会員大学を対象に行ったアンケートをまとめたもの。京都産業大学では、

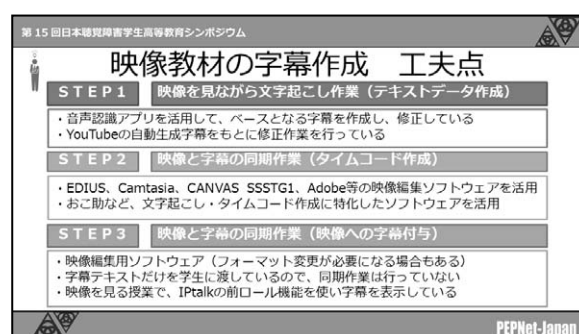


図 11 映像教材の字幕作成 工夫点



STEP1 のテキストデータ作成までを行っている。テキストデータを作成しておき、映像を使用する授業で IPtalk の「前ロール」機能を使って字幕テキストを表示させていく、という支援をしている。

## 2.4.1 明治学院大学の字幕付与の考え方と対応事例

岡田／本学の字幕付与または文字起こしでは、できる限り一字一句忠実に文字化することを基本にしており、それは聞こえる学生が聞こえている情報は、たとえ聞いていないとしても、支援側としてはイコールのものを伝えたいと思っているため。

また、教育的な意味合いもある。例えば英語が聞こえるときに、そこに日本語字幕があれば文字起こししない大学もあるかもしれないし、聞こえる学生も英語を聞かずに日本語字幕を見ていることも多いと思う。しかし、そこで書かなければ情報としては無いことになってしまう。逆に、見ないかもしれないけれどキチンと英語の部分も文字に起こしておけば、「こういう言い回しをしているのか」「こういう表現があるのか」と勉強になるはずである。労力はかかるが教育機関の支援のあり方としてこうした点は大事にしたいと思っている。

また、ここまで細かく行う理由として、聴覚障害学生が場所を見失わないようにするという配慮の意味もある。ノートテイクを使わずに文字起こしだけ利用している学生もいるが、こうした学生が映像のときだけ誰かに指差しをしてもらわないとわからなくなるということのも変な話である。できるだけこの紙だけを見てついていけるように工夫して表記している。

とはいえ、作業はできるだけ効率的に行いたいので、次のような流れで作業している（図 12）。まずは、教材として利用する場合には字幕付きの映像を利用して下さい、と教員には再三アナウンスをしている。1 つは市販の教材で、字幕がついているものを活用してもらう。もう 1 つは、地上デジタル放送でクローズドキャプションが付いている番組の場合には、録画して Blu-ray レコーダーで字幕を表示して再生してもらう。こういう方法がありますよということを積極的に伝えるようにしている。この段階で

上手くいけば、学生サポートセンターへの連絡もなく、先生自身が字幕付の教材を用意してくれることになる。もしその段階を

超えて学生サポートセンターに問合せ、相談があった時は、まず映像メディアを確認し、Blu-ray で録画されている場合にはクローズドキャプションの機能と表示方法を伝え、教室のプレイヤーも対応していれば、そのまま使って下さいと伝えている。ただ、Blu-ray で録画されていても教室の機材が対応していない場合は、文字起こしをしている。あるいは学

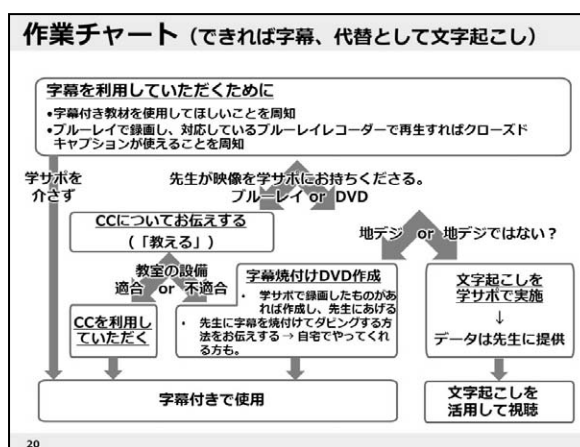


図 12 作業チャート



生サポートセンターにある Blu-ray レコーダーで、字幕を焼き付けた DVD をダビングして使ってもらうこともある。学生サポートセンターでも NHK の福祉番組など授業でよく使う番組は自動録画しておき、それを使用して字幕付き DVD を作成することもある。

このような方法でも無理な場合は、最終手段として文字起こしの作業をするが、効率化のために音声認識をさせたテキストをベースに活用する場合もある。または、NHK の番組などはウェブサイト上に書き起こしがある場合もあるので、検索してみる。そして、最終的にできた文字起こしのデータは先生に渡し、授業で使用する際にプリントアウトして聴覚障害学生に直接渡してもらうようにしている。他に使う機会があればご自由にどうぞ、と渡している。その理由は 3 つあり、1 つは授業の進捗に応じて活用して頂くため。いつ使うと決め打ちしないで、必要な時に使ってもらうことで、教員の授業を裏でサポートしている。2 つ目は、実際の文字起こしを見て頂けるので、これは大変な作業だと分かってもらう機会になる。そこから早く教材を貸してもらえようになったり、ある意味で学生サポートセンターは自分（教員）のためにも使えるなと思ってもらい、協力体制の強化につながっているつもりである。そして、3 つ目に先生が自分で用意して学生に渡すという形に持って行くことで、先生にもサポートの当事者という意識・気持ちになってもらいたいと思っている。1 つ 1 つのことを見れば単なる文字起こし作業だが、積もり積もって **Universal Design in Learning** や基礎的環境整備という大きなものとして残っていくように心がけている。

#### 2.4.2 愛媛大学 字幕入りビデオ作成の流れ

太田／本学では毎学期末に教職員に対して「映像を使う場合は必ず字幕入りの映像を使って下さい」と周知をしている。中には先生が作成した文字起こしが用意されている場合もあるが、読んでいる最中に画面の映像が変わってしまい、結局内容が分からなくなることがあるため、字幕付映像の提供を原則にしている。

文字起こし作成の流れについて。まずは映像にクローズドキャプションの有無を確認する。字幕付与の作業は、図 13 の通りかなり複雑な手順を踏んでいる。

文字起こしの部分では、認識率が高い場合には音声認識を活用したデータを修正している。学生が作業した後に、職員が内容の確認をしている。

次に、表示する字幕のタイミングで文字区切りの作業を進めるが、ここまで学生が行った後に職員が確認をする。最後に、私が音なしで字幕を全部見て、読む時に分かりやすい区切りに直した上で、映像と合成して先生に引き渡す用意を進めている。映像の形式は先

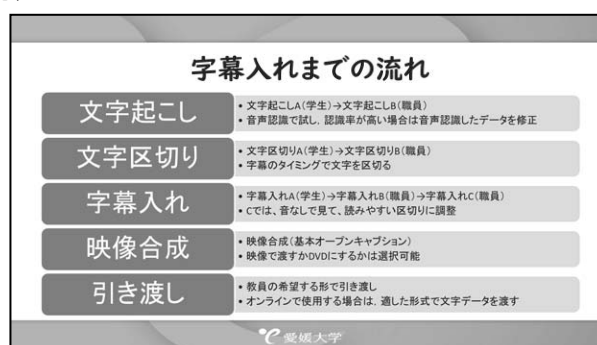


図 13 字幕入れまでの流れ



生の希望に可能な限り対応している。

本学の基本的な文字起こしルールは、図 14 の通り。音楽などは曲名が分かれば可能な限り入れてもらうようにしている。最近の授業形態ではオンラインラーニングを活用することも増えているが、字幕が入っていない映像が使われる時には時間に猶予を頂いて作業を行っており、試験時期をずらしてもらった経緯もある。

優先順位としては、全学生が受講する必修の授業、オンラインラーニングのある授業、各学部の必修の授業などの順で対応している。

## 文字起こしの基本ルールの説明

1. 聞こえてくる内容をそのまま入力していく
2. 音声の聞き取れなかったときは下線？を入れる
3. 音声以外の情報の入力例
4. 話者を明記する
5. 物音を明記する（画面の外から入ってくる音も）
6. スライド・台詞・固有名詞等
7. 音楽が流れているとき

愛媛大学

図 14 文字起こしの基本ルールの説明

## 2.5. 全体を通して

楠／今回様々な支援技術を紹介した中で、いずれも魔法のアイテムではなく、これを使ったから情報保障を全て提供できた事にはならないことが伝わっただろう。ノートテイクやパソコンノートテイクが基本の支援方法としてあり、それと組み合わせて音声認識や遠隔情報保障を使っていく、あくまでも合理的配慮として提供できる支援技術の1つだのご理解頂けたらと思う。

音声認識技術の体験の部分では、機器トラブルやネットワーク接続のトラブルが発生していたグループもあったと思うが、そうしたトラブルが生じることも踏まえての支援技術なので、今回紹介した音声認識等の支援技術を使うかどうかを、関係者間で判断して活用して欲しい。

## 3. まとめにかえて

本企画では、講師からの支援技術活用事例について、実践例のみならず導入の判断基準など詳細な報告を得ることができた。特に遠隔情報保障技術や音声認識技術については、「ノートテイクやパソコンノートテイクでは対応できない場面での支援」であるという考えに基づき活用されている点が共通しており、学内での支援体制を基盤とするからこそ円滑な活用に至っていることが確認された。1つひとつの活用例を掘り下げて参加者との議論の時間を設けることができなかった事、そして機器操作体験の時間が十分に確保できな

かった点をふまえ、今後も同様のテーマで先端の情報保障支援技術について扱っていきたい。なお、機器操作体験についての報告は別途掲載しているので、あわせて参照されたい。



図 15 企画の様子（写真）



参考：当日配布（企画趣旨）

## 「支援技術のさらに効果的な利用に向けて —活用事例紹介・利用体験を通して—」

企画コーディネーター：PEPNet-Japan 事務局

司 会：楠 敬太(大阪大学)

仲兼久知枝(京都産業大学)

講 師：三好茂樹(筑波技術大学)

太田琢磨(愛媛大学)

岡田孝和(明治学院大学)

- 討論の柱 ①聴覚障害学生が参加しやすい環境整備のためには何が必要か  
②音声認識・遠隔情報保障の円滑な活用において必要なポイントは何か  
③支援技術活用にあたり、欠かしてはいけない事は何か

### 企画趣旨

聴覚障害学生の多様な学びの広がりにより、各大学ではノートテイクやパソコンノートテイクだけでは支援提供が難しい場面に対応できるよう、新たな支援技術の活用に期待が寄せられている。

その中でも、遠隔情報保障技術や音声認識技術の活用、映像教材への字幕挿入については、様々なシステムが開発・公開されていることから、こうした技術の導入により課題解決が進められることが期待されている。しかしながら、これらの支援技術導入を試みたものの、円滑な利用が出来なかったという声や、場面に応じた有効活用方法が見出せずに利用を断念したという声も聞かれる。

そこで、本企画では、聴覚障害学生支援の場面でこうした情報保障支援技術を円滑に活用するためのノウハウを共有することを目的とする。各大学で作成されているマニュアル等も参照しながら、運用時に必要となるポイントが何かを確認していく。また、活用を断念した事例を募集し、その背景も確認しながら、どのような工夫をすることでより良い活用方法となるのかを検討し、さらに実際の機器操作により解決方法を体験する機会とする。これらを通して、支援技術を活用する際に求められるポイントや、様々な場面で有効に活用するための方法や必要な事前準備・環境整備について、改めて確認して行きたい。

参考：当日配布（スライド）

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

【前日特別企画】  
支援技術のさらに効果的な利用に向けて  
—活用事例紹介・利用体験を通して—

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

企画趣旨  
手書きノートテイクやパソコンノートテイクでの対応が困難な場面への対応  
→遠隔情報保障技術や音声認識技術の活用など、  
新たな支援技術の導入への期待が高まっている。  
しかし・・・  
導入を試みたが有効に活用出来ず、利用を断念した、との声も多く聞かれる

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

企画趣旨  
導入を試みたが有効に活用出来ず、利用を断念  
・円滑に活用できている大学では、どのような工夫をしているのか？  
・導入にあたって必要な準備は？  
・聴覚障害学生が参加しやすい環境整備のために何が必要になるのか？

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

本企画の進め方  
・先進的な活用事例と、その背景にある考え方・検討内容の紹介  
・システム面での助言  
・機器操作体験（音声認識技術）  
・質疑応答

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

講師紹介  
司会：楠敬太（大阪大学 キャンパスライフ健康支援センター）  
＜聴覚障害学生に対して提供しているサービス＞

手書きノートテイク	○	パソコンノートテイク	○	手話通訳	○
記録用ノートテイク	○	ビデオ教材への字幕挿入	○	補聴援助機器の利用	○
座席の配慮	○	録音の許可	○	配慮依頼文書の配布	○
遠隔情報保障	○	音声認識技術	○		

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

講師紹介  
司会：仲兼久知枝（京都産業大学 障害学生教育支援センター）  
＜聴覚障害学生に対して提供しているサービス＞

手書きノートテイク	○	パソコンノートテイク	○	手話通訳	○
記録用ノートテイク	—	ビデオ教材への字幕挿入	△	補聴援助機器の利用	○
座席の配慮	○	録音の許可	—	配慮依頼文書の配布	○
遠隔情報保障	—	音声認識技術	—		

PEPNet-Japan



第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 講師紹介

岡田孝和（明治学院大学  
学生サポートセンター）  
＜聴覚障害学生に対して提供しているサービス＞

手書きノートテイク	○	パソコンノートテイク	○	手話通訳	○
記録用ノートテイク	○	ビデオ教材への字幕挿入	○	補聴援助機器の利用	○
座席の配慮	○	録音の許可	○	配慮依頼文書の配布	○
音声認識支援	○	遠隔情報保障	○		

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 講師紹介

太田琢磨（愛媛大学  
バリアフリー推進室）  
＜聴覚障害学生に対して提供しているサービス＞

手書きノートテイク	○	パソコンノートテイク	○	手話通訳	○
記録用ノートテイク	○	ビデオ教材への字幕挿入	○	補聴援助機器の利用	○
座席の配慮	○	録音の許可	○	配慮依頼文書の配布	○
音声認識支援	○	遠隔情報保障	○		

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 講師紹介

三好茂樹（筑波技術大学  
障害者高等教育研究支援センター）  
＜聴覚障害学生に対して提供しているサービス＞

手書きノートテイク	△	パソコンノートテイク	○	手話通訳	○
記録用ノートテイク	—	ビデオ教材への字幕挿入	○	補聴援助機器の利用	○
座席の配慮	○	録音の許可	△	配慮依頼文書の配布	○
音声認識（研究）	△	遠隔情報保障	○		

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 多く用いられている支援技術

### ＜ノートテイク支援＞

パソコンノートテイクや手書きノートテイクなど、支援学生を養成し、聴覚障害学生が受講する授業に派遣する方法が一般的

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 今回扱う支援技術

### ＜遠隔情報保障支援技術＞

インターネットを活用し、聴覚障害学生が受講する教室以外の場所からパソコンノートテイク支援を実施する技術

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 今回扱う支援技術

### ＜音声認識技術＞

- ・インターネット接続したタブレット端末等を介して、教員や受講学生など話者の音声を自動的に文字化する技術
- ・支援者を介在させない活用方法に期待が寄せられている

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 今回扱う支援技術

### <補聴援助技術>

補聴器や人工内耳を装着している学生の聞こえの向上または代替するシステム。学生一人一人の聞こえは異なるので、どのシステムが使いやすいかを相談して活用することが必要である。



PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

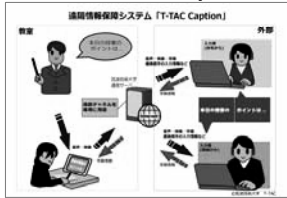
## 遠隔情報保障で活用されているシステム例

<p>★モバイル型遠隔情報保障システム  <a href="https://www.tsukuba-tech.ac.jp/ce/mobile1/">https://www.tsukuba-tech.ac.jp/ce/mobile1/</a></p> <p>★T-TAC Caption (ティータック キャプション) システム  <a href="https://www.tsukuba-tech.ac.jp/ce/t-tac2/index.html">https://www.tsukuba-tech.ac.jp/ce/t-tac2/index.html</a></p> <p>開発：筑波技術大学 三好茂樹</p>	<p>★captiOnline (キャプションライン)  <a href="https://capti.info.a.tsukuba-tech.ac.jp/kaigiroku_rp/guide.html">https://capti.info.a.tsukuba-tech.ac.jp/kaigiroku_rp/guide.html</a></p> <p>開発：筑波技術大学 若月</p> <p>★テレビ会議システムの活用 (Skype、Zoomなど)：市販システムの活用</p> <p>ネットワーク接続や音声取得で置いてしまうことも多い</p>
--	---

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 遠隔情報保障システム T-TAC Caption



PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 遠隔情報保障支援技術の困難例

- ①授業担当教員が授業内容が他に漏れるのではないかと心配しているため、有効に使えない。
- ②教室内には無線LANが入らないが、遠隔情報保障支援技術は活用できる？
- ③学内での支援者確保が難しい。遠隔情報保障支援技術を活用して学外から支援をしてもらうことはできないか？

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 音声認識技術で活用されているシステム例

<p>★UDトーク (Shamrock Records, Inc.)  <a href="https://udtalk.jp/">https://udtalk.jp/</a>            ※大学の授業で利用するには法人契約が必要です</p> <p>★AmiVoice Cloud (株式会社アドバンスド・メディア)  <a href="https://www.advanced-media.co.jp/products/service/amivoice-cloud-2">https://www.advanced-media.co.jp/products/service/amivoice-cloud-2</a></p>	<p>★Google Live Transcribe (Google, Inc.)            ※Android端末用アプリ</p> <p>★JV 2 T- Jiritsu Voice to Text - (自立コム)            ※法人プランあり</p>
---	--

誤字脱字や誤変換が多い思ったように文字にできない

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 音声認識技術のよくある困難例①

- ①初めて聴覚障害学生が入学することになり、文字による支援を学生が希望している。学内で支援者を確保することが難しいため、音声認識アプリをインストールした端末を学生に貸し出し、必要な授業で使ってもらっている。
- ②音声認識での支援を利用している学生から、「誤認識が多いため授業内容が理解できない。ノートテイクでの支援をして欲しい」と希望されたが、ノートテイクができる学生がいないので、どうしたら良いのか困っている。

PEPNet-Japan



第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 音声認識技術のよくある困難例②

③認識率が良くないと学生や先生から言われているが、他に手立てがないため音声認識を修正なしで授業の情報保障として活用している。

④面談場面では音声認識アプリが活用できるのに、4～5人のグループになると全員の声が文字にならない。

⑤英語と日本語が混ざる授業で、うまく認識できない。

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 補聴援助技術で活用されているシステム

★デジタルワイヤレス補聴援助システム『ロジャー』  
(ソノヴァ・ジャパン株式会社)  
<https://www.phonak.com/jp/ja.html>

※参考資料  
『補聴援助システム『ロジャー』操作マニュアル』

使い方の工夫は必要？  
補聴援助だけで大丈夫？

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 補聴援助技術のよくある困難例

①人工内耳装用学生から文字による支援希望の申し出があった。人工内耳で聴き取れているのなら、文字の支援まではいらぬのでは？

②補聴援助システムのマイクを授業担当の教員が使っているの、他の配慮は不要では？

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 映像教材の字幕作成 困難例

<一般的な字幕作成の流れ>

STEP 1 映像を見ながら文字起こし作業（テキストデータ作成）

STEP 2 映像と字幕の同期作業（タイムコード作成）

STEP 3 映像と字幕の同期作業（映像への字幕付与）

困難例

- ・地上デジタル放送を録画した映像の場合、映像を読み込むことができない
- ・映像編集用ソフトウェアがプロ仕様で、操作が難しい

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 映像教材の字幕作成 工夫点

STEP 1 映像を見ながら文字起こし作業（テキストデータ作成）

- ・音声認識アプリを活用して、ベースとなる字幕を作成し、修正している
- ・YouTubeの自動生成字幕をもとに修正作業を行っている

STEP 2 映像と字幕の同期作業（タイムコード作成）

- ・EDIUS、Camtasia、CANVAS SSSTG1、Adobe等の映像編集ソフトウェアを活用
- ・おこ助など、文字起こし・タイムコード作成に特化したソフトウェアを活用

STEP 3 映像と字幕の同期作業（映像への字幕付与）

- ・映像編集用ソフトウェア（フォーマット変更が必要になる場合もある）
- ・字幕テキストだけを学生に渡しているの、同期作業は行っていない
- ・映像を見る授業で、IPTalkの前ロール機能を使い字幕を表示している

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## まとめ

支援技術を効果的に活用するためのポイント

→機器操作体験へ

PEPNet-Japan



## 愛媛大学の事例

愛媛大学 教育学生支援部 学生生活支援課 バリアフリー推進室  
太田 琢磨

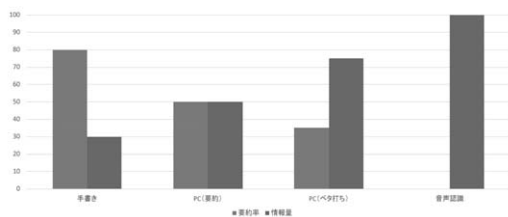


## 愛媛大学の合理的配慮(聴覚障害学生向け)

- ・ 文字通訳
  - － 手書き
  - － パソコン(IPTalk)
  - － 音声認識(UDトーク法人契約 ロジャーペン)
  - － 遠隔情報保障(CaptionOnline or UDトーク併用)
- ・ 手話通訳
  - － 代筆支援の併用可能(板書の代筆のみ)
- ・ 代筆支援
  - － 軽度の難聴の学生対象に提供
- ・ 補聴システムの利用



## それぞれの文字通訳の違い



## 音声認識支援が有効となる事例

- ・ 活用可能な例
  - － 話し方
    - ・ 滑舌のよい教員であること
    - ・ 話の音がしっかり空く教員
  - － 専門用語のストックがある
    - ・ 過去10年分の支援ログから専門用語を抽出し登録を行う
  - － 教室環境
    - ・ 学内のWiFi接続ができる教室である
  - － トラブル対応
    - ・ トラブル発生時に利用者が自身が現地で対応ができる
  - － 日本語読解力
    - ・ 情報量が多くても、内容を理解できる読解力がある
- ・ 活用しにくい例
  - － 話し方
    - ・ 滑舌のよくない教員
    - ・ マシンガントーク
  - － 専門用語のストックが不十分
    - ・ 聴覚障害学生の受け入れの歴史が浅い学部
    - ・ 数学などの数式が多い授業
  - － 教室環境
    - ・ 通信が安定しない教室
  - － トラブル対応
    - ・ トラブル発生時に利用者が自身が現地で対応できない
  - － 日本語読解力
    - ・ 情報量が多くなると理解が難しくなる学生



## 認識率(変換率)を上げるために

- ・ 専門用語の登録
    - － サバアカウトの活用
1. 情報共有ファイルに記入
  2. 学期末に単語確認
  3. 各学部の辞書に登録



## 音声認識の効果上げるために

- ・ 授業の前の説明資料(教員)
- ・ グループワークの時に

### 音声認識支援とは

話者の声を文字化するアプリで支援をしています

- ・ 文字通訳を音声認識で行います
  - 会話/スピーチをリアルタイムに文字化します
  - 変換率が低くても、PCを利用して誤認識の修正します
  - UDトークというアプリを利用しています
  - マイクから拾った音声アプリに送っています
- ・ マイクについて
  - マイクを席からかけてください
  - 学生に発言させるときは、学生にマイクを渡してください
  - 講義終了後文庫箱にマイクを渡してください

### 音声認識支援

話者の声を文字化するアプリで支援を受けています

グループワーク中は、下記の事項についてご協力をお願いします

- ① マイクを持っている人が発言
  - ・ 同時に他者の発言が聞こえにくいため、発言内容をメモしてください
  - ・ マイクが壊れる前に、マイクを次の話者に渡す
- ② 名前を言ってから発言
  - ・ ミスが発生する場合があります。発言内容を確認してください
- ③ 状況によって支援者が発言を止めます!
  - ・ 文字の書き間違いがないように
  - ・ 文字の認識が難しい場合があります





## 字幕入れまでの流れ

### 文字起こし

- 文字起こしA(学生)→文字起こしB(職員)
- 音声認識で試し、認識率が低い場合は音声認識したデータを修正

### 文字区切り

- 文字区切りA(学生)→文字区切りB(職員)
- 字幕のタイミングで文字を区切る

### 字幕入れ

- 字幕入れA(学生)→字幕入れB(職員)→字幕入れC(職員)
- Cでは、音なしで見て、読みやすい区切りに調整

### 映像合成

- 映像合成(基本オープンキャプション)
- 映像で渡すかDVDにするかは選択可能

### 引き渡し

- 教員の希望する形で引き渡し
- オンラインで使用する場合は、適した形式で文字データを送す

愛媛大学

## 文字起こしの基本ルールの説明

1. 聞こえてくる内容をそのまま入力していく
2. 音声の聞き取れなかったときは下線?を入れる
3. 音声以外の情報の入力例
4. 話者を明記する
5. 物音を明記する(画面の外から入ってくる音も)
6. スライド・台詞・固有名詞等
7. 音楽が流れているとき

愛媛大学

## 字幕入りの映像を増やすために

- 2月と8月に次学期の字幕入りの協力依頼を全教員に送付
  - 優先順位
    1. 全学生が取る必修の講義
    2. オンラインラーニングのある授業
    3. 各学部の必修の講義
    4. その他の授業
- 映像購入時に字幕入りの映像を購入するように周知
- 地上波録画時のCCの出し方についても周知

愛媛大学



## 明治学院大学での事例

遠隔情報保障支援・音声認識システム・  
補聴援助システム・字幕挿入（文字起こし）

明治学院大学 学生サポートセンター  
障がい学生支援コーディネーター  
岡田 孝和

1

## 音声認識システム

■ 本来は、

■ 本学では、

本学で使用する際の最低条件

1. 音声入力に注力
  - ・ キレイに直接入れる
  - ・ できない時は使わない
2. 単語登録をするかは学生の判断
  - ・ 学生一人ひとりにサブアカウント
3. 修正者は基本は入れない
  - ＝使う場面や条件は限定的
  - ・ 修正って意外と難しい？ 言うほど簡単ではないよね？
  - ・ 結局は「人」が必要だよな → それならタイカー養成に注力
  - ・ リアルタイム修正って聴覚障がい学生から読みやすいかな？
  - ・ 卒業後も「人の手」は借りる。音声認識があれば煩わしさから解放されるわけではない

2

## 音声認識システム

■ 教科書通り（？）の使い方ではないかも知れないけれど、

■ 音声認識の力を最大限発揮していないと言われるかもしれないけれど、

システムを使うために or 使う経験を通して 教育的な観点

- ・ 音声認識に限らず
- ・ 学生だけではなく、教員も

■ 音声認識システム使用にあたり特に留意していること

- ・ 誰も「保障」してくれない
- ・ 聞こえている度合い、音声認識以外の手がかりの有無によって誤認識の許容度は大幅に変わる！

－「このくらいの認識であれば十分使える」の判断に要注意！

音声認識は「ノートテイクの代わり」ではなく！

ノートテイクではできないことができる「別の支援手段」と考える。

（当然そこにはネガティブな面もある）

3

## 最低条件：音を直接・キレイに入れる

■ Bluetoothマイクを使用

■ Roger送信機を活用

■ 有線マイクを活用

■ 滑舌の良い先生だけ使う

- ・ 話し方はそんなに変えられない
- ・ キレイな声でなければ音声認識は無理！
- ・ ボソボソとした話し方は難しい
- ・ か細い声も厳しい（マイリンク等の音量調整で対応できることも）

4

## 運用/工夫事例：スピーカーシステムから直接音声を取得

- ◎ 学生の声が入らない...
- ◎ 先生がマイクを学生に回す...
- ◎ 複数人が話すがマイクを回すのが煩雑...
- ◎ マイクを複数本使う。全部の声を取りたい...
- ◎ Rogerとハンドマイクがハウリングを起こしてしまう...

■ 情報センターに協力してもらい、音響システムの裏から出力を取りステレオケーブルを表に設置

■ 聴覚障がい学生が必要ときにRoger送信機を挿し、マイリンク経由でUDトークに（※もちろんRoger単体でも使える）

■ マイクが何本でも関係なく音声取得可能。マイクだけではなくDVDなどの機器の音も。

■ 現在6教室  
来年度は事前に教室の割当てをお願いする予定

5

## 運用/工夫事例：パソコンノートテイクとの併用

- ◎ 普通の講義形式だが、先生の話す速さが相当速い（一時は、3人連係入力をしていた）
- ◎ 単純に速いだけではなく、ライブ感のある話し方をとする
- ◎ また、単に知識を伝達するような話し方ではなく、学問的な話し方をしている（「書きことば」で表記するテイクでその面白さ、奥深さが伝わるのは中々難しい...）

- ◎ 話し方はとても明瞭で聞きやすい

6

## 運用/工夫事例：パソコンノートテイクとの併用



- 通常の連係入力を残したままUDトークを手前に設置（修正なし/先生にはBluetoothマイク）
- PCテイクは無理に先生を追いかけて、ケバ取りや整文しながら丁寧に表出

- 聴覚障がい学生は、UDトークを見ることで思考が「話しことば」モードに。ライブ感や微妙なニュアンス、言い回しも伝わりやすく。

- 誤認識や認識が難しいもの（固有名詞やカタカナ語）は、少し遅れて表示されるPCテイクを見て理解。

- 時々単語登録も行う

- 役割が明確になることで、テイクラーも心理的に楽に。

7

## 運用/工夫事例：クラス全員が自分のスマホにアプリを入れて

### ■ 学部生のゼミ

- 担当教員「実習に向けて直接コミュニケーションをする方策を考えていくことも大切では？」

1. 前年度2月～3月に教員から聴覚障がい学生に考えを伝える
2. 聴覚障がい学生とコーディネーター間でも何度か相談、意思確認の上で実施
3. 始めの1-2回、クラスでインストラクション
  - ・ その場でダウンロード（「入れてきてね」と言ってもやってこない学生もいる/最初から手を動かして自分でやっていけば「できる」「いいかも」「ほーっ！」と実感→スムーズな利用に）
4. とくとき様子を見に行き助言
  - ・ 「必要以上に画面凝視してしまっているけど必要ないよ。むしろお互いの顔見てね」

- とはいえ、音声認識だけで全ては無理

（無理ではないかもけど授業のスムーズさも大事）

\* 手話通訳も1人配置

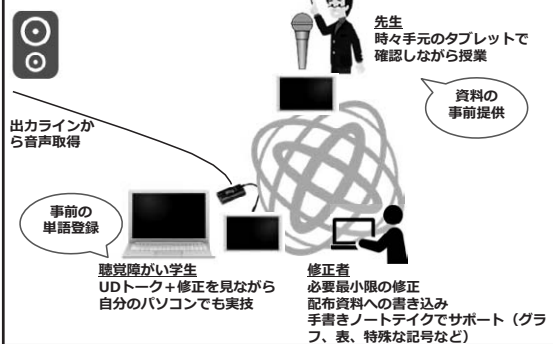
8

## 運用/工夫事例：経済学の授業で活用

- ◎ 先生の話は速い方（密度が高い）
- ◎ 特殊な記号、読み方が多くて苦労
- ◎ 数式を書くときやその説明もある グラフも多い
- ◎ パソコンで実際に作業しながらもあり
- ◎ PCテイク、自分のパソコン、資料など色々見るので大変 机も狭い
- ◎ 話し方はとても明瞭で聞きやすい
  - \* 必要最小限の修正で済みそう
- ◎ 配布資料も毎回事前にもらえる
  - \* 単語登録できる
  - \* 誤認識のカバーできる
- ◎ 出力ラインも使える教室だった
  - \* 音声により明瞭に取れる

9

## 運用/工夫事例：経済学の授業で活用



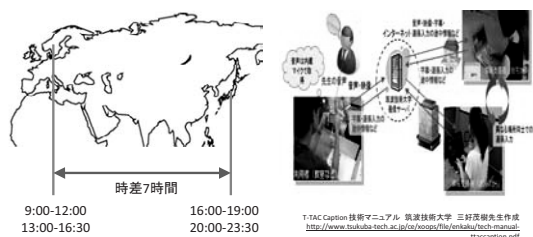
10

## 遠隔情報保障支援

- 遠隔をやるだけなら簡単
  - スカイプ、携帯、学内LAN、zoom??
- でも、支援として使うためには入念な準備が必須！
  - 聴覚障がい学生
  - 支援者 双方に
- 相手が見えないがゆえにチームワーク・柔軟性大切

11

## 北欧研修：T-TAC Caption利用



12





## 北欧研修：T-TAC Caption利用

### 半年前～

- システム選定、先生への説明、場合によってはデモンストレーションも
- 旅行会社を通して現地情報の収集と情報共有
- 学生がすべきことを整理と確認、同意
  - 料金プラン確認
  - モバイルルーター or 海外ローミング？
- 上手くいかなかったときの代替策も検討（現地でクラスメイトによるノートテイク）

### 1ヶ月前～

- テイカーの募集と説明会
- テストの繰り返しと問題点の洗い出し
  - 振り返りシートの利用と共有（エクセルの一覧に追記）
  - テイカー）IPTalkとの違いの理解、対応策の検討
  - 聴覚障がい学生）マイク特性の理解と選定、動き方の確認
  - 共通ルール・手順の策定と共有
    - ・ 準備時の確認の手順
    - ・ テイカーからメッセージを伝えるときの表記方法（記号の活用）
- 現地コーディネーターや通訳者に説明文書送付

13

## 北欧研修：T-TAC Caption利用

### 本番

- 細かな連絡・資料の送付
  - 「少し遅れているよ」
  - 「今こんな感じ。これからここに行く。誰々が話す」
- 毎回のフィードバック
- これらをLINEグループを活用して学生が自発的に（コーディネーターも全ては知らず）

### トラブル

- 音声不明瞭はあったが、影響は最小限に
  - テイカーがすぐに伝える
  - 聴覚障がい学生が現地で動く
- ノートテイクをする場面は無かった
  - コーディネーター役の学生が自然に生まれ、的確に差配

普段からの積み重ね  
制度構築

- 速隔の成否は「準備」がすべて！
- ・ システム
  - ・ 当日のシミュレーション
  - ・ 聴覚障がい学生の積極性/人間性
  - ・ テイカーのかかわり

14

## 補聴援助システム

### ■ 聴力や使用環境とのマッチングをした上で利用が必須

- 学生の状況や意思によっては、とりあえず使う場合もあるが、最終的には自分の聴力の特性とシステムの効果を十分に熟知した上での利用を促す
- 場合によっては、「人の手を借りる支援＝ノートテイク、手話通訳の利用促す」

### ■ システムの限界を理解することも必須

- 環境の調整（座席位置など）をすることは前提条件

### ■ 各機種の特性の把握と使い分け、組み合わせも必須

- 学生が「ああでもない、こうでもない」とやりながら覚えていきます。



15

## 運用/工夫事例：音声の一歩化・複数台利用

- ◎ 先生の声は聞こえるけど学生の声は聞こえない…
- ◎ 先生の声と学生同士のやり取りの両方を同時に聞きたい…
- ◎ 周りの声が邪魔をする…
- ◎ 特定の人の声を上手く拾えない

### ■ 出力ラインの利用（音声の一歩化）

cf. 音声認識システム

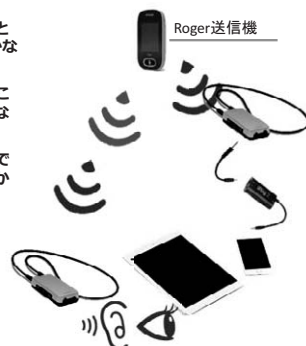
### ■ 複数台同時利用

- タッチ2つ/タッチとペン/タッチとセレクト など
- 「タッチグループ」と「ペングループ」を同時に使いたいときは、マイリンクも2つかけられることも（スマートな方法ではないけども…）

16

## 運用/工夫事例：音声認識システムと併用

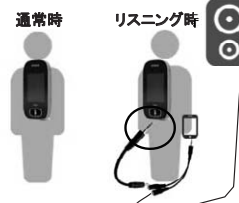
- ◎ ほぼほぼ聞こえるけどちょっと厳しいときも…集中力が続かないときも…
- ◎ パソコンノートテイクだと聞こえなかったところが表示されないときも…
- ◎ 耳で聞こえるものとパソコンで表示されるものが微妙に違うから気になる…
- ◎ 先生の声は明瞭な方



17

## 運用/工夫事例：英語の授業でのリスニング

- 当該学生は人工内耳装用。通常の授業ではRoger使用。語学の授業も同様。
- ◎ 英語の授業のリスニングで聞き取れない（先生のスマホが音源。当初はスマホとスピーカーシステムを繋いで音を流していた）



- 音声を流すときに先生がケーブルを抜き差し
- 全体への音声を保ったまま、Roger経由で聴覚障がい学生にもクリアな音声を。

18



## 126



# 「支援技術のさらに効果的な利用に向けて —活用事例紹介・利用体験を通して—」 機器操作体験報告

磯田恭子<sup>1)</sup>，三好茂樹<sup>1)</sup>  
筑波技術大学<sup>1)</sup>

## 1. 目的

前日特別企画「支援技術のさらに効果的な利用に向けて—活用事例紹介・利用体験を通して—」の中では、遠隔情報保障支援技術、音声認識技術、補聴援助技術、映像教材への字幕挿入の4つの支援技術を取り上げ、講師からの運用事例を紹介した。その後、実際の利用体験を通して、効果的な支援技術の利用に必要な事柄を把握してもらった。本稿では、実施した利用体験の概要と、活用した教材の詳細、ならびに参加者からの感想をまとめることで、同様の体験を各大学でも提供できるようにすることを目的とする。

## 2. 概要

今回の機器操作体験では、「音声認識アプリを使用したグループ内会話」の体験を行った。ここでは、音声認識を活用した会話に、聴覚障害学生が参加しやすくなるためにはどんな工夫や配慮が必要になるのかを、失敗経験をもとに考えてもらうことを目的とした。進行は三好が担当し、本企画講師4名には全体を見回りつつサポート役を担ってもらった。

### 2.1 使用機材

体験で使用した機材は下記の通りである。

- ・音声認識アプリ「UD トーク (Shamrock Records, Inc)」をインストールした iPad
  - ・タブレット接続用マイクロホン
    - ①iRig Mic (IK Multimedia)：タブレットの音声端子に直接接続
    - ②AmiVoice Front WT01 (株式会社アドバンスト・メディア)：タブレットと Bluetooth 接続
    - ③補聴援助システムのロジャータッチスクリーンマイク (Phonak) をマイクロホンとして使用し、ロジャーマイリンク (Phonak) を受信機として利用し変換アダプタ・音声ケーブルを介してタブレットに接続
  - ・インターネット接続用のモバイル WiFi ルーター
  - ・マルチトーカーノイズ再生用 iPod shuffle・イヤホン
- ※マルチトーカーノイズ音源は PEPNet-Japan 事務局より提供可能

## 2.2 グループ構成

参加者約 60 名を 8～9 人ずつの 7 グループに分けて、体験を進めた。グループ内ではディスカッションも行うことから、情報保障を利用する参加者への配慮として文字通訳付グループを 1 つ、手話通訳付グループを 2 つ設けた。おおよそのグループの位置をスライドに提示して移動を促したが、参加者の円滑な移動が難しかったこともあり、司会のほうで声掛けを行いながらグループに分かれてもらった。

各グループ内では、さらに「会話に参加する人」を 4～5 人、「会話の様子を観察する人（観察者）」を 4～5 人と役割を分けて体験を進めた。聴覚障害のある方は「会話に参加する人」に積極的に参加してもらうように声掛けを行った。この際にも初対面の参加者同士ではすぐに決めることが難しかったため、決まっていなかったグループについては司会のほうで役割を決めた。

グループ内の役割のうち、「会話に参加する人」の中からさらに難聴のシミュレーションとして「ノイズ音声を聞きながら会話に参加する人（ノイズ体験者）」を決めてもらった。この体験をしている人は会話音声の聴き取りが困難な状況になる。また、「会話の様子を観察する人（観察者）」は、グループ内会話の様子や字幕を観察して記録する役割を依頼した。

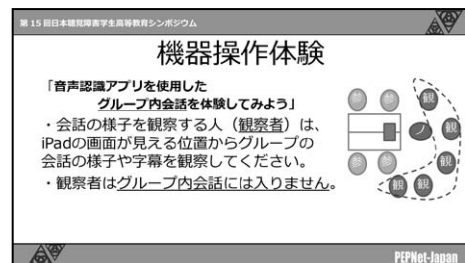


図 1 機器操作体験

## 2.3 グループ内会話体験

会話体験は約 45 分のスケジュールを予定し、以下の構成で実施した。

< 1 回目 >

- ・会話テーマの選択
- ・グループでの会話体験（8 分間）
- ・評価シートへの記入（3 分間）
- ・会話体験者同士での評価や感想の共有（5 分間）
- ・うまくいかなかった点の整理と、どんな改善をすることでノイズ体験者や聴覚障害当事者が会話に参加しやすくなるのかの相談（3 分間）

< 2 回目 >

- ・会話テーマの選択
- ・グループでの会話体験（8 分間）
- ・評価シートへの記入（3 分間）
- ・グループ内での評価や感想の共有（2 分間）

< 全体 >

- ・各グループで出された感想の共有



図 2 機器操作体験の様子  
(写真)



それぞれのポイントを概説する。

会話テーマの選択については、会話体験をいきなり開始しても初対面同士での会話は難しいことが想起できたため、あらかじめ会話テーマを準備し、グループごとに選んだ内容で会話を進めてもらった。また、ある程度のテーマが共有された中で会話を進めることで、表示される音声認識結果の誤変換についても類推しやすくなることを期待した。テーマは誰もが会話に入りやすいように、下記の内容を準備した。

自己紹介をしましょう／好きなテレビ番組について／好きなコンビニエンスストアは？／好きな食べ物を熱く語ろう！／出身地の名産品・観光名所紹介／思い出に残っている旅行先／海外旅行に行くならどこ？／オススメ文房具を紹介しよう／オリンピック 注目の競技は？

グループでの会話参加者に対しては、iPad に表示される音声認識結果の字幕や筆談・音声など様々な方法を用いながら会話に参加してもらうように促し、必要に応じて座席の調整をして欲しいことも伝えた。また、会話終了後には評価シート（133 ページ参照）を用いて振り返りをする事も周知した。

観察者に対しては、グループの会話には入らないが、会話の様子を観察して会話がスムーズに進んでいるか、意思疎通を図るために誤字脱字をどう訂正しているか、どんな種類の単語が誤変換されていたかなどを評価シートに記録してもらうように促した。

評価シートは、「音声認識を活用した会話に、ノイズ音声を聞いていた体験者または聴覚障害者が参加できていたか」を評価してもらうために作成し、体験者・観察者ともに同じ項目での記入ができるようにした。振り返りの際に、それぞれの評価内容を比較することで体験の共有を進めやすくすることを目的とした。また、聴覚障害学生自身にも「音声認識の特徴」を把握してもらうことで、活用する際の留意点を意識してもらうことも考慮して作成した。項目の一部を下記に示す。詳細は 133 ページを参照されたい。

- ・文字の遅延はコミュニケーションに支障をきたしていませんか？
- ・ノイズ音声を聞いた体験者も、会話に参加できていましたか？
- ・どんな喋りかたの時に、文字はうまく表示されていましたか？

グループ会話中は、音声認識技術の円滑な活用方法について事例紹介で把握していたことから、各グループともに音声認識ができるようにマイクを回して発言する、ゆっくりはっきり発音するなどの工夫をしながら、会話を進めていた。中には笑いが生じるほど盛り上がっているグループもあった。文字通訳付のグループでは、字幕スクリーンの前に座席を設け、その後ろに入力者が並ぶ方法で会話の内容を観察者に伝えられるよう文字にしつつ

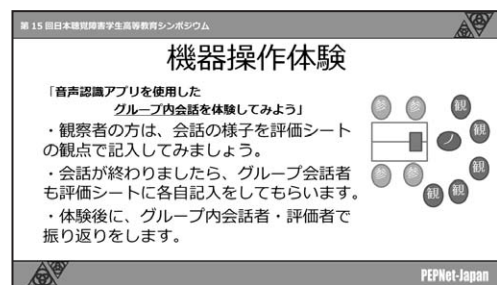


図3 機器操作体験

進めた。また、手話通訳付のグループでは参加者の発話を同時に手話通訳を行うことで、音声認識で表示される文字との比較をしながら観察していた。

グループによってはマイクがうまく認識されずに文字化されない、インターネット接続が不安定になるなどトラブルが生じていたが、複数台を同時に運用していることにより様々な要因の混線が生じていたものと思われる。

### 2.4 グループ会話の評価シートから

各グループでの体験を通して、「グループ会話体験者」「観察者」それぞれの立場から得られた感想を以下に記載する。

#### 2.4.1 1 回目の体験から

##### 【グループ会話体験者】

- ・周りの（健聴の）学生の協力が不可欠。利用学生だけが認識結果を見るのではなく、他の学生にも見えるようにするのは効果的だと感じた。
- ・ゆっくり、はっきり話すと文字表示が上手くでき、コミュニケーションもスムーズだった。
- ・ノイズ体験の役割になり、聞こえない人がグループの会話に入ることに難しさを感じた。
- ・ノイズ体験をして、きこえない不安や伝わる喜びが体験できた。
- ・ノイズがあると文字にしか頼れないので、誤変換のため理解できないまま話が進んでいくのが不安感を生んだ。
- ・普段の早口の会話だと文字変換は難しい。
- ・普通に話が出来なかった。
- ・アイコンタクトがなくなった。
- ・話の内容を文字にすることに集中してしまい、「あと 8 分」などの情報を伝え忘れてしまっていた。
- ・機器のトラブルに備えて使い方を学んでおかななくてはならないと思った。



図 4 機器操作体験の様子  
(写真)

##### 【観察者】

- ・マイクを持っている話者以外の人が話すと、ノイズ体験者は状況把握が困難な様子。
- ・マイクが口から離れていると、正確な音声認識が難しくなっていた。
- ・修正が入らないと会話のテンポが遅い。
- ・画面を見ながらの会話になるので、相手が顔を見て話してくれているのに、もったいないと思った。





#### 2.4.2 2回目の体験から

##### 【グループ会話体験者】

- ・相手の顔ではなく画面を見ながら話してしまった。
- ・ノイズ体験者は疎外感があることがわかった。
- ・理解できているのか出来ていないのかが分からない。
- ・会話の内容が盛り上がってくると会話のスピードが上がり、誤変換が増えていた。
- ・特に意識せず普通に話すと誤変換が多いことに気付いた。
- ・ネットワークが安定していることが前提だと分かった。挙手したり、文字の認識のスピードを考えたりすることで、みんなで会話できた。
- ・マイクを複数用意して、切り替えながら発言できれば良いと思った。

##### 【観察者】

- ・2回目は誤字があっても協力しあえて楽しく会話できていた。
- ・周りが頷いてあげると、認識結果が正しいと分かる。
- ・会話の内容だけでなく、楽しい雰囲気も大事。
- ・使いこなせるようになれば、便利に正確に大量の情報を伝えられるなどと思った。
- ・理解できているかどうかの確認は文字ではなく、本人に確認が必要ではないか。頷きやアイコンタクトがあるとわかりやすい。

#### 2.5 体験者からの感想

今回は時間が迫っていたこともあり、体験それぞれの時間を十分に設けることができなかったが、最後に「ノイズ体験者」からの感想を全体で共有した。

A/時間が迫っているということで、グループの他の人たちはとても慌てていたが、私だけがその状況が分かっていなかった。時間や話の流れなどは、1つ1つ区切りをつけて示したほうがいいのかと思った。(大学職員)

B/このノイズ体験は聴覚障害の人の聞こえにくさの疑似体験だとした場合、今の場合だと取り残されていることを感じた。会話に参加しようとする、一生懸命に話者の顔を見なくてはいけない。文字が出てくるが、その内容が正確でなかった場合にも場を止めて言うのもなかなか難しい。聞こえにくい立場になって、聞こえにくさを意識して配慮をするのか、教員自身も考えなくてはならないことを実感した。(大学教員)

これを受け、以下のコメントが三好からなされた。

ご指摘の通り、音声認識でサポートをしようとしても、どうしてもサポートしきれないところがあり、「配慮を」という気持ちを、できることなら自然な会話にもっていきたい。聞こえない方々も含めて活気ある会話に入れてあげたいと思いながら、でもそうすること



で、逆に会話から置いていくような形になってしまう。また、話者交替のタイミングも難しかったのではないだろうか。

具体的な方法としては、字幕と一緒に見ているからこそ誤字脱字等に気がつくことができるので、発生した文字のエラーを共有する。そしてそのエラーにどう対応しようかと考えていくことになる。誤字脱字が出た時、どうやって直したら良いか、手話で話す・メモで補う、又はそういうのはちょっと面倒だから言い直して頑張る、などいろいろな方策があると思う。

例えば手書きノートテイクをする場合は、特別な技術はあまり必要ではないが、書き続けなければならないことで人の負担が大変多くなる。それに比べると、音声認識であれば、人の負担がちょっと軽くなる、でも誤字脱字が多く出てしまうので修正作業は必要。では技術的にもっと工夫をしてみよう、と考えてノイズができるだけ入らないようにマイクを使う。それにより隣の人の声も入らなくなり、少し人の負担が減る。こうした工夫を加えることでどんどん楽になるが、やはり話者交代への配慮や誤変換を気にすることなどから自然な会話が続かなくなり、場合によっては孤立感を深めていく。だからこそ、技術を使いながらも、「配慮する気持ち」は取り除いてはいけないものだと思っている。音声認識を使えば「配慮する気持ち」をも取り払えるという幻想を持たれてしまっている印象を受けるので、その部分を大事にして活用して欲しい。

### 3. まとめ

今回の体験では、支援技術を円滑に活用するためのシステム面での工夫という点だけではなく、「ノイズ音声体験者や聴覚障害学生が会話に参加できていたか」という視点を持って進めたことで、システム特有の課題だけでなく会話に参加する人がどのような意識を持ち、工夫をすることでより活用の幅が広がるのかを体験・観察してもらうことができたと思う。体験者からの感想にもあるように、周囲の配慮があつてこそ支援技術はより有効に活用できるものであることが共有できるような働きかけとともに、活用場面が広がっていくことを期待したい。

尚、今回は時間の関係上グループ内会話体験の時間を十分に設けることができなかったが、体験者・観察者の役割を交代して体験の共有をするところまで実施できることが望ましく、その場合には 2 時間程度の時間を要するものと思う。各大学で同様の体験をされる場合の参考にして頂きたい。





参考：当日資料（スライド等）

第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 前日特別企画2作成「評価シート」  
 音声認識を活用した会話に、ノイズ音声を聞いていた体験者または聴覚障害者が参加できていたかを評価してください。  
 体験者・観察者ともに、以下の視点で評価してみてください。体験後に皆さんの評価を比べてみます。

【あなたの役割は？】 グループ会話体験者・観察者 / 【あなた自身の聴覚障害の有無について】 あり・なし

	体験1	体験2
1. 文字の遅延はコミュニケーションに支障をきたしていませんか？		
2. 話者交代のタイミングはスムーズでしたか？		
3. ディスカッションの進行は自然でしたか？		
4. ノイズ音声を聞いた体験者も、会話に参加できていましたか？		
5. どんな種類の単語が誤変換されていましたか？		
6. 誤字脱字が出ないように、どんな話し方をしていましたか？		
7. 意思疎通を図るために、誤字脱字の訂正はどのように行っていましたか？		
8. どんな喋りかたの時に、文字はうまく表示されていましたか？		
9. 文字表示がうまくいっていなかった時は、どんな喋りかたでしたか？		
10. 体験を通して気づいたこと（自由にご記入ください）		

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

【前日特別企画】  
支援技術のさらに効果的な利用に向けて  
—活用事例紹介・利用体験を通して—

機器操作体験

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

【目的】音声認識を活用した会話に、聴覚障害学生が  
参加しやすくなるためにはどんな工夫や配慮が必要に  
なるのかを体験する。

【使用機材】グループごとにiPad 1 台／マイク 1 台

PEPNet-Japan


第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

【グループ構成】

- ・近くのテーブルで8～9名のグループ  
になってください
- ・情報保障が必要な方は、前方の文字通  
訳付グループ、手話通訳付グループに  
入ってください。



PEPNet-Japan

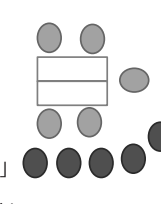
第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

【グループ構成】

- ・グループの中で、  
**会話に参加する人：4～5人**  
会話の様子を**観察する人：4～5人**  
に分かれてください。
- ・聴覚障害学生も、ぜひ「会話に参加する人」  
に入ってください。
- ・会話に参加する人だけが、着席してください。



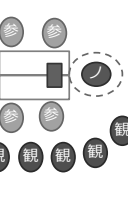
PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・会話に参加する人の中で  
**ノイズ音声を聞きながら会話に参加する人**  
(ノイズ体験者)を1人決めてください。
- ・ノイズ体験者も見やすい位置に、iPadを  
置きましょう。



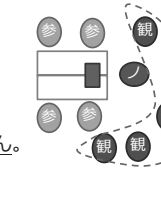
PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・会話の様子を観察する人（**観察者**）は、  
iPadの画面が見える位置からグループの  
会話の様子や字幕を観察してください。
- ・観察者は**グループ内会話には入りません。**



PEPNet-Japan

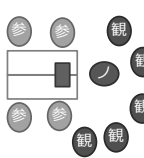


第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・これから 1 回目の会話のテーマを選んでもらいます。
- ・グループ内会話参加者の皆さんは、音声認識用のマイクを使用しながら楽しく会話をしてください。ノイズ体験者・聴覚障害当事者の方も積極的に会話に参加してください。



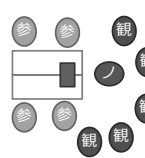
PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・手話通訳付・文字通訳付グループの聴覚障害当事者の観察者のかたは、iPadに表示される文字と会話内容を比べて見てみましょう。グループ会話参加者は、iPadの字幕だけを見て会話に参加してください。
- ・発言の方法は筆談や音声など、いろいろ工夫してみてください。



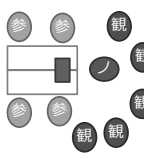
PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・観察者の方は、会話の様子を評価シートの観点で記入してみましょう。
- ・会話が終わりましたら、グループ会話者も評価シートに各自記入をしてもらいます。
- ・体験後に、グループ内会話者・評価者で振り返りをします。



PEPNet-Japan

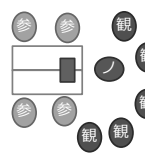
第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・それでは、ノイズ体験者はイヤホンをつけてください。

会話時間は**8分間**です。  
始めてください！



PEPNet-Japan

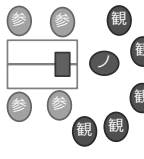
第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

時間です！会話を終わりにしましょう。  
イヤホンを外してください。

- ・参加者の皆さんも、評価シートに記入をお願いします。



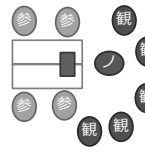
PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

## 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・5分間で皆さんの評価や感想を共有しましょう。



PEPNet-Japan

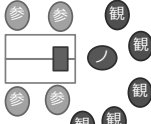
第 15 回日本聴覚障害者学生支援教育シンポジウム

# 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・では2回目の体験を始めます。
- ・その前に、1回目の体験の評価をもとに、どんな改善や工夫をすることでノイズ音声体験者や聴覚障害当事者の方が会話に参加しやすくなるか、相談してください。

参加者・ノイズ体験者・観察者の役割は変えません。 相談時間は**3分間**です。



PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害者学生高等教育シンポジウム

# 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・では、2 回目の会話のテーマを選んでもらいます。
- ・話し合った改善点をふまえて、楽しく会話をしてください。
- ・観測者のみなさんも、1 回目との違いや気付いた事を評価シートに記入してください。

PEPNet Japan

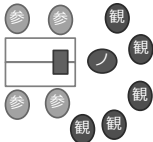
第 15 回日本聴覚障害者学生高等教育シンポジウム

# 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

- ・それでは、ノイズ体験者はイヤホンをつけてください。

会話時間は **8 分間** です。  
始めてください！



PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害者学生高等教育シンポジウム

# 機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

時間です！会話を終わりにしましょう。  
イヤホンを外してください。

- ・参加者の皆さんも、評価シートに記入をお願いします。

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害者学生高等教育シンポジウム

機器操作体験

「音声認識アプリを使用した  
グループ内会話を体験してみよう」

・ 2 分間で皆さんの評価や感想を共有しましょう。

PEPNet-japan

第15 回日本聴覚障害学生高等教育シンポジウム

機器操作体験

【目的】音声認識を活用した会話に、聴覚障害学生が参加しやすくなるためにはどんな工夫や配慮が必要になるかを体験する。

- ・どんな技術も話し方や会話の進め方に配慮をしなければ、スムーズに使いこなすことは難しい
- ・聴覚障害学生自身も、どんな配慮を求めることで支援技術を有効に活用できるのかを知っておくと、活用の幅は広がっていく

PEPNet-Japan





## 「先輩から学ぼう！—大学での学びとキャリア形成—」 ワークショップ報告

日下部隆則<sup>1)</sup>，阪田真己子<sup>1)</sup>，井坂行男<sup>2)</sup>，廣田喜春<sup>3)</sup>，志磨村早紀<sup>4)</sup>，  
濱松晃大<sup>5)</sup>，中島亜紀子<sup>6)</sup>

同志社大学 学生支援センター 障がい学生支援室<sup>1)</sup>  
大阪教育大学 教育学部<sup>2)</sup>，公益社団法人大阪聴力障害者協会<sup>3)</sup>，元早稲田大学<sup>4)</sup>，  
関西学院大学 3年<sup>5)</sup>，筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター<sup>6)</sup>

**要旨：**聴覚障害学生が多様な学部にて在籍して学び、さまざまな職種に就くようになった一方、進学を控えた高校生や大学に入学したばかりの学生が自身の障害とどのように向き合い、進路を定めていくかについて考える機会は乏しい。そこで、聴覚障害学生が社会人の先輩から経験や思い、生き方について話を聞く機会を設け、それをもとに自身のキャリアプランを具体的に描くワークショップを実施した。当日は特に質疑応答の時間を重視し、参加者からの質問をできるだけ多くすくいあげ複数名の講師が回答することによって、多様な背景を持つ参加者が多角的な考え方やロールモデルの姿に触れる機会を提供することができた。

**キーワード：**聴覚障害学生支援，キャリア形成，ロールモデル

### 1. はじめに

本企画は、主に聴覚障害学生を対象に、キャリア形成をテーマとした分科会として実施した。聴覚障害学生が自身の障害と向き合い、キャリアについて考える際、同じ聴覚障害当事者の先輩の経験や生き方から学ぶところは大きい。今回の企画では、学年や専攻、コミュニケーション手段や聴力など多様な聴覚障害学生一人ひとりが、自身の抱える悩みや課題について少しでもヒントを持ち帰れるよう、企画・進行において以下の点に留意した。

#### 1.1 リレートーク

先輩からより若い世代へのアドバイスのリレー、あるいは若い世代から先輩への質問のリレーを意識し、高校生・大学生・社会人としての仕事・子育てという流れで話が聞けるようにした。社会人は世代やコミュニケーションタイプの異なる 2 名を招き、高校生については当事者ではなく教育・支援に携わる立場の講師が語る形とした。大学生については成功体験だけでなく、悩みも含め在学中の自身の経験や変化を率直に語ってもらった。

#### 1.2 質問コーナー

参加者（特に聴覚障害学生）が遠慮せず質問を出せるよう、質問カードを配布し、講演の後に回収して、司会者がとりまとめて講師に尋ねる方法を採用した。質問カードは匿名でも可とし、回答する講師を指名したい場合は記入できるようにした。当日はフロアから挙



手で質問を募る機会も設けたが、手を挙げたのは教職員等のみであった一方、カードでは学生からと思われる無記名のものを含め 20 以上の質問が寄せられた。

## 1.3 ワーク

講師の話からヒントを受け取った後、自分自身の具体的な将来像や行動計画に目を向けられるよう、「10 年後のわたし」というワークシートを用意した。このシートは聴覚障害学生エンパワメント研修会（PEPNet-Japan,2013）で用いたワークシートをもとに、学年を問わず短時間で記入できるシンプルな様式と支援者用の様式を本企画用に作成した。当日は 10 分程度の時間を設け、参加者各自がリレートークの内容を振り返りながら記入した。

## 2. 内容

### 2.1 リレートーク（司会：阪田真己子（同志社大学））

#### 2.1.1 高校生の声①（講師：中島亜紀子（PEPNet-Japan 事務局））

PEPNet-Japan 事務局に寄せられる中高生やその保護者からの相談として、「支援体制が整った大学を教えてください」「入学が決まる前から支援の相談をしてもいいのか」といった例を紹介。支援の有無でなく、自分のやりたい事ができる大学かという視点で志望校を選んでほしいし、また、大学でやりたいことを実現するためにはどんな支援が必要なのかということ、ぜひ自ら発信してほしい。

#### 2.1.2 高校生の声②（講師：井坂行男（大阪教育大学））

##### **大学とはどのような場か**

事務局からの報告を踏まえ、ろう学校教員の経験、そして現在大学で聴覚障害教育の研究に携わる立場から、皆さんに思いをお伝えしたい。

まず大学生の皆さんへ。大学はみずからの適性に応じて学びたいことを積み上げ、将来の自分を構築するための歩みを進めていく場。自分だけでなくさまざまな関係者や友達と歩いていくことになる。ただし、障害者差別解消法が施行されたとはいえ、障害学生支援の経験がまったくないという大学もある。皆さんにとって大事なものは、大学と建設的な対話を進めること。更に対話をする上では、上手に交渉していくことと、自己分析をして必要な支援が何かを考えることも必要とされる。交渉術としては「スモール・イエス」、つまり最初から大きな目標を達成しようと交渉しても難しいので、相手側に少しずつ納得してもらう方法なども、ぜひ学んでいただきたい。

##### **大学の学びと情報保障**

大学での授業は、教養教育から専門教育に進んでいくにつれて、少人数になり、専門性が高まり、それに伴って授業形態も、プレゼンテーションやディスカッションなど、集会的な対話型になっていく。つまり、大学で 4 年間学んで行く中で、どのような情報保障が必要なのか、参加のあり方とは何か、ということ、皆さんからその場の関係者に伝え求めていくことは欠かせない。





## 情報保障から社会参加へ

今、教育の方法として、「主体的」「対話的」「アクティブラーニング」といった視点が重視され、集団での議論や情報交換を通してより多くを学ぶ姿勢が、求められている。これは、Society5.0、超スマート社会、AI 社会など世の中が変化していくことに伴い、人間の強みを生かし対話の中から何かを創造する力が求められることとつながっている。

このような社会で自立するために、皆さんは、情報保障やコミュニケーションを自分から引きつけていく必要がある。そうでないと、共に働く中で自分の力を活かすことが難しくなってしまう。今日はぜひ、協働し対話しながら新たなものを創出していく、そんな将来の姿を描きながら参加していただきたい。

### 2.1.3 聴覚障害学生の声（講師：濱松晃大（関西学院大学 学生））

#### 自己紹介

私は関西学院大学総合政策学部国際政策学科の3年生。生まれつき耳が聞こえず、幼稚園時代は言語訓練に通い、その後はろう学校の小学部を経て、もっと新しい環境にチャレンジしようと受験をして中高一貫校に進学した。大学でこの学科を選んだ理由は、以前から国際協力やソーシャルビジネスに関心があり、フィールドワークでたくさんの人と交流したいと思ったこと。独自の英語教育プログラムで、週4回ネイティブスピーカーによる授業があることも魅力の一つだった。



図1 筆者（濱松）  
（写真）

#### 情報保障の必要性

関西学院大学では、支援室の方と個別に相談した上で支援方法を決定している。実は高校までは支援を受けた経験がなく、大学でもなんとかできるだろうと思っていた。しかし、大学では先生の口形を読み取ることは難しく、学ぶためにはサポートが不可欠だと感じるようになった。現在、ふだんの授業ではパソコンノートテイク2名とノートテイク1名の体制で、基本的にすべての授業に情報保障をつけている。

#### ゼミでの情報保障

3年生からゼミが始まり、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションの機会が増えた。パソコンノートテイクの支援だけでは限界があり、どのような配慮があれば授業に参加できるのか、ゼミの先生と相談を重ねた。その結果、ゼミ生全員で議論を交わすのではなく、小グループに分かれて話す方法に変えてもらったり、ブギーボードを使って筆談しながら話したり、発言の際は必ず挙手するというルールを作った。

#### 海外でのフィールドワーク経験

また、ゼミの先生の専門が国際協力なので、海外研修にも参加した。フィリピンの農村部に行って、現地の人にインタビューする活動だったが、その時にどうコミュニケーションをとるか事前に考え、自己紹介カードを作っておいて耳が聞こえないことを伝えるように

した。初めて会う人にはカードを見せてからやり取りを始めたが、もちろん英語力も必要とされる。筆談を交えながらコミュニケーションすることで、さまざまな経験を得ることができたと思っている。

### 英語の授業での情報保障

ネイティブスピーカーによる英語の授業では、相談を重ねた結果、情報保障のサポートを受けないという選択をした。授業は少人数制でペアワークが多く、サポーターが入るとどうしてもペアの学生との間に距離ができてしまう。代わりに、「ペアの学生にあらかじめ聴覚障害について説明する」「先生へ定期的に質問に行く」「多少わからなくても気にしない」「リスニングは免除してもらい代替授業を受ける」といった工夫をして進めている。

### 情報に対する考え方の変化

以前は、すべてのことをきちんと理解しなければならないと思っていた。でもいつからか、「聴者も常に 100%の情報を得ているわけではなく、文脈や雰囲気からなんとなく察してコミュニケーションをとることもあるらしい」と気づき、多少わからないことがあっても気にしないという態度で臨めるようになった。それで随分気が楽になったと思う。

### 「自分らしい助けられ方」とは

大切なのは、学びたいことややりたいことがある時、諦めてしまうのではなく、どういう支援があればそれが達成できるかを考えること。そして、状況に応じて最良と思える方法を主体的に選択すること。たとえば英語のクラスでは、情報保障をつけなかった結果、同級生たちとのつながりが深まり、良好な関係を結ぶことができたと思っている。関西学院大学は情報保障の面で大変恵まれているのだと思うが、支援メニューにあるから使うのではなく、自分のニーズに合わせて選択していくべきだと思う。

### 先輩に聞きたいこと（就職に向けて）

いま不安に思っているのは、就活と進路に関すること。職場では、自分の希望を伝えることがわがままと捉えられてしまうのではないかと、聴覚障害という自分の特性とどう向き合えばよいのか、聞こえのことをどう説明してコミュニケーションをとればいいのか、耳が聞こえないことで業務が限定的になるのではないかと……。そうしたことについて、先輩方からぜひ話をうかがいたい。

#### 2.1.4 社会人から①（講師：志磨村早紀（元早稲田大学障がい学生支援室コーディネーター））

##### 自己紹介

今年の 9 月まで早稲田大学の障がい学生支援室でコーディネーターをしていた。出身は宮崎で、小学校から高校まで地域の学校に通い、早稲田大学を卒業後、国立障害者リハビリテーションセンター学院（国リハ）の言語聴覚学科で 2 年間勉強した。

保育園に通っている頃から右耳が聞こえにくいと自覚していたが、ある程度聞き取れるので周りには言わず過ごしていた。ある

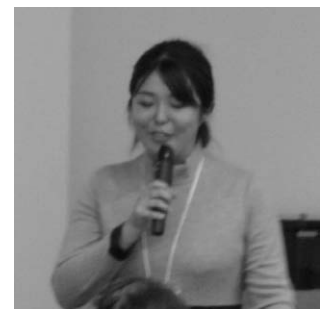


図 2 筆者（志磨村）  
（写真）



時、妹とケンカをして負けそうになり「私きこえないんだからね！」と言ったのを親が聞いて、初めて病院に行って聴力検査をした。右耳は 90dB、左耳も 45db の軽い難聴とわかったが、言語訓練や補聴器というアプローチはなく定期的に検査を受けることになった。

### 言語聴覚士との出会い

中学校 2 年生の時、東京の病院に行って初めて言語聴覚士の先生に会った。それまで、聞こえないのは自分が悪いと思っていたが、難聴のことを理解してくれる人がいると知り、「聞こえなくてもいいんだ」と心を救ってもらったような気がした。この出会いに感銘を受け、自分も言語聴覚士を目指すようになった。

### 進路決定

高校で進路を考えている時点では、言語聴覚士の養成課程のある大学に進むか、大学を卒業してから専門学校に行くか、選択肢は 2 つあった。いろいろな人に相談し、聞こえない当事者の自分がいきなり養成課程に入るより、まずは広い世界を見たほうがよいという助言もあって、早稲田大学に進んだ。

### 志望校の選び方

志望大学を考えると、支援体制の有無については考えなかった。が、早稲田の支援室で働いていたときは、入学希望の高校生のほとんどが、「支援体制が整っているから見に来ました」と言っていた。その評判はありがたく、充実した支援に魅かれるのはよくわかると思う一方、「やりたいことがあるからこそサポートが大事になるはずなのに…」と思っていた。実際、私は勉強よりもライフセービングのサークル活動に夢中になり、その後、国リハでは逆に勉強漬けの日々を送った。

### 自分らしい助けられ方とは

そもそも人間は支え合って生きていて、聞こえない人が助けられるばかりではない。大学のサークルでは聞こえなくてできないことがたくさんあったが、自分の強みは何かを探そうにしていた。「助かった」「志磨村がいないと無理だった」と言ってもらえたことが、自分も何かを還元できると思える経験になった。

理想は、「道で前を歩いている人がハンカチを落としたら拾う」くらいの感覚。見えない人がいたら手を引いて一緒に歩くとか、車椅子の人がドアの前にいたら開けてあげるといったことがハンカチを拾う感覚でできたら、社会はもっとよくなると思う。

### 支援者との関係性（大学）

年配のベテランティーカーや大学院生が支援に入ると、どうしても周りの学生との間に壁ができてしまい葛藤を感じたこともあった。「高校までと同じく自分の耳で聞いてできる」という思いもまだあった。しかし実際には、パソコンの画面には私の聞こえていない情報が入力されていたり、支援者がサッと書いてくれてわかることもあって、自分にも支援が必要だと思うようになった。支援を「受ける」のではなく支援を「使う」と考え、どうしたらもっと良い支援にできるか支援者と一緒に考えるようになった。こうした経験を通し、あくまでも主体は自分だという意識が持てるようになった。

### 支援者との関係（国リハ）

国リハでは文字通訳の支援がなかったが、30 人のクラスメイトの間で、聞こえないことへの理解がどんどん深まったことは救いだっただけ。FM マイクを持っていない人が発言したら、隣りに座った人が書いて伝える」という暗黙のルールができ、グループワークではまず聞きやすい場所を選ぶ、飲み会は個室にするなど、私が情報を得やすい環境を話し合いながら作ることができた。支援体制がなくても環境一つで自分の生きやすさが変わること学んだ 2 年間だった。大切なのは人と人との関係性で、対等でありたいからこそ、どうしてもしたら気持ちよく支援してもらえるか想像を働かせるのだと思う。

### トリセツづくり

聴覚障害にどう向き合うかについて、私の場合は自分の取扱説明書（トリセツ）を作った。国リハの卒業研究でまとめた内容を最初の職場に持っていったが、専門的すぎて知識がないと読めないと言われた。それで、誰にでもわかりやすく聞こえについて伝えるため、聴力レベルを数字で表すのではなく「これくらいの音は聞こえにくい」「声で話しているけれど実は聞こえない」「手話があると分かりやすい」といった書き方に変更した。

### 自分を知ってもらうための工夫（トリセツ以外）

自分が何者なのかを必要に応じて開示することは、障害の有無に関わらず大事なこと。お酒を飲んだり、仕事の合間に世間話をしたり、一緒にいる機会を増やして、「志磨村はこういうとき聞こえないんだ」ということわかってもらうようにしている。また、働きながら気づいたことはトリセツの内容に反映し、アップデートしている。

### 聴覚障害当事者に求められること

「仕事は楽しいが理解のない人が一人いる」ということはよくあるが、自分としてはそこに負けたくない。その「一人」にどう理解してもらうかという姿勢が、いまの当事者には求められるのでは。一緒にいい社会を作れるように私も頑張っていきたい。

#### 2.1.5 社会人から②（講師：廣田喜春（公益社団法人大阪聴力障害者協会））

### ロールモデルとろう者コミュニティ

私はろう者の両親の元に育ち、今は 3 人の子どもを持つ親でもある。私にとって父は、親であると同時にろう者の先輩という二つの側面をもつ存在だったが、私が大学 3 年の時に父は亡くなった。葬儀では読経の声も自分には聞こえず、その場から切り離されたような気持ちがしていたが、父の聞こえない仲間がたくさん参列してくれて、生前の父との関係などを私にいろいろ話してくれた。それで、「自分は一人ではない、聞こえない人々の中に自分のコミュニティがあるのだ」と初めて気がつくことができた。みなさんにも、きっとたくさんの仲間がいる。ろう者のコミュニティは小さいからこそ、横のつながりを持ってほしい。



図 3 筆者（廣田）  
（写真）





### 情報の取り方、人との接し方

私が聞こえなくなった経緯は不明だが、生まれたときからずっと両親の手話を見ていて、情報はすべて目で見て得るのが当たり前の環境で育った。子ども時代の通信手段は FAX で電話リレーサービスなどなかったが、どんなに便利な通信方法があったとしても、わからない事をそのままにせず自分の足を使って直接人に会い、積極的に情報をつかんでいくことが大切だと思っている。

### 子ども時代のコミュニケーション環境

小学生の頃の私は、勉強が嫌いでおしゃべりが大好きだった。地域の学校に行くことを勧められても、友達と話がしたくてろう学校を選んだ。生きるためには知恵も必要で、「成績が良いのだから地域の学校に行ったらどうか」と言われても、知識ばかりを詰め込むことにどんな意味があるのだろうかと感じ、結局、高等部までろう学校に通った。

### 大学で支援を求めて

その後、大学に進学した。当時はろう者が大学に入る例はまだ少なく、受験を断られることも珍しくなかった。今は障害者権利条約の批准、障害者差別解消法といった法整備があり、大学でも合理的配慮が提供される時代だが、当時は「聴覚障害者は無理」と言われることもあった。そんな中で一人の力で動くことは難しく、情報保障を求めて大学と話合う時は障害学生に同席してもらっていた。情報保障の体制ができて、ろう学生が卒業すると立ち消えてしまうのが常だったので、今 PEPNet-Japan のような大学同士のネットワークがあるのは、本当に素晴らしいと思っている。

### 自分から動くことの大切さ

これまでの経験から実感していることの一つは、できることとできないことをきちんと整理し、自分から積極的に動くことの大切さ。人に尋ねるのが苦手な人もいるかもしれないが、「耳で聞くことはできなくても質問することはできる」と思ってどんどん質問したほうがよい。

### 人と直接会うことの大切さ

二つ目は、直接人に会って話すことの大切さで、人とのつながりがあってこそ、その先がスムーズに進むことがある。仕事ではメールのやり取りが中心で、人と会う場面は減っているのかもしれないが、直接話すことで人間関係ができ、うまくいくことが必ずある。

### 夢を持って豊かに生きるために

日本では、法の下での平等や教育を受ける権利などが憲法に記されていて、それに関わるさまざまな法律も整備されている。しかし、そんな社会の中にもおかしいと感じることがあったら、自分たちの力で変えていかなければならない。手話言語法や情報アクセシビリティに関する法整備もまだこれからの段階。自分たちの力で、豊かに生きることができ、皆が夢を持って生きられる社会にしていけたらと思う。



## 2.3 質問コーナー

講演の後、質問カードで寄せられた質問を司会者が整理し、講師陣に投げかけた。各講師から、前半の講演内容に絡めながら示唆に富む回答をいただいた。以下、質疑応答の様子を掲載する。



図 4 筆者（廣田、濱松、志磨村、井坂、日下部）  
（写真）

### 【質問 1】

大学を選ぶ要因について、「支援体制がある」という理由で大学を選ぶ人の割合は何%くらいでしょうか。また、自分のやりたい事を第一優先で選ぶ人はどれくらいでしょうか。

井坂／大阪教育大学の場合は教員養成の単科大学なので、受験生も「教員を目指す」ということがある程度ははっきりしていて、大学での支援もある程度イメージできているように思う。むしろその先の、「教員になったときに本当に仕事ができるのか？」という問合せの方が実際には多い。

志磨村／数でははっきり答えることはできないが、早稲田大学での経験で言うと、オープンキャンパスや個別相談に申し込む高校生のほとんどが、支援体制が整っていることを志望理由として挙げていた。自分が何をしたいか突き詰める段階にまだ至っていないのではないかと、自分の興味よりもまず安心して学べる場所を選んで居るように感じた。

また、支援体制に関する情報は特別支援学校の生徒さんのほうがたくさん持っていて、勉強したいことを明確に持っている人は地域の学校の方に多かった印象がある。教育背景によっても、大学の選び方に違いがあるのかなと思っていた。

司会（阪田）／本テーマの企画コーディネーターの日下部さんは民間企業を経て、現在は同志社大学の支援コーディネーターだが、仕事を選ぶときに支援の有無や障害のことをどう考えられていたか。

日下部／私は、支援がある大学を選ぶという考えには否定的。それは突き詰めると、「支援があるからこの会社に行く」あるいは「手話を理解してくれるからこの人と結婚する。」ということになってしまう。実際、自分のやりたい仕事が一番はじめにあるべきなのに、





就職活動で企業に対していきなり「どんな支援がありますか」と聞いてしまう障害学生は結構いるようだ。企業側から見れば「この学生は入社して一体何がしたいのだろう」ということになってしまう。大学に入るときは支援を理由に選んだとしても、卒業するときまでには、「自分がやりたいことをやるために支援が必要だ」という考え方に修正していったほしい。卒業、つまり出口までサポートするのが私達の仕事だと思っている。



図5 筆者（阪田）  
（写真）

司会／数字で回答するのは難しい質問だったが、少なくとも3名の講師からは、支援の有無よりもまず、自分は何をしたいのかを考えてほしいというメッセージだった。

### 【質問2（濱松さんへの質問）】

自分で選択した支援の例として、英語の授業の情報保障をやめたという話がありました。ベストだと思う方法を主体的に選択する時、支えとなった体験や環境要因はありましたか。

濱松／これという一つの体験ではないが、高校時代に経験したことが大きいと思う。英語教育に力を入れている学校だったが、わからなくてそのままにしていると、「どうしたら良いか」と先生のほうから心配して声をかけてくれた。たとえばリスニングのときには、先生と一対一ですればいいのか？紙を出して文字で読むほうがいいのか？と、いろいろな方法を考えて提案してくれた。そこでいろいろな選択肢があると知ることができたので、大学に入ってからたくさんの選択肢から選ぶという考え方ができたのだと思う。

司会／大学に入る前の時期に、周りの方の支えがあったと。志磨村さんは中学時代、まさに人生を変える理解者と出会ったとのことだったが、その出会いがなかったとしたら？

志磨村／そのことは常々考えている。もし聞こえていたら、言語聴覚士の先生と会うこともなく、人生の転機となるような出会いを経験することもなかった。そういう意味では、聞こえなくてよかったと思うくらい、今では社会に貢献できることが持てている。この先生との出会いがなかったら、自分は今もちゃらんぼらんだっただけでは。

### 【質問3】

- 1 コミュニケーションをとってわからないことが出てきたとき、何度も聞き返すべきかどうか大変迷います。
- 2 自分の聞こえ方をどう説明していいかわかりません。長すぎず短すぎず、人に伝えるときに気をつけることや押さえるべきポイントについて、アドバイスをお願いします。
- 3 聞こえないことを説明しても理解してもらえないとき、諦めるべきなのでしょうか。

廣田／大切なことは、相手に関心を持ってもらうこと。「この人から学びたい」「この人と話したい」と思われる存在になることがコミュニケーションの大事な前提だ。たとえば授業の後、わからないところがあると教室に残って、まずどうして自分が居残っているのかを先生にきちんと伝える。自分の存在を知ってもらう努力をする。時間はかかるが「その人と話したい」という気持ちをずっと持ち続けるということだと思う。

濱松／廣田さんのお答えと似ているが、初めから聞こえない事を細かく説明するより、まず自分の存在に気づいてもらうことが大事だと思う。その先に、お互い興味を持つことがあれば自然とコミュニケーションが生まれて、聞こえのことも自然と伝えられるようになるのでは。筆談やジェスチャーなど方法は色々あるが、最初から「聞こえないから自分に合わせてほしい」と伝えるより、その時その相手に合わせるという考えが大事だと思う。

志磨村／ご質問への答えの一つが、私の作ったトリセツだと思う。相手は時間があるときにじっくり読めて、あとで質問してもらうこともできる。一度に全部伝えることは難しく、時間と場を重ねないとわかりあえないこともあるので、トリセツを渡すことは、お互いに気持ちよく最初の場を終えるための方法でもあると思っている。

コミュニケーションを諦める気持ちは私もよくわかる。最近では優先順位をつけるようにして、仕事や子供関係など自分が責任を負うことに関しては絶対に聞こえたフリをせず、納得するまで確認している。

理解のない人は諦めるべきかという質問だが、その相手があなたにとってどれくらい重要な人か、ということではないか。自分の上司なら時間をかけてでもわかってもらうが、一度しか会わない人なら理解されなくても割り切るということも必要だと思う。

司会／講師の方の話は一貫していて、本当に大切なのは何かを考えた上で優先順位をつけている。濱松さんの、「少しわからなくても気にしなくなった」という話とも重なる。

日下部／自分にとって必要なところにはきっちり食いつき、取捨選択をしているということ。取捨選択の一例として、私の場合は手話を覚えるか否かを選択した結果、手話を覚えるのではなく、いろんなジャンルの本を読んで語彙を増やすという選択をした。コミュニケーションの方法として筆談をお願いするが、相手方だけに委ねるのではなく、私としても「書かれたことは全部わかります」と言えるくらいに言葉を増やしているつもりで、それは努力ではなく、自分にとって当たり前のことと思っている。

司会／井坂先生は支援する・されるという両方の関係性を視野に入れた現場におられるが、なにかアドバイスは？





井坂／大学では、支援する・されるの関係性が学生間で生じている。志磨村さんが言われたように、お互いがより良い関係を構築しながら育ち合うために、支援する学生と支援を利用する学生が話し合う時間を持ったり、利用する学生が手話講座の講師を担当したりと、お互いに貢献し合うことを心がけている。関係性は決して一方通行ではない。支援活動に関わる中で双方向の関係性を構築し、学び合うことに意義があると思っている。

司会／「お互いに学ぶ」「お互いに貢献する」「関係性を作る」と大変重要なキーワードが出てきた。志磨村さんのお話の内容とも共通している。

#### 【質問4】

聴者が聴覚障害者に対してできることはたくさんあるのに、私たちからできることは少ないという現実には悲しくなります。みなさんはどう考えていますか？

日下部／少し悲しい質問ですね。「自分にできることが少ない」というのは、おそらく若いからまだ経験が少ないのだと受け取った。私の経験として、聞こえる部下に囲まれて働いていたとき、上司から「日下部は背中で見せることができるマネージャーでかけがえのない存在だ」と言ってもらったこと。みなさんも絶対にそのような経験ができる 때가くる。だから自信を持ってやってほしい。

廣田／聞こえないと困ることがいろいろあると思うが、それを聞こえる人と共有することが大事。たとえば東京オリンピックに向けて誰にでも伝わりやすいピクトグラムを作ろうとする、その時に聞こえない立場からの意見が役に立つのではないか。世の中で何かシステムを作る時、ろう者だから気づくことを伝え、貢献できるのだと思っている。



図6 筆者（日下部）  
（写真）

司会／年長の講師お二人が手を挙げて回答してくださった。長いご経験から「できることが少ない」という言葉を否定したかったのではないかと思います。実際、同志社大学の支援室業務では、私は日下部さんに助けてもらいすぎて、彼が聴覚障害ということを忘れてしまっている。社会に出れば多くの先輩たちが、周囲の人の支えとなって働いている。そのことをぜひ知っていただきたい。

#### 【質問5（フロアから志磨村さんへ）】

キャリア形成の中には育児も入ってくると思いますが、子育てをするとき、どんな工夫

や困難があるか、体験を伺いたいです。また、通訳の力を借りる場面はどんな時でしょうか。

志磨村／聴覚障害当事者研究という活動の中で、先日、聞こえない母親の子育てをテーマに発表した。目下の困難は、子供から発信される SOS に気づけないこと。子どもが熱を出したとき、妹から「呼吸が荒いね」と言われて初めて苦しいのだということがわかったり、周りの人に指摘してもらいながら、自分で気付けるポイントを増やしている。情報保障については、保育園の関係で特に意識している。保護者の懇談会などでは手話通訳を入れる場と入れない場を区別して、あえて通訳を頼まず親同士で話す時間を増やしてわかってもらえるようにするなど、工夫している。

### 【質問 6（フロアから講師へ）】

高校生の難聴の息子が、友だちとの何気ない会話が聞きづらくて、話を合わせて笑ってしまったり、将来に対しても不安になっています。そうした漠然とした不安を抱える瞬間があったとき、どのように対処したり、気持ちを整理しているのかお聞きしたいです。

濱松／私も高校時代にはよくわかったふりをしていた。無理をしてその場に合わせることで多く、同じように地域の学校に通っている難聴の友人と、悩みを話し合うこともあった。今は、相手ともっときちんと関わりたいと思うなら諦めないし、そんなに関係を深めなくてもよいと思えばそのままでもいい、という判断をしている。本音や愚痴を言える友達はあるに多くないが、一人でもそういう相手がいることが、とても大事だと思う。

日下部／私が同志社大学の社会人大学院にいたとき、仲の良い同級生が授業の後に楽しそうに話していたので、私は彼らの邪魔をしてはいけないと思い挨拶もせずに帰ったことがあった。翌日、「昨日はどうしたの？探したんだよ」と言われ、「聞こえない自分が入っていった楽しい時間を奪っては申し訳ないので帰った」と答えると、当時 25 歳くらいで私よりずいぶん若かった同級生から「情けない」と怒られた。日下部からそんなふうに使われている自分たちが情けない、そして遠慮している日下部自身も情けない、と。友達の中での寂しさは私もよくわかる。でも友達なら遠慮せず、正直に「なにになに？」と突っ込んでいけばいい。それで関係がだめになるなら、もうお友達でいなくてもいいではないですか。自分から関係を閉ざすのではなく、広げるほうに賭けて良いと思う。私も若い頃はそれができなかったが、若い子に叱られながら学んできた。

### 2.4 まとめ（各講師からの一言）

井坂／お互いわかり合うための努力をすること、魅力的な自分、興味を持ってもらえる自分を作っていくこと、自分からコミュニケーションしようという思いを大切にすること。

これらは何も特別なことではなく、みんながともに生きていく当たり前の営みだと思う。

濱松／今日のために今までの自分のことを振り返り、これからどうあるべきかを考えるい







い機会になった。他の講師の方々のお話は、自分のキャリア形成にとって、とても為になったと思う。

志磨村／今の姿からは想像できないと思うが、高校を卒業するまで聞こえないことを友だちに話さず、分ちあう仲間もいなかった。今はしんどくても、わかってくれる人はいるはずなので、明日に希望を持って社会に一步踏み出すチャレンジを続けてもらいたい。

廣田／今日のような企画が、私の学生時代にあったらよかったと思う。先輩の生き方を見ることはとても大きな学びになる。そして、私たちが次の世代にとってのロールモデルになっていくことも大事だ。点と点だった皆さんが、今日を機に「線」になり、さらに広い「面」のようにつながってほしい。一緒に明るい未来を作っていけたら嬉しいと思う。

日下部／先ほど、「大切にしている言葉はありますか」という質問用紙をいただいたので、その答えを最後のメッセージにしたい。

「子らよ子ら。書を読み解せ文を書け。人の目を見て言葉語れよ。」

これは阿久悠という作詞家の言葉で、これこそがコミュニケーションの本質だと思い、大事にしている。皆さんにも共有していただけたら嬉しい。

司会／今日、私が学んだのは「本当に大切なことは何かを考える」ということ。今何が大事か判断して実行に移す力は、今のところ AI には備わっていない。AI 時代がもっと進んだとき、「なんとかする学」という学問が出てくるのでは。「なんとかする力」に長けた講師の皆さんの貴重なお話を、どうもありがとうございました。



図7 会場の様子（写真）

### 3. 到達点と課題（企画コーディネーター：日下部隆則（同志社大学障がい学生支援室））

これまで振り返ってきたとおり、本ワークショップでは聴覚障がいという共通点はあるものの、キャリア形成の面に関してはそれぞれ歩んできた中での自信に裏付けられた多様な視点が登壇者した先輩たちから提供された。

聴覚障がいとひとくくりにはされる中でも、その聞こえのレベルもコミュニケーションの手段も多様であるのと同様に、それぞれの歩みの過程もそのキャリアの方向性もまた多様であることが改めて確認された。同時に、障がいを理由（言い訳）にして自分で限界を決



めてしまうのでもなく、人まねをするのでもなく、適切な支援を受けながら自分で判断した道を歩めばよいという、キャリアを広げようと模索する、いや模索というきれいな言葉ではなく、まさに今聞こえないことにもがき苦しむ後輩たちへの同じ苦労を味わってきた先輩からのあたたかいメッセージに満ちた時間であった。

登壇者からのメッセージに共通するのは、聴覚障がいという自力ではいかんともしがたい属性があるものの、それは決してその人を特徴づけるすべてではなく単なる部分に過ぎないものであり、聞こえないことを言い訳にするのではなく自らの努力を拠り所にしてその人らしさを発揮するキャリアを描いてきた、司会者の表現を借りるならばそれぞれの局面で、一方的に助けてもらうばかりではなく、時には助ける側に回りながら、「なんとかする力」を発揮して「なんとかしてきた」という経験則であった。

事務局としては、この時間で提供されたのは登壇者それぞれの経験にもとづく具体的なアドバイスであったことへの感謝と同時に、それ以上に障がいがあっても決して怖気ることなく、社会の荒波を乗り越えようとする気概や実際に乗り越えてきた自信という、いわばマインドセットともいえるものを提供できたことを喜ぶたい。

もちろん、今回登壇した先輩たちの経験もまた多くの聴覚障がいのある人のキャリアの一例に過ぎないことは忘れてはならない。このワークショップは、適切な支援を受け、キャリア開発している同障者の情報がキャリア開発に悩む後輩たちをどれほど勇気づけるかを改めて確認する好機となったが、このような事例を今後どのように収集、発信して共有していくか。

コンプライアンスとは言いつつも、ややもすれば過度な個人情報保護とも言える状況も増えている中で、社会で活躍する同障者の具体的な情報がますます得にくくなっている。これを決して言い訳にするのではなく、情報を出し渋る先には必要に応じて「それはオーバーコンプライアンスでしょう。過剰な制約ではないですか？」と問いたす気概をもって適切に情報収集し、それを適切かつ有効な方法で提供することも事務局の大きな役割であり今後の課題であると再確認して本稿を閉じる。

### 参考文献

- [1] 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) エンパワメント事業ワーキンググループ (2012) 聴覚障害学生のエンパワメントモデル研修会報告書、筑波技術大学、204.
- [2] 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (2015) 聴覚障害学生のエンパワメント事例集、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク、2015 年 2 月、  
<http://www.pepnet-j.org/web/modules/tinyd7/index.php?id=42&tmid=354>  
(2020 年 3 月 6 日閲覧)





参考：当日配布（企画趣旨）

## 「先輩から学ぼう！—大学での学びとキャリア形成—」

企画コーディネーター：日下部隆則（同志社大学 障がい学生支援室 コーディネーター）

司 会：阪田真己子（同志社大学 障がい学生支援室長）

講 師：濱松晃大（関西学院大学 3 年）

志磨村早紀（元早稲田大学 障がい学生支援室 コーディネーター）

廣田喜春（公益社団法人大阪聴力障害者協会）

井坂行男（大阪教育大学 教育学部 教授）

### 企画趣旨

聴覚障害学生が多様な学部にて在籍して学び、さまざまな職種に就くようになった。一方で進学を控えた高校生や大学に入った学生が、自身のキャリアについて考える機会は乏しい。また、自身の障害とどのように向き合い進路を定め、働いていくかについて考える際、同じ聴覚障害当事者の先輩の経験や生き方から学ぶところは多い。

本企画では、聴覚障害学生が、社会人の先輩から経験や思い、生き方について話を聞く機会を設け、それをもとに自身のキャリアプランを具体的に描いていくワークショップを実施する。

### スケジュール

13:00 ～ 13:10 企画主旨説明・講師紹介

13:10 ～ 14:30 パート1 リレートーク

1. 高校生の声 井坂行男
2. 聴覚障害学生から 濱松晃大
3. 社会人から① 志磨村早紀
4. 社会人から② 廣田喜春

14:30～14:40（休憩 10 分間）

14:40～15:20 パート2 質問タイム

15:20～16:00 パート3 ワーク

参考：当日配布（スライド等）

聴覚障がい当事者の視点からの覚書（前日企画 3 に寄せて）

企画コーディネーター 日下部 隆則

聴覚障がい者のコミュニケーション上の課題は、いつ、どんな状況であっても音声のコミュニケーションを助けてもらう必要があることだと思います。解決の方向性の一つは、「この人とコミュニケーションしたい」と思ってもらうことにあり、これは聞こえる人達どうしのコミュニケーションであっても同じはずです。

では、「この人とコミュニケーションしたい」ひいては「この人をもっと知りたい」「コミュニケーションを助けてあげたい」と思う気持ちは、どのようにして起こるのでしょうか。

そこで、この時間は「キャリア」のことを考えるとともに（ここでは「キャリア」を、高校生であっても大学生であっても、これからどんな道を歩んでいくのか……ということと仮置きしておきます。たとえば、高校生だったら、大学でどんな勉強をしたいのか？そのために、今どんな勉強をする必要があるのか。また、大学生においては、どのような職業人生を歩んでいきたいのか。そのために必要な準備は何なのか等。）、私たちが音声を使ったコミュニケーションの場に置かれたときの前提条件となるであろう、それぞれの環境や個性に合った「助けてもらう力」についても考えたいと思います。

私たちが障がいゆえにできないことを「助けてもらうこと」は決して否定的にとらえられるものではなく、むしろ真正面から向き合ってよい、積極的に考えてよいものだとの考えのもとでこの講座は用意されています。周りの人に、「この人のことをもっと知りたい」「コミュニケーションを助けてあげたい」と思ってもらえる力は、これからのキャリアにおいて必ず大きな武器になると私は考えています。

具体的には一人一人の個性によって助けられ方は違いますし、助けてもらう状況によっても、助けられ方は違ってきます。ただ、どんな時であっても、助けてあげたいと思わせる人には曰く言い難い「何か」があるのも事実だろうと思っています。（実際に多くの聞こえる人がこのように言っています）

では、それは何でしょうか。どんなことでしょうか。今日、この場で何かを解決するというよりも、今日の場でヒントを得て、それぞれが持ち帰って育ててほしいというのが企画コーディネーターの思いです。

そのために、それぞれの講師がお話の中にいろんなヒントを用意してくれているので、聞き流すのではなく、一人一人が「取り入れられること」「フックにかかったこと」を必ずキャッチアップ（食いついて）してほしい。そのためには、ノートをとることは絶対条件だろうと思っていますので、気兼ねせずにどんどんノートをとってほしい。また、積極的に質問や意見をアウトプットしてほしい。今日のこの場は、どんな質問や意見のアウトプットもしても受け止めてもらえる、「安心できる、安全な場」としたいので、どうぞみなさんのお力添えをお願いします。





最後に。今日この時間が有意義なものになるかどうかの成功のカギは、それは参加された皆さんの側にあると思っています。お一人お一人の力でよい時間になしてください。よろしくお願いします。

企画コーディネーター

日下部 隆則(くさかべ たかのり)

(現職)同志社大学 学生支援センター 障がい学生支援室 チーフコーディネーター(2018.11月～)

(兼職)同志社大学 全学共通教養教育センター 講師

(前職)富士ゼロックス株式会社→富士ゼロックスサービスクリエイティブ株式会社

聴覚障がい当事者(混合性難聴2級)。聞くときは筆談をお願いし、話すときは口話がメイン。

障がいを受け入れることができなかった大学時代の「暗」。入社後に先輩のアドバイスによって障がいを受け入れ、入社後10年目に進んだ社会人大学院時代の「明」。これらの経験から、障がいを受容あるいは従容(しょうよう)する勇気と一歩前に進む勇気の重要性を体験的に知る。同時に、「助けてもらう」ことへの感謝と「助け合うこと」の重要性がメタボリックなその身体にすりこまれている。

その成果は、前職での「聞こえる部下」だけの組織における「聞こえない上司」としての長いマネジメント経験に現れると同時に、担当する授業や依頼される講演、そして何より日常のコーディネート業務を通して、これまで助けてくださった方々への「恩返し」の意識のもとでアウトプットされている。

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## リレートーク

<トークをきく時のルール>  
・大事と思ったことはメモしながらきこう  
・「もっと詳しく聞きたい」と思ったことや質問したいことが出てきたら、どんどん質問カードに書こう

1

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## <質問カードについて>

話を聞きながら、質問がある人はぜひ書きだしておいてください。後で集めます。

- ・特定の講師に聞きたい、答えてほしいこと  
→質問カード
- ・参加者みんなに聞いてみたい、共有したいこと  
→ふせん

2

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## ①大学を目指す高校生・ 大学に入学した新入生の声 —PEPNet-Japanに寄せられる相談から—

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）事務局

3

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## PEPNet-Japanの相談対応事業について

- ・2007年～ 事務局のある筑波技術大学が中心となって聴覚障害学生支援に関する相談への対応を実施
- ・2016年 障害者差別解消法施行 相談の増加・多様化
- ・2019年 PEPNet-Japanのネットワークを活かした相談対応体制をスタート※

※相談対応事業について、詳しくは、「第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム当日資料」p34をご覧ください。

4

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 高校生(や、その保護者)からの相談\_1

大学に入学したらノートテイクなどの支援がほしいけれど、まだ合格もしていないうちから、入学後のことを相談してもいいのでしょうか。

「入学後は何か支援を受けられますか？」と大学に相談したが、できるとできないことがある、と言われた。もし支援が得られなかったら自分で頑張るしかないのでしょうか…。

5

PEPNet-Japan

第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

## 高校生(や、その保護者)からの相談\_2

入学予定の大学にパソコンノートテイクをつけてほしいと要望を伝えたいが、うまく説明できない。参考になる資料や教材がほしい。

大学進学を目指している。  
支援体制が充実している大学はどこか、教えてほしい。

6

PEPNet-Japan



## 高校生の相談から見てくること

- 「支援のある大学に行く」のではなく、聞える学生と同じように、「自分の学びたい分野や専攻がある大学」「やりたいことができる大学」をまず選んでほしい。  
(それができるように、大学側も努力したい)
- 大学で学びたいことを学び、やりたいことを実現するために、どんな支援が利用できるのか、自分にはどんな支援が必要なのか(合っているのか)を知って、周りに伝えてほしい。  
(大学側も一緒に考えていきたい)

7

PEPNet-Japan

## ①大学を目指す高校生・ 大学に入学した新入生の声を 受けて

井坂行男（大阪教育大学 教育学部 教授）

8

PEPNet-Japan



前日企画  
**先輩から学ぼう！**  
—大学での学びとキャリア形成—

関西学院大学3年 濱松晃大

## 濱松 晃大

- ・ 関西学院大学総合政策学部国際政策学科3年
- ・ 兵庫県立神戸聴覚特別支援学校小学部卒業のち、私立の中高一貫校に通い、2017年関西学院大学入学
- ・ 所属：Eco-Habitat関西学院・全日本ろう学生懇談会
- ・ 趣味：海外旅行

## 関西学院大学



## 国際政策学科

### 国連が掲げる3つの課題

1. 国際社会における平和構築
2. 国際発展と開発
3. 人権の擁護

## 志望動機

- ・ 国際協力に興味がある
- ・ ソーシャルビジネスについて学びたい
- ・ フィールドワークに参加してみたい

## 特徴

### 多彩なフィールドワーク

- ・ 幅広い領域で行われている独自のプログラム

### 独自の英語教育プログラム

- ・ 週4日・ネイティブスピーカーの教員





## 関西学院大学の支援体制

- ・ノートテイク
- ・パソコンテイク
- ・ビデオ教材の文字起こし・字幕挿入
- ・機器の使用(UDトーク等)
- ・定期試験等の配慮
- ・個別相談

## 普段の授業では、、、

- ・パソコンテイク2名+ノートテイク1名体制(IPトーク)
- ・全ての授業で情報保障のサポートを受けている
- ・友達と一緒に授業を受けにくいというデメリット
- ・「専門用語が多い」・「板書無し」なので、サポートは無くってはならない大切な存在

## ゼミでは、、、

- ・海外研修参加必須(現地でのコミュニケーション方法)
- ・先生と面談を重ね、配慮してほしいことを伝える(席の配置、グループディスカッションの進め方等)

## 英語の授業に関して、、、

情報保障のサポートを受けない という選択をとった

### 理由

少人数のクラスで、学生同士のペアワークが多い授業なのでサポーターが間に入ると、周りとの間に距離が出来ると考えたため

ペアの学生にあらかじめ聴覚障害について説明する

先生のところに定期的に質問しに行く・個人面談

多少分からないことがあっても気にしない

リスニングは免除してもらい、代替授業を受ける

## 自分らしい助けられ方とは

出来ないことがあるのは当たり前

- ・どのようなサポート・支援があれば、やりたいことが出来るか
- ・状況に応じて、ベストだと思う方法を主体的に選択すること

## 不安＝就活・進路

- ・自分の持つ聴覚障害という特性とどのように向き合っているか
- ・周囲とどのようにしてコミュニケーションをとるべきか

第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 前日企画

## 「先輩から学ぼう！－大学での学びとキャリア形成－」 社会人の立場から（その①）

元 早稲田大学 障がい学生支援室  
志磨村 早紀

1

## 自己紹介・きこえの推移

- ◆宮崎県宮崎市出身
- ◆小学校～高校まで地域の学校で教育を受ける  
↓
- ◆早稲田大学人間科学部健康福祉科学科 卒業  
↓
- ◆国立障害者リハビリテーションセンター学院  
言語聴覚学科 卒業 言語聴覚士免許取得  
↓
- ◆名古屋大学学生相談総合センター 障害学生支援室  
↓
- ◆早稲田大学スチューデントダイバーシティセンター  
障がい学生支援室（～2019年9月）

2

## 自己紹介・きこえの推移

- ◆保育園  
右耳が聞こえていないことを自覚
- ◆小学校2年時  
親へ聞こえないことを伝える（右：90dB 左：45dB）
- ◆中学校2年時  
補聴器装用を試みる（右：100dB 左：60dB）  
しかし、挫折
- ◆大学2年時  
補聴器（左）の常時装用を開始（右：105dB 左：75dB）
- ◆現在の聴力 右：115dB 左：90dB  
※難聴の原因は不明（遺伝子検査実施中）

3

## 何を学んで、何をしたかったのか？

### 「言語聴覚士になりたかった」

- － 言語聴覚士養成課程のある大学へ行くのか？
- － 大学卒業後に専門学校へ行くのか？
- － 大学選択の基準は？決め手は？
- － 勉強はそこそこに、サークル活動に熱中
- － 国リハでは、嫌というほど勉強漬けの毎日…

4

## 自分らしい「助けられ方」とは？

### 「助けられ方」…？？

- － 人の手を借りないと生きていけないのは、  
変えられない現実
- － 「助けられる」という前提でいると、苦しくなる
- － 「支え合って生きている」ということ
- － 「自分も誰かの支えになっている」という  
経験をもつこと
- － 自分から周りに還元していく姿勢

5

## 自分らしい「助けられ方」とは？

- ◆支援者との関係性（大学時代）
  - － 能動的に支援を「使う」
  - － 支援者と一緒に、より良い方法を考える
  - － 主体はあくまでも「自分」
- ◆クラスメートとの関係性（国リハ時代）
  - － クラスメートのサポート（そもそも皆STを目指しているし）
  - － 目標に向かってみんなで助け合うという雰囲気
- ◆人と人との関係性だから、、、
  - － 相手に寄り添い、相手の立場を考えられる想像力

6





## 聴覚障害とどのように向き合うか？

自分のきこえのことを知ってもらい  
一緒に気持ちよく働きたいから

● 基本的なこと

1. 聴力について

聴力は40（デシベル）という単位を使って表します。これは聴覚の健全な単位でも表します。

聴力を表す単位…

単位	聴力	聴覚
0dB	聞こえる人の聴力の限界	
40dB	通常の話し声	
60dB	普通の話し声	
90dB	車の走行音	
110dB	電車の走行音	
130dB	飛行機のエンジン音	

となり、このように40dBの間に10dBの差があります。聴力の範囲は115dBです。これは聴覚を参考にすると、通常の話し声でも聞こえないというように聞こえることがあります。つまり、聴力40dBの範囲の範囲で聞こえないということがあります。

2. 補聴器について

● 補聴器は耳にのみ装着して使います。

● 補聴器は耳に入る音を大きくしてくれますが、ことばを聞き取りにくい状況では、次のような例が挙げられます。

● 聴覚の範囲、補聴器を装着すると、普通の話し声程度の大きさの音が聞こえるようになります。補聴器を装着すると聞こえやすくなります。

さいごに…

このリーフレットを読まれて、分かりにくいと感じたこと、疑問に思ったこと、もっと詳しく知りたいことなどありましたら、遠慮なくお寄せください。

皆さんとより良く、確かなコミュニケーションをとっていただくことができるように努めます。

どうぞ、今後ともよろしくお付き合いをお願いします。

早稲田大学 障がい学生支援室  
志磨村 早紀（しきむら さき）  
〒169-8555  
新宿区早稲田1-6-1 3号館1階  
E-mail: s.shimura@kurenaei.mazda.jp

平成26年4月17日 作成

志磨村 早紀の聞こえについて

7

## 聴覚障害とどのように向き合うか？

### ● 志磨村の日常生活でのコミュニケーション

#### ① ことばを話すことについて

- 幼少期は聴覚が良かったこともあり、ことばを話すことは可能です。
- ただ、聴覚の影響によって、発した音が耳に聞こえたりすることもあります。
- 自分の発音を自分の耳ではフィードバックできないので、聞き取れなかった際や、誤りに気づくのは大変です。ご了承ください。

#### ② ことばを聴くことについて

- 補聴器に入る音声と、相手の口の動きを頼りに、話の内容を理解しています。
- 静かな環境で1対1の対面での会話であれば上記の方法で会話の理解は可能です。
- しかし、音を聞き取り口の動きを見たりすることは集中力が必要で、手話や文字など視覚的な補助手段があると、より楽にことばを理解できるようになります。



ことばを聞き取りにくい、理解しにくい状況としては、次のような例が挙げられます

- ★ マスクをしていたり、下を向いて話されるなど口の動きが見えにくい時  
→ 口元が見えるように話していただくと助かります。マスクを外せない時は筆談をお願いします。
- ★ （補聴器をつけていない）右耳側からの音や声はとて聞こえにくい時  
→ 横に並んで話す際は、私の左側（補聴器がついている側）に立ってくださいと、お話ししやすくなります。
- ★ 飲食店など騒がしい場所で会話する時  
→ いつもよりやや大きめの声で話すと話しやすいです。お店はできる限り静かなところだと嬉しいです。食べる・飲む、大好きなのでお話しください！
- ★ 複数人での会話など話し手が特定しにくい時  
→ なるべく発言は1人ずつ、まだお話しされる前に挙手などで私の注意を引いて話していただくと助かります。
- ★ 後方からの呼びかけ、周囲での会話のやり取りなど、私の視界や注意から外れている時  
→ 顔を向けて、視界に入るなど、私の注意を引いてくださると、気づきやすくなります。

### ● お願いしたい配慮

- 電話ができなため、やり取りはメールでお願いします。メールのレスポンスは早いです！
- 少人数（～6名）の打ち合わせであれば、特に支援は不要です。口元を見せてほしいお話しいただければ理解できます。最初に、自分が聞きやすい座席を指定していただけると幸いです。
- 大人数での打ち合わせ、会議、講習会等の場合は、支援が必要になります。具体的な支援として…
- ・ パソコン通訳  
支援者が音声情報をPCでタイピングしながら文字に交換
- ・ 手話通訳  
リアルタイムで伝わるので、フェイスブックなどに最適
- ・ 音声認識システム  
誤認識もありますが、学習させていくと有効活用できます。
- ・ FM補聴システム  
専用のマイクを使って、補聴器にダイレクトに音声を送ります

規模や状況に合わせて、選択できればと思いますので、ご相談させてください。

8

### 聴覚障害とどのように向き合うか？

どんな人にでも分かりやすく、読みやすく

「こんな風に表示してくれたら嬉しい」

「聴覚障害への理解が深まる」

「みんなが作ってくれたらいいのに！」

→障がい学生へのキャリア支援の一環として作成指導  
聴覚障害のみならず、他の障害でも効果てきめん

9

### 周囲とのコミュニケーションは？

◆ 言わない・聞かないは「ナシ」

- － 自分はどうしてもらいたいのか
- － 相手から聞いてもらうための工夫

◆ 仕事をしていく中で、できること・できないことが分かってくることもある

→自分で限界を決めずに、チャレンジしてみては？

◆ 環境と人に左右されるのは、しょうがない

←聴覚障害の有無に関わらず、誰にでもあること

10





ひろた よしはる  
廣田 喜春

- ・ろうの親、3児の父。
- ・和歌山県で育ち、中学より大阪で暮らす。
- ・親、特に父としてろうの先輩としての「背中（生き方）」を見て、考えさせられて、生きている日々。

<ターニングポイント>

12 歳 転校  
15 歳 進路（自己選択、自己決定）  
18 歳 君が代・国旗掲揚  
19 歳 （大学）情報保障  
21 歳 父の死

<人生フロー>

大学受験  
┌───┐  
経済 国文 福祉  
│ │ │  
│ ? ?  
就職  
│  
結婚  
│  
出産（育児）  
│  
転職  
│  
現在

小さな社会イコール家族（両親・親戚）から「共生」の意味を学ぶ・考える  
アイデンティティ：イコールノット「健常者」「普通」「当たり前」、イコール「ろうあ者」

転職1回、アルバイト経験と正社員（正職員）、勤務先・内容の異動

→日々精進、生涯学習、ハングリー精神

「悔しい」想いが「怒り（エネルギー）」を生み出す。

他人に頼る・信じるのが、「分からない」ことを解決していく

限定・制約イコール社会的構造の問題

「できること」を知るイコール「未来を知る・拓く」に繋がる。常に現在進行形で。

真の意味で、「自己選択」と「自己決定」そして「責任」「使命」

仲間、そして組織として動く

<職場でのコミュニケーションについて>

手話通訳や要約筆記→手話通訳・要約筆記等担当者の委嘱助成金（障害者介助等助成金）

ほかに、障害者の雇用に関しては「特定求職者雇用開発助成金」などがある。



## <活動歴>

全日本ろう学生懇談会

公益社団法人 大阪聴力障害者協会

(近畿ろうあ連盟、一般財団法人全日本ろうあ連盟・世界ろう連盟アジア地域)

聾学校 PTA (単 PTA、近畿地区聾学校 PTA 連合協議会、全国ろう学校 PTA 連合会)

4

聴のポイントをつかもうⅡ 一語語を見て要約しよう

見て要約2

この要約学習では既のまより手話のポイントを一つ一つ、要約(他の言葉で表現)する学習を行います。要約学習を通して、聴く能力の向上を図ります。

読み取りのポイント: まず、話し手の要約や伝えたいことを把握し、要約は日本語に換えて表現することです。ここでは、廣田さんが「教育」について、体験を話します。ろう学校での生活から感じたこと、一語語を聞いたこと、要約をつかんで、要約しましょう。

廣田さんが「教育」について話します

手話を見て要約しましょう

私/ろう学校/生活/私/感じる/2つ(指さし)/2つ(指さし)/1つ(指さし)/私/ろう学校/場所/聴く/手話/で/受ける/で/いる/私/必要/理由/私/高校/と/だから/仕方がない/私/聴く/来る/ある/数学/プリント/持って/来る/次/同じ/教わる/とき/また/新しい/四リ/プ/繰り返す(表情)/結果/尋ねる/尋ねる/方法/他/それ/社会/所/渡される/しかし/私/わからない/とき/特々/コミュニケーション/だから/聴く/受ける/さ/ちゃんと/だから/私/条件/私/想/1つ(指さし)/2つ(指さし)/私/みんな/みんな/みんな/みんな/だから/行く/良い/言う/手話/持ってくる/持ってくる/持ってくる/でも/私/自分/抵抗(表情)/家/家/近い/大学/良い/健聴/かまわない/近い/良い/みんな/言われる/ろう/専門/大学/言う/場所/遠い/だから/私(指さし)/行く/不要/不要(表情)/近く/良い/私/考える/最終的/先生/みんな/理解/協力される/協力される/もらう/家/近い/辺り/健聴/大学/試験/受ける/結果/合格/成功/した/言う/流れ/立つ/考える/やっぱり/自分/選ぶ/選ぶ/また/自分/決める/非常に/私/大切/それ/ため/やっぱり/いろいろ/情報/もらう/もらう/もらう(繰り返し)/上/自分/私/将来/人生/進める/決める/非常に/大切/私/思う/私/それ/ため/やっぱり/いろいろ/情報/もらう/もらう/もらう(繰り返し)/上/自分/私/将来/人生/進める/決める/非常に/大切/私/思う/

手話通訳Ⅱ (厚生労働省手話通訳者養成カリキュラム対応) テキスト

社会福祉法人 全国手話研修センター 発行

## 特集 ろうイクメンと運動



子どもたちと全力で遊ぶのもイクメンの役割

いの弱点をそれぞれがカバーすることが、円滑な家事分担のコツではないかと思っている。例えば、私は洗濯が苦手なので(特に洗剤の分量の調整はいまだに習得できず)、妻が率先して洗濯してくれるが、虫の駆除は私の担当、というように。

今は落ち着いたが、子どもの夜泣きが一番大変だった。3人が一斉に泣いた夜はさすがに睡眠不足になったことも。一番下の子どもの妻があやし、上と2番目は私があやした。この時期に私が出張しなければならぬときは妻に苦労をかけた。家にいる

季刊 MIMI 2012 秋 137 号 P28 一般財団法人 全日本ろうあ連盟 発行



## 質問タイム

<質疑応答の進め方>

- ・質問カードの内容に、講師の皆さんが答えます。
- ・ふせんの質問から、いくつかピックアップして誰かから回答します。
- ・次に、カード以外の質問を受け付けます。聞きたいことがある人は挙手してください。

※質問タイムは、全員が情報を共有しながら進めます。  
発言する人は前に出て、手話通訳や文字通訳がスムーズに行えていることを確認しながら話してください。

9

PEPNet-Japan

## ワーク

<ワークの進め方>

- ・講師の話聞いたので、次は皆さんが自分のキャリアを描いてみます。

- ・①「10年後の自分」を書いてください。  
(どうしても10年後が想像しづらい人は、「3年後」「5年後」などに変更しても構いません。)
- ・② ①で書いたことを実現するために、今からできることを考えて、具体的に、実際にどんな行動をするのか書いてみてください。

10

PEPNet-Japan

## ワークシート

氏名	所属
10年後の自分 (必ずしも10年後でなくても構いません。3年後、5年後などでも構いません。)	
達成したい目標	達成したい目標
達成するための行動	達成するための行動
達成するための行動	達成するための行動
達成するための行動	達成するための行動
達成するための行動	達成するための行動
達成するための行動	

聴覚障害学生は「10年後のキャリアやコミュニケーション、  
“助けられる力”について

支援者や友人の方は「10年後の支援の  
仕事や聴覚障害者とのコミュニ  
ケーション、関わり方」について

11

PEPNet-Japan

氏名

第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム  
前日特別企画「先輩から学ぼう！」

聴覚障害学生用

## 10年後の自分

「こんな仕事に就いている」「こんな力を身につけている」  
「こんなことに熱中している」など...

必要な力を身につけるために今日から実行できるアクション

キャリア形成・キャリアアップに  
関すること

支援の使い方・助けてもらうカ・  
コミュニケーションに関すること

--

--

--

--

--

--

講師や仲間からの意見・コメント、その他気づいたこと





氏名

第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム  
前日特別企画「先輩から学ぼう！」

教職員・支援学生用

## 10年後の自分

「支援やコーディネートでこんなふう to 仕事をしている」  
「支援者としてこんな力を身につけている」  
「聴覚障害者とこんな交流(コミュニケーション)をしている」

必要な力を身につけるために今日から実行できるアクション

キャリア形成・キャリアアップに  
関すること

支援・コミュニケーションに  
関すること

--

--

--

--

--

--

講師や仲間からの意見・コメント、その他気づいたこと

## 前日特別企画 学生交流企画

毎年シンポジウムに参加して下さる学生さん達が楽しみにしてくださっている企画が、「学生交流企画」です。今年は全日本ろう学生懇談会の方々にご協力を頂き、企画を進めました。全国各地から 72 名の参加があり、大変盛況でした。

今回は「普段とは逆の立場になって情報保障をやってみよう・受けてみよう!」をテーマに、普段ノートテイク等の支援を利用している聴覚障害学生がノートテイク役になり、手話での講演を聞こえる学生さんに伝えるためのノートテイク・パソコンノートテイクを担当してもらいました。手話が分からない参加者のために、講演内容は同時に文字でも表示し、ノートテイク役の学生だけがその字幕を見て伝えて頂きました。体験の後には筆談でのグループディスカッションを進め、情報保障の感想、共有した問題点の改善案の提案を付箋や模造紙を活用しながら話し合いました。グループでの話し合いの結果はスライドにまとめ、グループごとに発表を行い共有しました。それらを聞いて、最後には「自分が意識すること or やってほしい情報保障ベスト3を作ろう!」というカードに各自が記入し、各大学に戻って実行できるようにお土産にしてもらいました。

夕食の時間も惜しまれるほど交流は盛り上がり、再会を約束して解散となりました。今後も内容を変えながら交流企画を実施しますので、多くの方のご参加をお待ちしています。



図 1 全体説明の様子 (写真)



図 2 ノートテイク体験の様子 (写真)



図 3 熱心なディスカッションの様子 (写真)



図 4 夕食を食べながら  
交流する様子 (写真)

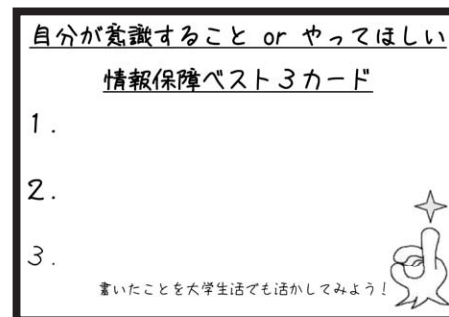


図 5 情報保障ベスト3カード

# 聴覚障害学生支援に関する 実践事例コンテスト 2019 受賞ポスター



.....  
SYMPOSIUM 2019





# 宮城教育大学しょうがい学生支援室

TEL・FAX : 022-214-3651 E-mail : csd@adm.miyakyo-u.ac.jp

## 前進

### ～共に歩むために～

これまでは、利用学生・支援学生・運営スタッフ間で互いに言いたいことを言い合える環境ではなかった。そこで今年は互いの距離を縮め、悩みや不安、考えを共有する場を設けて活動をしてきた。今後も共に足並みをそろえ、支援の発展につなげていきたい。

#### 令和版DVD作成

新たに活動を始める学生に対し、より分かりやすく親しみを持ってもらえるよう、テイク活動を紹介するDVDを作り直した。

#### テイクPadの作成

テイクの活動をもっと知ってもらうため、新たに3部作成。今後も継続的な作成を予定している。

#### クリスマス会

大学史上初となるクリスマス会を実施予定。和やかな場で交流を深める。

#### 反省会

後期や来年の活動に向けて、運営スタッフ・支援学生・利用学生で反省点や改善策を話し合った。

#### 練習会の実施

新人テイカーを含めた練習会(基礎的内容、実践的内容、模擬授業形式)を行い、レベルアップを図った。

#### 顔合わせ会

支援学生・利用学生が30人ほど集まり、ゲームを行うことで交流し、親睦を深めた。



# 関西大学

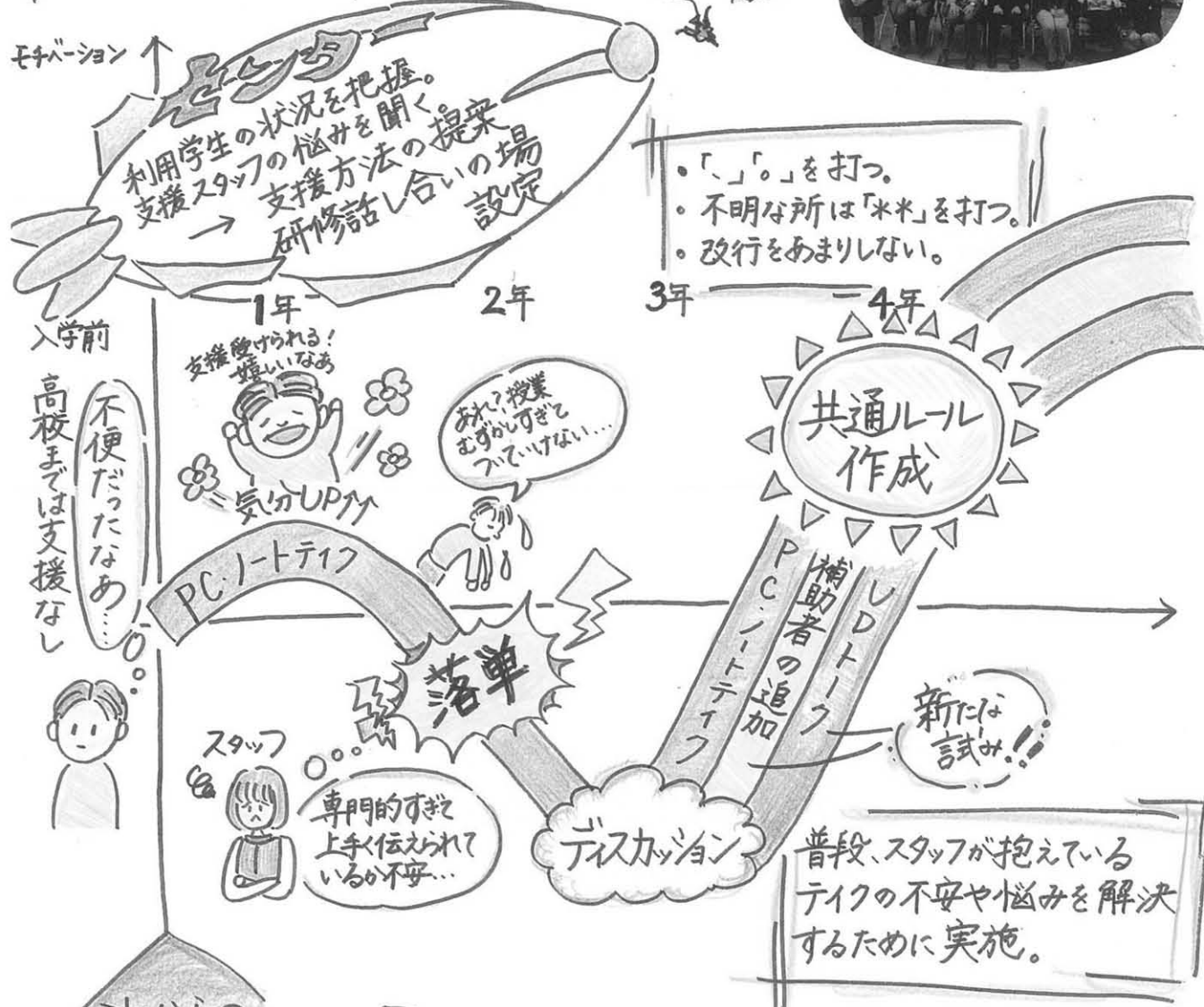
学生相談・支援センター

TEL 06-6368-1373

E-mail shien@ml.kandai.jp



## 利用学生とスタッフどうやる支援 ～4年間の歩み～



### これからの 課題

利用学生とテイクの「ガンバリ」や工夫だけでは限界がある！

教員への働きかけ・理解促進 ※テイクだけで完全に情報保障できるわけ  
ではない！

「どう働きかけるか」←利用学生にとっても課題！





大阪教育大学  
OSAKA KYOIKU UNIVERSITY

障がい学生修学支援ルーム

# 共に描こう！支援の花

## 「伝える」手段

- ・ルールを決める
- ・講習会動画をMoodleにあげる
- ・検討したことを在学学生ガイダンスで伝える
- ・日々の共有



教員や普段支援に関わっていない学生に向けて、支援やテイクのことを伝える

## 支援ルーム外

文化祭での活動を見直し、もっとたくさんの方により興味を持ってもらう

## 勉強会の開催

情報共有手段のさらなる活用

活動の改善と拡大

## 協力学生

- ・参加者、講師を増やす
- ・練習できる機会の提供
- ・普段のテイクで広める

学びを伝え  
学び始める

学びを  
広める

輪を  
広げる

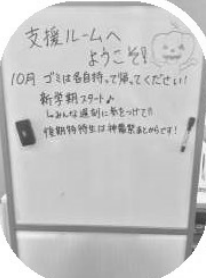
- ・活動／企画を引き継ぐ
- ・参加者を増やす

## 利用学生



- ・支援の現状や事柄を伝える
- ・より良い支援を目指して、必要なら支援の在り方を変えていく

## 全体の「伝え合い」



メール、LINE、  
在学学生ガイダンス、  
Moodle

「伝える」手段、  
「伝え合う」場が  
欲しい！

## テイクお仕事紹介

授業の困りごとを  
一緒に解決したい！

- ・PCテイク特待生
- ・集中講座

スキルや意識を  
伝えたい！

- ・文化祭（年2回）
- ・ルーム紹介動画
- ・Moodle

支援やルームの事  
を知って欲しい！

- ・テイク勉強会
- ・手話勉強企画
- ・表現方法の検討

ニーズからより良い  
支援を考え続け、全  
体で共有したい！

- ・新入生ガイダンス
- ・支援機器体験紹介

支援方法の共有  
がしたい！



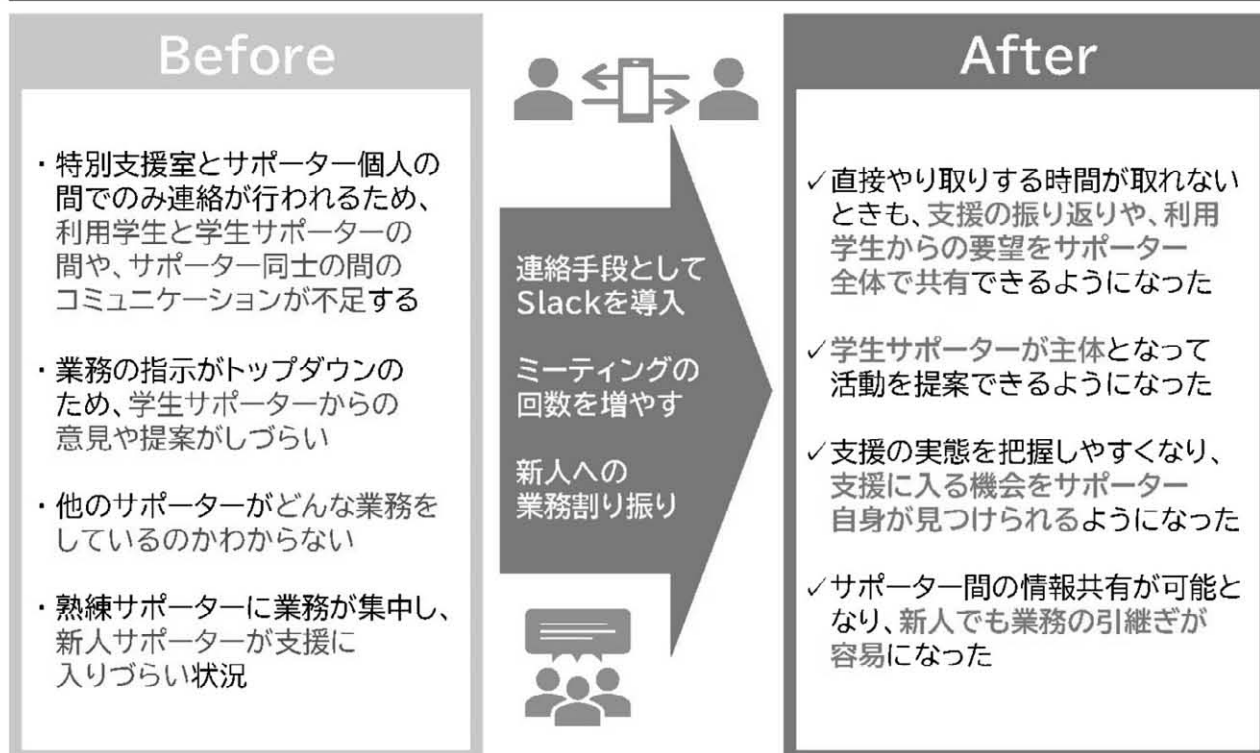


東北大学特別支援室利用学生・学生サポーター

## 利用学生と学生サポーターの『連携』

利用学生・熟練学生サポーター・新人学生サポーターへのインタビューを通して、利用学生と学生サポーターの連携強化のために実施したこと・その結果・今後の課題をまとめました。

### 支援の質の向上を目指した連携強化



### インタビュー:それぞれの立場からみる今後の課題

利用学生	熟練サポーター	新人サポーター
<p>イベント等でサポーターと直接顔を合わせる機会を増やし、さらなる連携強化を図る</p> <p>利用学生もサポーターの募集・勧誘にかかわる</p>	<p>利用学生との支援外の交流を深め、支援の質の向上を図る</p> <p>「一緒に並走」の感覚で支援できるようにしたい</p>	<p>情報の見える化を行い、全員が共有・閲覧できる環境整備を行う</p> <p>最初は誰でも不安であることを前提に、熟練サポーターから失敗例・トラブル例を多く学ぶ</p>



# 九州ルーテル学院大学 障がい学生サポートルーム



## 支援機器の効果的な使用方法 —利用学生から見た現状と課題より—

TEL:096-341-1168

FAX:096-273-7166

Email:support@klc.ac.jp



コミュニケーション  
(マイクと送信機)  
PC テイクの様子



コミュニケーション  
(スピーカー)

### 支援機器の効果的な使用方法とは...

<p><b>PC テイク</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●利用学生、支援学生の全員で機器の使用について理解する(相互理解の深める)</li> <li>●話の内容を正確に理解し要約し伝える</li> <li>●状況等もそのまま伝える</li> </ul>	<p><b>コミュニケーション</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●事前にマイクとスピーカーの適切な距離を教員、利用学生、支援学生で把握する</li> <li>●実際に利用した学生が、不具合の対処方法をまとめ、全体共有する</li> </ul>
<p><b>UDトーク</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●事前に利用学生、支援学生が専門用語等を登録しておく</li> <li>●支援学生が、誤変換等の修正ができるようにする(技術の向上)</li> </ul>	<p><b>映像文字起こし</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●支援学生が文字起こしをする際に、場面の切り替わりをはっきりさせる</li> <li>●データ作成とデータの送信方法についてのマニュアルを作成し、周知をする(実践中!!)</li> </ul>



コミュニケーション  
(受信機と送信機)

あ!



PC テイクとUDトーク  
(タブレット表示)

### 利用学生から見た課題は...

**映像文字起こし**

- 映像と文字起こしの両方を見ながら内容を理解する大変である
- 文字起こしの送信方法を全員が理解していない

**PC テイク**

- PCの不具合が多い
- 話者の話すスピードによる文字情報の読み取りづらさ
- 健聴学生とのタイムラグ(笑うタイミングのズレなど)

**UDトーク**

- 誤変換が多い
- 誤認識が多い
- 修正がうまくできない

**コミュニケーション**

- 電波や話者との距離による不具合
- 機器の不具合時の対応を把握できていない

映像文字起こし  
(サポートルームにて)



ん〜。



聴覚障がい学生の5人に4つの支援方法のよさと課題を聞きました!

## 第 15 回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 実行委員

大会長	筑波技術大学	学長	石原 保志
実行委員長	大阪大学	キャンパスライフ健康支援センター センター長	守山 敏樹
副実行委員長	大阪大学	キャンパスライフ健康支援センター 相談支援部門長	太刀掛 俊之
事務局長	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター	白澤 麻弓
幹事	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター	萩原 彩子
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター	中島 亜紀子
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター	磯田 恭子
実行委員	大阪大学	キャンパスライフ健康支援センター	望月 直人
	大阪大学	キャンパスライフ健康支援センター	中野 聡子
	大阪大学	キャンパスライフ健康支援センター	楠 敬太
	大阪大学	キャンパスライフ健康支援センター	藤本 富美枝
	大阪教育大学	教育学部	井坂 行男
	関西大学	学生相談・支援センター	藤原 隆宏
	関西学院大学	学生活動支援機構 総合支援センター	藤田 望
	関西学院大学	学生活動支援機構 総合支援センター	生野 茜
	京都大学	学生総合支援センター 障害学生支援ルーム	村田 淳
	京都大学	学生総合支援センター 障害学生支援ルーム	辻井 美帆
	京都産業大学	障害学生教育支援センター	仲兼久 知枝
	京都産業大学	障害学生教育支援センター	脇坂 紗帆
	同志社大学	学生支援センター 障がい学生支援室	土橋 恵美子
	同志社大学	学生支援センター 障がい学生支援室	日下部 隆則
	同志社大学	学生支援センター 障がい学生支援室	佐久川 陽介
	同志社大学	学生支援センター 障がい学生支援室	山本 理絵
	特定非営利活動法人ゆに		窪崎 泰紀
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター	三好 茂樹
	筑波技術大学	産業技術学部	河野 純大
	筑波技術大学	聴覚障害系支援課	松久保 大作
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター	石野 麻衣子
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター	吉田 未来
	筑波技術大学	障害者高等教育研究支援センター	関戸 美音

(所属はシンポジウム実施当時)



日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム報告書 第2号  
「『声』に寄り添う・『参加』を支える」  
(第15回 於：大阪大学)

発行：第15回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム実行委員会

発行日：2020年3月26日

編集：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）事務局

〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター

※本事業は、筑波技術大学「聴覚障害学生支援・大学間  
コラボレーションスキーム事業」の活動の一部です。



デザイン：松本敬介（筑波技術大学 産業技術学部 総合デザイン学科専攻 学生）

高橋彩加（筑波技術大学大学院 技術科学研究科 学生）

ISSN 2434-6829



国立大学法人

筑波技術大学

**PEPNet-Japan**

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク

日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム報告書（第15回 於：大阪大学）